

(財)大阪府文化財調査研究センター発掘調査報告書 第28集

大阪府南河内郡美原町・松原市所在

丹 上 遺 跡

近畿自動車道和歌山線・都市計画道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書

本文編

1 9 9 8 . 3

大 阪 府 教 育 委 員 会
(財)大阪府文化財調査研究センター

(財)大阪府文化財調査研究センター発掘調査報告書 第28集

大阪府南河内郡美原町・松原市所在

丹 上 遺 跡

近畿自動車道和歌山線・都市計画道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書

本文編

1998.3

大阪府教育委員会
(財)大阪府文化財調査研究センター

序 文

丹上の地名は平安時代の「和名抄」に郷名として、すでに見受けられる。また丹上を含む丹比地域は、反正天皇が「多治比柴籬宮」を居所とし、「多遲比瑞齒別」とよばれたという「古事記」「日本書紀」の記述をはじめ、文献史料に「丹比」「多治比」「多遲比」として多数登場する。この地に本拠をおいたと推測される丹比連、丹比真人等の有力豪族の活躍の記録や、黒姫山古墳、丹比廃寺、黒山廃寺、式内丹比神社等が、当時の歴史的環境を保存して当時を偲ばせてくれる。

今回の調査によって、奈良時代から平安時代にかけての住居地域の一面が確認されるなど、各時期の遺構遺物が検出されている。特に、当該遺跡の北端を古代の第一級官道、竹内街道が通り、加えて郡衙遺構の存在等が推測されている郡戸遺跡に隣接することから、今回、検出された極めて規格性の強い奈良時代の掘立柱建物群は、官衙的な性格を帯びた中心的な建物群と推測されるなど、当該地域の古代史解明に大いに寄与するところとなった。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、大阪府土木部はじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

平成10年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野 一 美

は し が き

近畿自動車道と歌山線並びに都市計画道路松原泉大津線建設予定地内の埋蔵文化財の発掘調査は、昭和59年から本格的に財団法人大阪文化財センター（当時）が受託し、同年には真福寺遺跡の調査を、昭和60年度には、丹上遺跡の発掘調査を開始しました。丹上遺跡の所在する大阪府南河内郡美原町丹上の地は、古くから開かれた地として府下でも重要な位置を占めています。ちなみに、北には陵墓参考地としての大塚山古墳、南には史跡黒姫山古墳の二大前方後円墳が存在し、また条里型地割が一带によく残っていることでも知られています。また丹上遺跡の北端付近には、当時の難波と大和を結ぶ幹線道路としての竹内街道が通っています。このような重要な位置に所在する丹上遺跡については、過去に発掘調査が実施されたことはなく、その性格や内容は不明でした。

今回の調査では、主に飛鳥時代から鎌倉、室町時代にかけての遺構が検出されました。また、部分的には、先土器～縄文時代早期の石器の秀品も検出されています。

これらの結果は、当地の古代史に新しい知見を加え、今後の埋蔵文化財の保護、保存等を含めた施策の一助になるものと確信いたしております。

最後に、終始協力をおしまれなかった大阪府土木部、日本道路公団ほかの関係各位に深く感謝いたしますとともに、今後とも当センターにより一層の御支援を御願います次第です。

平成10年3月

財団法人大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は、近畿自動車道と歌山線および都市計画道路松原泉大津線の建設に伴う大阪府南河内郡美原町丹上・松原市立部所在の丹上（たんじょう）遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府教育委員会および(財)大阪文化財センター（当時）が、日本道路公団大阪建設局および大阪府南部特定建設事務所(当時)の委託を受けて1985年4月～1986年3月、1986年9月～1987年2月、1986年11月～1987年3月、1994年2月～1994年3月、1995年10月～1996年3月まで実施したものである。調査期間中は多くの関係各位の御協力を賜った。ここに記して感謝の意を表する。
3. 整理事業および本書作成は、大阪府教育委員会指導のもと、(財)大阪府文化財調査研究センターが1996年4月から1997年3月にかけて実施した。整理作業は、調査部長 井藤徹、南部調査事務所長 藤田憲司、整理係長 石神幸子、整理係主任技師 立花正治（写真）が担当した。
4. 現地発掘調査は(財)大阪文化財センターが実施し、各年度の担当者は下記のとおりである。（役職は当時のとおり）

1985年度 丹上（その1）

業務課長：中西靖人、業務第2係長：國乗和雄、技師：石神幸子（内業）、
技師：金光正裕、技師：松山 聡 業務第1係技師：片山彰一（写真）

丹上（その2）

業務課長：中西靖人、業務第2係長：國乗和雄、技師：石神幸子（内業）、
技師：寺川史郎、技師：鵜柄俊夫、技師：江浦洋

1986年度 丹上（その3・5）

業務課長：中西靖人、業務第2係長：國乗和雄、技師：寺川史郎、
業務第1係技師：片山彰一（写真）、業務第3係技師：立花正治（写真）

丹上（その4・6）

業務課長：中西靖人、業務第2係長：國乗和雄、技師：金光正裕、
技師：鵜柄俊夫、技師：江浦洋、業務第1係技師：片山彰一（写真）

丹上（その6-2）

調査課長：中西靖人、調査課第3係主幹兼係長：赤木克視、
第3係主任技師：入江正則

1992年度 丹上（その7）

調査課長：中西靖人、調査課第3係主幹兼係長：赤木克視、
第3係主任技師：小野久隆

1994年度 丹上（その8）

調査課長：中西靖人、主幹兼調査第3係長：赤木克視、
調査課付主任技師：金光正裕、第3係主任技師：入江正則、
技師：立花正治（写真）

丹上（その9）

調査課長：中西靖人、主幹兼調査第3係長：赤木克視、

主任技師：入江正則、主任技師：平井貞子（写真）

5. 調査にあたり、次の機関に写真測量および自然科学的分野の分析を実施した。

航空写真測量

ワールド航測株式会社

土器胎土分析（化学分析・X線回折）株式会社 第四紀地質研究所

6. 調査及び本報告書作成にあたっては日本道路公団大阪工事事務所、日本道路公団藤井寺管理事務所、大阪府土木部、大阪府土木部富田林土木事務所、同松原建設事業所等の協力を受けるとともに、大阪府教育委員会、美原町教育委員会をはじめ関連機関ならびに下記の方々のご指導・御教示を賜った。

芝野圭之助・田中和弘・松岡良憲・阪田育功・大塚康宏（大阪府教育委員会）

足立俊彦・芝田新吾・岡本利幸（松原市教育委員会）、

西口陽一、村上富喜子、岡本圭司（財）大阪府文化財調査研究センター）

7. 発掘調査時には以下の学生ならびに非常勤職員の協力を得た。

友田和男、中上康雄、表原隆文、比嘉道代、田中千賀、矢吹有里子、金矢尚美、

岩田麻子、長谷川喜也、保田敬一郎、大年啓司、浅井絹江、前田晴美、

宇佐美雅己、十万克美、内山泰紀、三浦孝一（以上学生）、久禮孝志、川辺稔、

吉川長太、山本順治、宮川昭幸、松本昭子、内山信子、宮武府子 松村より子、

西田久美、林一歩、石田慎、山本真理

8. 本報告書を作成するにあたり、以下の補佐員・補助員の協力を得た。

秋好洋子、秋山敦子 今橋朱美、上松敏子、瓜崎恵美子、緒方優子、沖野節子、

小原睦子、加茂幸彦、久禮孝志、坂本けい子、追田信子、佐藤陽子、滝野百合子、

立石京子、徳田栄子、中村慎子、中山武代、納谷好子、西川アサエ、二宮サキ子、

松井晴美、松永しのぶ、三島けい子、壬生省吾、八木孝子、山尾温子、山口純枝、

山本晶子 横谷安也子、若井キヨ子

9. 引用参考文献は各節の末尾に、科学的な分析の引用参考文献は各節の末尾に記した。

10. 本調査に関わる写真、スライド、実測図などは（財）大阪府文化財調査研究センターにて保管しており、広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 本書は既に刊行されている概要報告書をもとに、各調査区の成果を総合し、未報告の調査成果を補って作成したものである。
2. 本報告書の個別の遺構・遺物の記述は基本的には既に刊行された概報の記述をもとにおこなっている。
3. 本書で使用した座標は国家座標第Ⅵ系、標高はT. P. (東京湾平均海水準) を基準としている。
4. 本書で使用した遺構名・遺構番号のうち、概報で既に報告しているものは概報と同じ名称・番号を用い、遺構番号の先頭に調査区(1から9)の番号を付している。本報告書ではじめて報告する遺構は、調査時点で付与した番号をそのまま記載している。ただし、調査時点で小区域ごとに遺構番号を付与していた場合は調査区の次に小区域の記号を記している。すなわち、1986年度の(その1)調査区のAトレンチで検出された井戸1は「井戸1A-1」と表記する。

また、概報での報告番号と、今回報告する番号との重複を避けるため必要なものについては遺構番号対照表を作成して巻末に記載している。
5. 本書で使用した遺物番号は、新たに付したものである。既に概報で報告したものととの対照表を巻末に掲載した。
6. 丹上遺跡の略称はTNJであり、遺物の注記・現地調査図面等には略称を用いている。

目 次

序 文

はしがき

例 言

凡 例

第1章 調査の経過	1
第2章 遺跡周辺の地形環境	3
第1節 地形環境	3
第2節 人々の活動	3
第3章 調査成果	11
第1節 基本層序	11
第2節 弥生時代以前	13
第3節 古墳時代の遺構と遺物	16
第4節 飛鳥時代の遺構と遺物	20
第5節 奈良時代の遺構遺物	32
第6節 平安時代の遺構と遺物	54
第7節 中世の遺構と遺物	66
第8節 近世以降の遺構と遺物	74
第9節 微化石分析	80
第4章 考察	90
丹上遺跡周辺の古道と地割	90

挿 図 目 次

- 第 1 図 丹上遺跡調査区位置図 (5000分の1)
- 第 2 図 天の川水系の変化 (原図 足利健亮)
- 第 3 図 丹上遺跡周辺土地条件図 (25000分の1)
- 第 4 図 丹上遺跡周辺地形図 遺跡分布図 (25000分の1)
- 第 5 図 大和・河内の古道 (原図 岸俊男「古道の歴史」1970)
- 第 6 図 土層断面模式図
- 第 7 図 丹上遺跡出土石器 (2分の1)
- 第 8 図 丹上1号墳
- 第 9 図 古墳時代の遺構 (20分の1) と遺物 (4分の1)・遺構位置図 (1000分の1)
- 第 10 図 溝7-23出土遺物 (4分の1)
- 第 11 図 溝7-23・24・25・26・65 土坑7-33平面図 (200分の1) 断面図 (40分の1)
- 第 12 図 溝1-11・12 溝6-1平面図 (1000分の1) 断面図 (40分の1)
- 第 13 図 溝1-4・5・6・7平面図 (1000分の1) 断面図 (40分の1) 出土遺物 (4分の1)
- 第 14 図 溝1-8・9・11出土遺物 (4分の1)
- 第 15 図 溝1-17・2-3平面図 (1000分の1) 出土遺物 (4分の1)
- 第 16 図 円筒埴輪棺平面図・断面図 (20分の1)
- 第 17 図 棺転用円筒埴輪 (6分の1)
- 第 18 図 溝2-2・14・33・35・6-2平面図 (1000分の1) 溝2-2・14・33出土遺物 (4分の1)
- 第 19 図 溝2-102・103・104・115・116平面図 (1000分の1) 溝2-102出土遺物 (4分の1)
- 第 20 図 溝2-53・56・58・59平面図 (1000分の1) 断面図 (40分の1) 出土遺物 (4分の1)
- 第 21 図 掘立柱建物1-1~6・8配置図 (200分の1)
- 第 22 図 掘立柱建物1-1平面図・断面図 (100分の1)
- 第 23 図 掘立柱建物1-2平面図・断面図 (100分の1)
- 第 24 図 掘立柱建物1-3平面図・断面図 (100分の1)
- 第 25 図 掘立柱建物1-8・9平面図・断面図 (100分の1)
- 第 26 図 掘立柱建物1-4平面図・断面図 (100分の1)
- 第 27 図 掘立柱建物1-5平面図・断面図 (100分の1)
- 第 28 図 掘立柱建物1-6平面図・断面図 (100分の1)
- 第 29 図 柱穴掘形出土埴 (6分の1)
- 第 30 図 掘立柱建物1-7平面図・断面図 (100分の1)
- 第 31 図 A~B地区 奈良・平安時代遺構配置図 (500分の1)
- 第 32 図 ビット・土坑出土遺物 (4分の1)
- 第 33 図 掘立柱建物2-1平面図・断面図 (100分の1)
- 第 34 図 掘立柱建物2-1ビット1遺物出土状況 (20分の1)

- 第35図 掘立柱建物2-1ピット1出土遺物(4分の1)
- 第36図 掘立柱柱穴群6-221平面図(100分の1)
- 第37図 掘立柱柱穴群6-222平面図(100分の1)
- 第38図 橋2-1平面図・断面図(100分の1)
- 第39図 橋2-1ピット出土遺物(4分の1)
- 第40図 土坑1-3断面図(40分の1)
- 第41図 土坑1-1平面図・断面図(40分の1)
- 第42図 井戸1-1平面図・断面図(40分の1)・出土遺物(4分の1)
- 第43図 船橋遺跡出土土師器甕
- 第44図 土坑6-2-71平面図・断面図・遺物出土状況(10分の1)
- 第45図 土坑6-2-71出土遺物(4分の1)
- 第46図 土坑2-41平面図・断面図(20分の1)・出土遺物(4分の1)
- 第47図 土坑2-42遺物出土状況(20分の1)
- 第48図 土坑2-42出土遺物(4分の1)
- 第49図 不定形土坑1-1・2出土遺物(4分の1)
- 第50図 不定形土坑2-1出土遺物(4分の1)
- 第51図 溝3-2位置図(3000分の1)・平面図(200分の1)
- 第52図 溝3-2断面図(40分の1)
- 第53図 掘形群1-204平面図・断面図(100分の1)
- 第54図 溝1-13・14・15平面図(200分の1)・断面図(40分の1)
- 第55図 溝1-18・19・20平面図(500分の1)
- 第56図 掘立柱建物2-2平面図・断面図(100分の1)
- 第57図 掘立柱建物2-3平面図・断面図(100分の1)
- 第58図 掘立柱建物2-4平面図・断面図(100分の1)
- 第59図 掘立柱建物2-4・6-12・13 橋2-1配置図(250分の1)
- 第60図 掘立柱建物6-12平面図・断面図(100分の1)
- 第61図 掘立柱建物6-13平面図・断面図(100分の1) 土坑6-1平面図・断面図(40分の1)
出土遺物(4分の1)
- 第62図 土坑2-45平面図・断面図(20分の1)
- 第63図 掘立柱建物2-5平面図・断面図(100分の1)
- 第64図 ビット185・188平面図(10分の1)・断面図(20分の1) 出土遺物(4分の1)
- 第65図 掘立柱建物2-6平面図・断面図(100分の1) ビット391遺物出土状況(40分の1)・出土遺物(4分の1)
- 第66図 掘立柱建物2-7ピット238出土遺物(4分の1)
- 第67図 掘立柱建物2-7平面図・断面図(100分の1)
- 第68図 掘立柱建物2-8平面図・断面図(100分の1)
- 第69図 掘立柱建物2-10平面図・断面図(100分の1) 柱穴平面図・断面図(40分の1) 出土遺物(4分の1)

- 第70図 掘立柱建物2-11平面図・断面図(100分の1)
- 第71図 掘立柱建物2-9平面図・断面図(100分の1)
- 第72図 掘立柱建物2-8~11 土坑2-132配置図(1000分の1)
- 第73図 土坑2-132遺物出土状況・土層断面図(40分の1)
- 第74図 土坑2-132出土遺物(4分の1)
- 第75図 井戸2-19平面図・断面図(40分の1)
- 第76図 土坑出土遺物(4分の1)
- 第77図 中世遺構位置図(5000分の1)
- 第78図 陌線Ⅳ 坪境溝平面図(1000分の1)・断面図(40分の1)
- 第79図 陌線Ⅴ 溝1-18・19・20平面図(200分の1)・断面図(40分の1)・出土遺物(4分の1)
- 第80図 陌線Ⅵ 坪境溝2-5・6・7平面図・断面図(500分の1) 溝2-5木樋平面図(40分の1)・同断面図(20分の1) 出土遺物(4分の1)
- 第81図 坪境溝2-5出土遺物(1・5・7・8・9)・溝2-7出土遺物(2)・井戸2-14出土遺物(3・6)・攪乱溝(4)(4分の1)
- 第82図 溝1-21平面図(200分の1)・断面図(40分の1) 出土遺物(4分の1)
- 第83図 溝2-62・63・64平面図(200分の1)・断面図(40分の1) 出土遺物(4分の1)
- 第84図 近世以降の坪境と地割(5000分の1)
- 第85図 近世井戸(1)平面図・断面図(80分の1)
- 第86図 近世井戸(2)平面図・断面図(80分の1)
- 第87図 近世井戸(3)平面図・断面図(80分の1)
- 第88図 近世井戸(4)断面図(80分の1)
- 第89図 微化石試料採取位置図
- 第90図 丹上遺跡(その1)(その2) 試料花粉ダイアグラム
- 第91図 大和・河内の古道(原図 岸俊男「古道の歴史」1970)
- 第92図 大阪平野南部の条里遺構と景観(原図 足利)
- 第93図 大津池を貫く東北東-西南西古道痕跡と周辺(原図 足利)
- 第94図 摂津・河内・和泉の国境(原図 服部)
- 第95図 条里地割の辺長が115.5m以上の坪の分布と古道(原図 金田)
- 第96図 溝3-2(1000分の1)
- 第97図 陌線Ⅰ(溝5-1)(1000分の1)
- 第98図 陌線Ⅶ(溝2-64)(1000分の1)
- 第99図 真福寺遺跡足利脱斜向大津道(大保道)
- 第100図 調査区以南の東西道路
- 第101図 調査区以南の道路間隔測定位置(5000分の1)
- 第102図 古代道路の測設距離と尺度
- 第103図 竹内街道以南の条里地割(2.5万分の1)
- 第104図 丹上遺跡周辺の斜向地割(5000分の1)

付 図 目 次

- 付図1 遺構全体図 北部 (1/500)
付図2 遺構全体図 中部 (1/500)
付図3 遺構全体図 南部 (1/500)
付図4 古墳時代遺構 (赤)・飛鳥時代遺構 (黒) (1/1000)
付図5 奈良・平安時代遺構 (1/1000)
付図6 中世遺構 (1/1000)
付図7 近世遺構 (1/1000)

図 版 目 次

- 図版1 調査区周辺航空写真 (1987年撮影)
図版2 丹上1号墳 a. その5調査区検出部分 b. その7調査区検出部分・題出土状況
図版3 その7調査区 飛鳥時代遺構
図版4 その7調査区 飛鳥時代遺構 a. 溝7-23遺物出土状況 b. 溝7-23・25
図版5 その9調査区 全景
図版6 その9調査区 遺構 a. 大溝9-1 b. 大溝9-1・溝9-5 c. 井戸9-1・落込9-4 d. 大溝9-1底 足跡
図版7 その3調査区 遺構 溝3-2 (北から) 溝3-2断面
図版8 その1調査区 全景 北半部 (南から) (右上の森は河内大塚山古墳) 南半部 (北東から)
図版9 その1調査区 遺構 a. A区全景 (左が北) b. A区南半部 全景 (上が北)
図版10 その1調査区 遺構 B区全景 (上が北)
図版11 その1調査区 遺構 B区全景 (上が北)
図版12 その1調査区 遺構 C区全景・I区北端部全景 (上が北)
図版13 その1調査区 遺構 I区・J区 a. I区中央部 全景 (左が北) b. I区南端部 全景 (左が北) c. J区北半部 全景 (左が北) d. J区南半部 全景 (左が北)
図版14 その1調査区 遺構 A区北西部 全景 (上が北)
図版15 その1調査区 遺構 a. A区北西部 掘立柱建物1-1 (右) 掘立柱建物1-2 (左) 検出状況 b. 掘立柱建物1-8・9
図版16 その1調査区 遺構 a. A区掘立柱建物1-2 検出状況 (南から) b. A区掘立柱建物1-8・9 (上)・1-1 (中)・1-2 (下) 全景 (南から)
図版17 その1調査区 遺構 A区北東部 全景 (上が北)

- 図版18 その1調査区 遺構 a. A区北東部 掘立柱建物1-4検出状況(西から) b. 同上全景
- 図版19 その1調査区 遺構 掘立柱建物1-4・溝1-1 全景(南から)
- 図版20 その1調査区 遺構 a. 掘立柱建物1-4底全景(北から)(水路土手部分) b. 掘立柱建物1-4(手前)・1-5(奥)全景(北から) c. 掘立柱建物1-5と溝1-2(北から) d. 掘立柱建物1-5(水路土手部分)(北から)
- 図版21 その1調査区 遺構 a. 掘立柱建物1-5(手前)・掘立柱建物1-6(中央)全景(西から) b. 掘立柱建物1-4(左奥)・1-5(左手前)・1-6(手前)
- 図版22 その1調査区 遺構 a・b. 掘立柱建物1-1 掘形根石 c. 掘立柱建物1-2 掘形断面 d. 掘立柱建物1-6 埴出土状況 e. A区東部 溝
- 図版23 その1調査区 遺構 a. A区南東部 不定形土坑1-1(中央)・不定形土坑1-2(右)(左が北) b. A区南西部 溝1-22(上)(左が北)
- 図版24 その1調査区 遺構 a. B区掘立柱建物1-7 全景(左が北) b. 掘立柱建物1-7・溝1-8・1-9・1-10
- 図版25 その1調査区 遺構 a. B区ピット1-3土器出土状況 b. B区掘形1-7土層断面 c. B区溝1-8須恵器壺出土状況(南西から)
- 図版26 その1調査区 遺構 a. B区溝1-9遺物出土状況(西から) b. 溝1-9遺物出土状況(南から)
- 図版27 その1調査区 遺構 a. B区井戸1-1 全景(東から) b. 井戸1-1遺物出土状況(南から)
- 図版28 その1調査区 遺構 a. B区近世井戸群と溝1-22全景(北から) b. B区近世井戸群と溝1-22全景(南から)
- 図版29 その1調査区 遺構 a. B区近世井戸1-8 井戸枠検出状況 b. C区溝1-22(左端)全景(南から)
- 図版30 その1調査区 遺構 a. C区東部 坪境溝C(北東から) b. C区西部 坪境溝C(南から)
- 図版31 その1調査区 遺構 a. C区南西部 溝全景(南から) b. C区南西部 近世井戸全景(北東から)
- 図版32 その1調査区 遺構 a. C区北東部 全景(南西から) b. C区南東部 全景(北西から)
- 図版33 その1調査区 遺構 a. D区南東部 溝1-17全景(南から) b. 溝1-17 土器集積出土状況(東から)
- 図版34 その1調査区 遺構 a. 溝1-17 円筒埴輪棺南北断面(北から) b. 円筒埴輪棺全景(北から) c. 円筒埴輪棺取り上げ後(東から)
- 図版35 その1調査区 遺構 a. D区不定形土坑1-4全景(北から) b. D区坪境溝D 溝1-18・19・20(東から)
- 図版36 その1調査区 遺構 a. D区近世井戸7敷瓦検出状況(南東から) b. D区 全景(北から)

- 図版37 その1調査区 遺構 a. D区北西部 全景(北から) b. D区北東部 全景(南から)
- 図版38 その1調査区 遺構 a. D区西部 全景(南から) b. D区南西部 全景(南から)
- 図版39 その1調査区 遺構 a. I区溝1-18(中)・1-20(手前)・坪境溝D(陌線V) b. 溝1-20(左) 溝1-18(右) 土師器高台付皿出土状況(西から)
- 図版40 その1調査区 遺構 a. I区溝1-21 全景(西から) b. 溝1-21瓦器出土状況(南から)
- 図版41 その1調査区 遺構 a. I区北端部 全景(南西から) b. I区北半部 全景(北から)
- 図版42 その1調査区 遺構 a. I区濠1-1 全景(南から) b. I区中央部 全景(南から)
- 図版43 その1調査区 遺構 a. I区中央部 全景(北から) b. I区南端部 全景(南から)
- 図版44 その1調査区 遺構 a. J区北半部 全景(東から) b. J区中央部 全景(南から)
- 図版45 その1調査区 遺構 a. J区中央部 全景(北から) b. J区南端 溝1-15(上)・溝1-14(中)・溝1-13(下)(南から) c. 調査風景
- 図版46 その6-2調査区 遺構 建物6-2-222 土坑6-2-71
- 図版47 その2調査区 遺構全景(上が北)
- 図版48 その2調査区 遺構全景(左が北)
- 図版49 その2調査区 古墳時代遺構 a. 溝2-79・80 b. 土坑2-216 c. 土坑2-131
- 図版50 その2調査区 飛鳥時代溝 a. 溝2-115 溝2-116(西半部 北から) b. 同(東半部 西から) c. 溝2-14(西から)
- 図版51 その2調査区 飛鳥時代遺構 1. 溝2-14 2. 溝2-102 3・4. 溝2-3 5. 土坑6-2-28
- 図版52 その2調査区 平安時代遺構 a. 掘立柱建物2-8・9・10・11 b. 掘立柱建物2-3 近世井戸群
- 図版53 その2調査区 奈良・平安時代遺構 a. 掘立柱建物2-1(西から) b. 掘立柱建物2-2(北から)
- 図版54 その2・6調査区 平安時代建物跡 a. 掘立柱建物2-3 b. 掘立柱建物6-13 c. 掘立柱建物2-4
- 図版55 その2調査区 平安時代遺構 a. 掘立柱建物2-5 b. ビット2-188 c. ビット2-185 d. ビット2-391 e. 掘立柱建物2-6
- 図版56 その2調査区 遺構 a. 掘立柱建物2-7 b. F区北東部 全景
- 図版57 その2調査区 平安時代建物跡 a. 掘立柱建物2-8 b. 掘立柱建物2-9
- 図版58 その2調査区 平安時代建物跡 a. 掘立柱建物2-11 b. 掘立柱建物2-10
- 図版59 その2調査区 遺構 a. 溝2-5・6・7 b. 土坑2-45 c. 土坑2-42 d. 土坑2-41 e・f. 土坑2-132
- 図版60 その2調査区 近世井戸 a. E区西半部 b. 井戸2-1 c. 井戸2-2 d. 井戸2-3
- 図版61 その2調査区 近世井戸 a. 井戸2-4 b. 井戸2-5
- 図版62 その1調査区 出土遺物 a1. A区包含層出土サヌカイト製翼状剥片 2. 有舌尖頭器 3・4. I区包含層出土有舌尖頭器 b. 同上 裏面

- 図版63 その1調査区 出土遺物 1. A区包含層出土磨石 2. 石匙 3. 不定形石器 4. 石核(?)
- 図版64 その1調査区 出土遺物 a 1~9. A区包含層出土石鏃 10~12. B区包含層出土石鏃 13・14. D区包含層出土石鏃 15. 刀器 b. 同上 裏面
- 図版65 その1調査区 出土遺物 a 1. A区掘立柱建物 1~6柱掘形 2出土土師器杯 2. 掘形 1出土土師器杯 3. 掘形68出土土師器羽釜 b 1. A区掘形 2出土土 2. 掘形 4出土土 c 1. B区ピット 1~3出土土師器杯 2. 土器埋納ピット出土土師器杯
- 図版66 その1調査区 出土遺物 a 1. B区ピット 1出土須恵器鉢 2. ピット 2出土土師器鉢 b 1. I区ピット 1出土不明銅製品(表裏)(1.7倍に拡大) c 1. A区溝 1~5出土須恵器杯 2. 甕 d. B区溝 1~8出土須恵器広口壺
- 図版67 その1調査区 出土遺物 a 1. B区溝 1~9出土須恵器 小型短頸壺 2・3. 杯 b. B区溝 1~9出土須恵器大型甕
- 図版68 その1調査区 出土遺物 a. B区溝 1~11出土須恵器甕 b 1. D区溝 1~17出土須恵器杯蓋 2. 杯 c. D区溝 1~17出土埴輪筒棺
- 図版69 その1調査区 出土遺物 a 1. D区溝 1~17出土須恵器甕 2. 短頸壺 b. B区土坑 1~5出土土師器皿 c. B区土坑 1~6出土須恵器杯蓋
- 図版70 その1調査区 出土遺物 a. B区井戸 1~1出土土師器甕 b. A区不定形土坑 1~1出土土師器甕 c 1. A区不定形土坑 1~2出土土師器甕 2. 羽釜 3~5. 須恵器杯蓋 6. 杯
- 図版71 その1調査区 出土遺物 a 1. A区不定形土坑 1~2出土須恵器杯蓋 2. 広口壺 3. 甕 4. 土師器鉢 5. 甕 6. 土錘 b. D区包含層出土製塩土器(表・裏)(×90%)
- 図版72 その1調査区 出土遺物 a. A区包含層出土石鈔帯(逡方)(表・裏)(1.6倍に拡大) b 1・2. A区包含層出土須恵器イダコ壺 3. B区包含層出土須恵器イダコ壺 c. A区包含層出土凝灰岩製砥石 d. D区包含層出土埴
- 図版73 その1調査区 出土遺物 a 1. I区溝 1~18 2. D区溝 1~19 3. I区溝 1~1 4. I区溝 1~19 5・6. I区溝 1~21出土中世土器 b. D区溝 1~20出土瓦質甕 c 1. C区中世条里溝 2. C区近世井戸 3. J区ピット出土瓦
- 図版74 その1調査区 出土遺物 a 1. D区溝 1~20 2. I区包含層 3. A区包含層出土フイゴ羽口 4・5. B区溝 1~9出土埴壁片 b. 同上 裏面
- 図版75 その1調査区 出土遺物 a 1~4. D区井戸 1~8出土近世陶磁器 b 1~3. 各区各遺構・包含層出土泥面子 4~16. 磁器片再加工おはじき
- 図版76 その2調査区他 出土遺物
- 図版77 その2調査区他 出土遺物 1. 丹上1号埴出土須恵器壺 2. 須恵器甕 3. 須恵器甕 4. 土坑 2-134出土土師器高杯 5. 土坑 2-216出土土師器壺
- 図版78 その2調査区他 出土遺物 1~6. 溝 7-23 7・13. 溝 2-3 8・9. 溝 2-2 10. 溝 2-14 11. 溝 2-35 12. 溝 2-33
- 図版79 その2調査区他 出土遺物 1~4. 溝 2-53 5. 溝 2-55 6. 溝 2-56 7. 2-IV層 8. 2-III・IV層 9~12. 土坑 6-2・71

- 図版80 その6-2調査区 出土遺物 1~10. 土坑6-2-71
- 図版81 その2調査区他 出土遺物 1~9. 土坑2-41 10~14. 土坑2-42
- 図版82 その2調査区他 出土遺物 1~8. 不定形土坑2-1 9. ビット2-188 10. ビット
2-391 11. 土坑2-89 12. 土坑2-8 13・14. ビット2-613
- 図版83 その2調査区他 出土遺物 1~10. 土坑2-132 11・12. 溝2-5
- 図版84 その2調査区他 出土遺物 1・2. 井戸2-14 4. 溝2-7 5・6. 溝2-5 7.
溝2-63 3・8~13. 遺物包含層

第1章 調査の経過

1975年（昭和50年）、財団法人大阪文化財センター（当時）は大阪府より委託を受けて都市計画道路松原泉大津線建設に先立つ遺跡の分布調査を行った。その結果、丹上付近でも遺物が採集されて、埋蔵文化財包蔵地として周知され「丹上遺跡」と称されることになった。

その後、財団法人大阪文化財センターでは1982年（昭和57年）の1月から3月にかけて、遺構の範囲と埋没深度を知るために、丹上遺跡第一次発掘調査を実施した。調査は、東西幅約60mの道路予定地の東端、中央、西端付近に幅2mの細長いトレンチを3本、南北約800mにわたって設定して行われたもので、旧石器時代～近代にかけての多くの遺物や、多数の遺構が検出され、遺構はほぼ全域に広がっていることが確認された。

以上の結果をもとに、大阪府教育委員会は、府道部分を担当する大阪府南部特定事業建設事務所、高速道路部分を担当する日本道路公団大阪建設局に対し、調査方法と範囲について協議を行った。その結果、府道部分については全面調査としたが、高速道路部分については全面調査の区間と、未調査で現状保存とする区域（遺構が検出されなかった区域）とにわけることとなり、財団法人大阪文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

第1・2調査区は上記四者で、1985年（昭和60年）4月1日に契約を締結し、1985年（昭和60年）4月に契約を締結し、1985年（昭和60年）4月25日～1986年（昭和61年）3月31日まで調査を実施した。なお、調査区間が約800mと長大なため、北側を第1調査区「丹上遺跡（その1）」、南側を第2調査区「丹上遺跡（その2）」として調査を行った。

この調査および、丹上遺跡北側の観音寺遺跡の調査結果から、遺構は途切れることなく広がっていることがわかった。

また、府下の主要幹線道路である府道松原泉大津線と堺羽曳野線、中央環状線の交差する美原ロータリーにおいては、交通渋滞や交通事故多発により、道路改良のための高架工事が大阪府土木部によって計画された。

1987年（昭和61年）、美原ロータリー内の近畿自動車道部分にあたる第3・5調査区の調査を実施した。当初、美原ロータリーは道路が東西南北に通っており、道路建設時に大規模な削平や攪乱を受けていることが予想されたので、幅6m・延長150mの試掘調査を行い、第3調査区「丹上遺跡（その3）」とした。この調査結果により、一部攪乱を受けているものの、ほぼ全面に遺構面が残っていることがわかり、同年引き続き第5調査区「丹上遺跡（その5）」の調査を行った。

さらに、1987年（昭和61年）には第1・2調査区の東西両側を南北に走る農道部分の調査を実施した。第4調査区「丹上遺跡（その4）」は、遺跡南端の延長約100m部分の東西両側の農道部分、第6調査区「丹上遺跡（その6）」は西側の農道部分、「丹上遺跡（その6-2）」は東側の農道部分の調査である。

美原ロータリーの府道部分は、1992年（平成3年）に北半部を調査し第7調査区「丹上遺跡（その7）」とした。1993年（平成4年）には南東部を第8調査区「丹上遺跡（その8）」、南西部を第9調査区「丹上遺跡（その9）」として調査を実施した。ここに第9調査区の調査をもって、都市計画道路松原泉大津線にかかる丹上遺跡全域の調査を完了した。

第2章 遺跡周辺の地形と歴史的環境

第1節 地形環境

丹上遺跡は、大阪府東南部に位置する美原町丹上集落の東に位置し、地形的には中段段丘に分類される平坦地に立地している。この中段段丘面は遺跡の南約5キロにある狭山池を頂点として扇状に展開して北にのびており、北端は大和川を越えて大阪市瓜破付近に至っている。段丘面の東西は狭山池から北に流れ出る東除川・西除川によって開析された谷底平野によって限られ、この谷底平野と中段段丘面の間には南北に長く低位段丘面がとりついている。この中段段丘面の標高は南端の狭山池付近で約70m、北端の瓜破付近で10m程度、丹上遺跡の立地する付近では37～39mである。

この中段段丘面そのものは、もとは古天野川の堆積作用によって形成された扇状地である。(注1) この扇状地を形成した天野川は、現在では非常に小規模な流域面積しかもたないが、かつては石川上流の大きな地域を流域としており、その後30万年ないし3万年前頃に石川上流の滝谷付近での侵食活動によって流域の大きな部分が石川とつながった(河川争奪)結果、現在の姿になったと考えられている。

(注2)

段丘面上には、幾条もの谷が北ないし北西方向に開析されており、この谷筋にそって溜池が築造されている。溜池密度は非常に高いが、このことは降雨量の少なさが原因ではなく、河川争奪によって流域面積が狭小となったことによる水不足に対応した結果であると指摘されている。(注3)

第2節 人々の活動

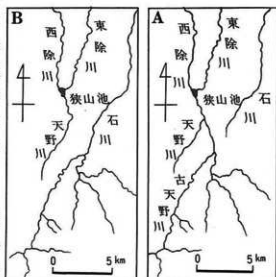
1 原野の時代

西除川・東除川にはさまれた段丘面上で人々が活動し始めたのは後期旧石器時代である。おそらく、2・3万年前には、ナイフ型石器をもった人々がこの段丘面を舞台に活動していたと思われる。その後、縄文時代・弥生時代に至るまで、この段丘面上には集落が形成された形跡はなく、石器(その殆どは石鏃)が出土しているだけである。後章に記載する丹上遺跡の花粉分析結果によれば、地上上面では草本花粉の出現率が低く、アカガシ亜属や針葉樹の花粉が高率を占めることから森林の様相を呈していたと推定される。彼らは丹上遺跡周辺一帯の森林地帯で、弓矢を使って狩猟をおこなっていたのだろう。

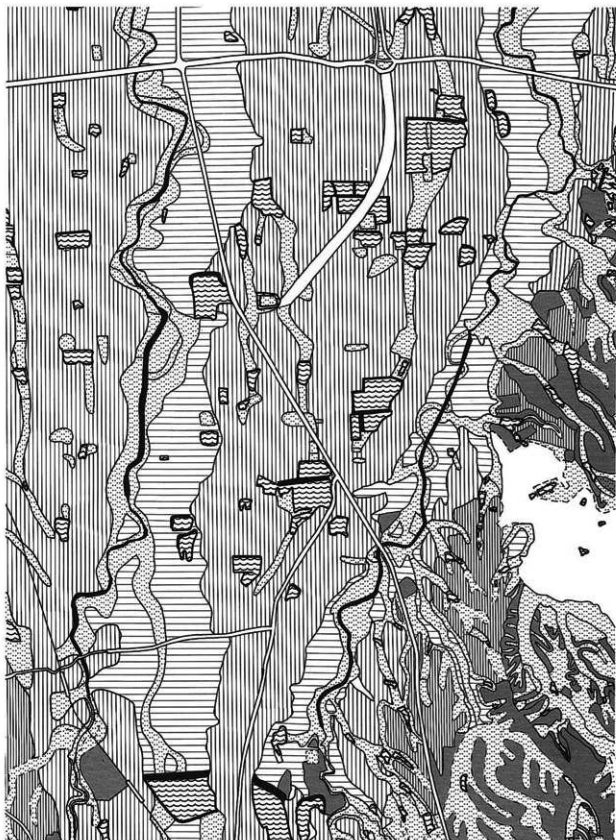
弥生時代になると、この地域のすぐ北に広がる河内平野低地部が、新しい米づくり文化の舞台として華やかに登場する。丹上遺跡のある台地の先端にあたる長原遺跡でも、縄文文化と弥生文化が接触して新たな文化の挿莖が鮮やかにみられるのである。この一方で、丹比地域の弥生時代は依然として縄文以来の旧態をとどめていたようである。やはり当時の人々の主要な活動の舞台とはなっていないかたうたうである。







2 墓域の時代

人の活動の痕跡がはっきりと地面に刻まれるのは古墳時代にはいつてからのことである。古墳時代中期には24領もの短甲や冑など大量の鉄製品が出土したことで著名な黒姫山古墳が築かれる。古市古墳群と百舌鳥古墳群の



第2図 天の川水系の変化(原図 足利健亮)



- | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
|  |  |  |  |  |  |  |
| 1. 段丘高位面 | 2. 段丘中位面 | 3. 段丘下位面 | 4. 溜池 | 5. 平坦化地 | 6. 谷
(黒土堆含む) | 7. 工事中地 |

第3図 丹上遺跡周辺土地条件図 (25000分の1)

中間にあって、単独に立地する大型前方後円墳として、特異な存在である。黒姫山古墳の周辺には、黒姫山北古墳・さば山古墳・けんけん山古墳・さる山古墳といった小円墳が築造される。また、丹上遺跡で検出されたような小型の古墳が単独で築造されている。また、中期後葉には黒姫山古墳の北約3キロに雄略陵にも比定されている河内大塚山古墳が築造される。丹上遺跡の北端でも「丹上1号墳」が築かれており、周辺には埴輪の散布も認められるので、さらにいくつかの古墳が消滅しているのかもしれない。しかし、同時期の集落はこの地域ではまだ確認されていない。

松原市域では、上田町遺跡などの古墳時代集落が散発的に発見されている。また、今回報告する丹上遺跡の発掘調査においても、散発的に井戸などの遺構が検出されてはいるものの集落といった様相は認められない。

古墳時代の丹比地方に関連する文献資料では、「反正天皇」が「たじひのみずはわけ」と呼称されていたこと、また宮殿が「たじひのしばがきのみや」とよばれていたと「記紀」に記載されていることを注意しておく必要がある。ここで「記紀」の和風諡号や、宮殿記事の資料評価をする紙幅も能力もないが、西の百舌鳥古墳群と東の古市古墳群という、大王陵を中心に形成された巨大古墳群の中間地点ともいべき丹比地方が当時の人々の意識に無かったはずはなく、その記憶が「記紀」編纂時またはその原記録編纂時において何らかの形で反映されていたであろうことは確実である。

丹比という地名を負う「丹比連」について検討した直木孝次郎は、「丹比連はもと天皇の側近に奉仕することを任とした氏族」と性格付け、その政治的地位は「交通上・軍事上重要な地域を根拠としていたこと」によって裏付けられ、「反正天皇の時代に宮廷と深いつながりを持ったのかもしれない」と推定している。(注4)このような「丹比連」の性格と、黒姫山古墳出土の武器・武具の様相から想像される軍事的な被葬者の姿を結び付けて考える説は依然として魅力的である。(注5)

いずれにしても、これら文献から推測される丹比地方、特に段丘上面の古墳時代の様相は、少数の墳墓などの遺構を除いて未だ考古学的には確認されていないという状況である。

3 開発の時代

飛鳥時代に入ると、この地域において人々が生産活動を始め、生活の場としてきた証拠が突如として現れる。

この地域の開発にとって何よりも重要な事業は狭山池の築造である。狭山池の築造時期については、従来から文献や池斜面の須恵器窯跡の時期から7世紀初頭ごろと推定されてきた。この推定は、1989年から始められた狭山池の改修事に伴う発掘調査で、事実として確認されることとなった。東樋下層の樋管に使われたコウヤマキの年輪は、616年に伐採されたことを示しており、池が7世紀初頭に築造されたことが確定した。

狭山池の発掘調査を担当した市川秀之は、築造時の北堤の高さが東西の段丘面より低く、「樋から出た水を現在の西除川方面に流すことは困難である」ことなどから、築造時点では沖積地の開発を面的に拡大、安定化させたものと評価している。その後、奈良時代の改修工事によって「堤防が段丘面の高さに達したため、段丘面を掘削して除を設けることが可能となった。」とし、太満池の築造ともあいまって「この地域の段丘上の開発はようやく本格化した。」と述べている。(注6)しかし、狭山池は、築造当初から、段丘面の開発を意図したものと考えるべきである。池の灌漑計画は堤防の高さで決まるのではなく、樋門の位置と高さで決まる。堤防の高さは、主に貯留量にかかわる問題であって、灌漑範囲には大きく影響する。また、堤防の高さによって除けの位置も変わってくるが、除けからの水は常時そこ

からの給水を意図したのではなく、樋門からの給水によるものである。灌漑可能範囲は樋門の高さで決まり、それは、池から段丘崖面を通る水路が段丘面にたどり着いた地点から下流一帯の段丘面上を含む地域であったと考えられる。

文献においても、この時代になると丹比地域に関連した開発行為をしめず記事が頻繁にみられるようになる。『推古紀』には池溝開発や道路整備記事が頻繁にみられ、この時代が国家の大開発の時代であったことを、権力者自らが記憶し記録していたのである。『仁徳紀』の開発記事が『推古紀』の記載と重複することも従来から指摘されており、これらの記事をあわせ考えると、この時期に丹比地方を含めた段丘面の開発が大規模に着手されたことは疑いない。(注6)

考古学的な調査知見としては、平尾遺跡がきわめて重要である。7世紀初頭頃にはあらわれて8世紀中頃で途絶える多数の掘立柱建物を中心とした遺跡で、丹比郡衝とも考えられている。丹上遺跡からはほぼ真南2キロの位置にあたる。(注7)

河原城遺跡は6世紀後葉に東除川に沿った段丘斜面の小開折谷に形成された竪穴住居からなる集落である。集落は飛鳥・奈良時代と継続し、飛鳥時代には掘立柱建物への変化、奈良時代には段丘面上への集落の展開と鍛冶遺構の形成という変化を遂げて8世紀の中頃に終焉を迎える。この地域の古墳時代集落の立地とその変化の様相を示す数少ない遺跡である。

松原市河合遺跡においては、7世紀中頃には掘削され、8世紀後半に埋没する、幅(下段)6~7m、深さ1.6mの直線の大溝が検出されている。調査者は『住吉大社神代記』にみえる「針魚川」にあたると考えている。(注8)

松原市上田町遺跡で検出された大規模な溝「丹比大溝」は、幅10m・深さ3m・断面V字形の2条の溝が「イ」字形に合流しており、段丘面の等高線に平行に掘られたものである。7世紀中頃には掘削されて13世紀ごろに最終的に埋没する。(注9)

丹上遺跡や真福寺遺跡においても、集落跡こそ検出されなかったが、南北1キロにわたる調査区の間ほぼ全体から溝や落込みなどの遺構が検出され、出土遺物も7世紀になると急激に増え、しかも完形品を含んでいることから考えて、周辺に集落が形成されていたことは確実である。

奈良時代に集落がはじめて形成される遺跡が多いこともまた事実である。この特徴は特に松原市域において顕著であって、市川が大きく評価する奈良時代の狭山池大改修は、灌漑区域の拡大と下流域での集落の拡大として結実したとみるべきであろう。

4 古代交通路

飛鳥時代以降のこの地域は、土地開発とともに奈良盆地の宮と難波宮を結ぶ交通要衝としての位置付けが重みを増してくる。もちろん、古墳時代中期においても、先に述べたように百舌鳥・古市両古墳群間、あるいは両古墳群と大和との往来はあったであろうが、古代国家としての内実の整備を進めようとする飛鳥時代以降は、地方の実効的支配においても質的な転換を遂げていったといえる。その施策の重要なひとつが道路網の整備である。

『推古紀』21年条の「自難波至京置大道」は官道としての「大道」の設置である。また『仁徳紀』41年条の「作大道置於京中。自南門直指之至丹比邑」記事も同じ事柄を述べたものであるとすれば、丹比邑はまさに「大道」の通るところである。

官道としての設置記事はないものの、『記紀』には「丹比道」「天津道」「波瀨賦坂(埴生坂)」「黒山丹比坂」「茅渚道」など、丹比地方を通過したと考えられる道路の記事が残っている。(注10)

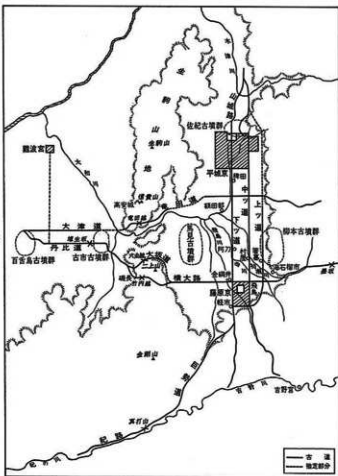
丹上遺跡で検出された奈良時代の大型掘立柱建物も当時の交通に関係する施設であるかもしれない。

それぞれの道がどこを通過していたかについては後の章で研究史にもふれることとして、ここではこの地域の交通路としての重要性に注意しておきたい。

5 条里地割と農村

この段丘上の平坦地は条里地割を良好に留めた地域である。おそらく奈良時代中頃には、この地域一帯を区画する条里地割が施行されていたと推定される。最近までの現地表にその景観をとどめていたような耕地の区画が、一時に施行されたものではないしろ、その基準となった区画線は奈良時代中期までには施行されていたと考えられる。

しかし、狭山池の築造などの国家的開発や行基の指導したような民衆主体の開発にもかかわらず、この付近一帯の農業生産力は必ずしも高いものではなかったと推測される。弘仁12年の太政官符は、交野・丹比両郡の口分



第5図 大和・河内の古道(原図 岸俊男「古道の歴史」1970)

田は地味が瘦せていて旱害を受けやすく連作不可能な「易田」であるから口分田を倍給するように河内の国が要求し、認められたことを記している。(注11)また、『崇神紀』62年条の「今河内狭山埴田水少」の記事も、『記紀』編纂当時の支配層の認識を示しているものであろう。

観音寺遺跡の調査において奈良時代の大溝埋土からソバ属の花粉が検出されていることも当時の土地利用状況の一端を示すものといえる。(注12)

6 鋳物師の里

11世紀末頃には、「河内鋳物師」が文献にあらわれる。有名な『古今著聞集』の話は、河内鋳物師が全国を廻って製品を売っていたことを示している。また求めに応じて移住し、その鋳造技術を駆使したことは、多くの文献や梵鐘の銘文などから知られている。

発掘調査によってもこのことは裏付けられている。

真福寺遺跡では、梵鐘ないしは湯釜を鋳造した遺構や、鋳造に用いたと思われる白炭を焼いた窯が検出されているほか、鍋・羽釜・釜・コップ形容器・磬の鋳型、輪や埴塼などの遺物が多量に出土している。まさに鋳造工房跡というべき遺跡である。

太井遺跡では、熱を受けた土坑・鉢滓・炉壁・輪羽口・取鍋などが検出されている。また鉢滓の分析から、銅製品と鉄製品が鋳造されていたことがわかっている。

余部遺跡では磬や羽釜などの鋳型片、炉壁や輪羽口・焼土が大量に廃棄された土坑などが検出されている。13世紀ごろを中心に操業していたことが確認されている。

日置荘遺跡では炉などの鋳造遺構、鋳滓・鑄羽口・鑄型などが検出されている。

松原市岡2丁目遺跡では、溶解炉と思われる土坑・鑄型を据えた土坑や3.6トンにもほる鉄鋳滓が検出されている。

『美原町史』第3巻所収文獻・銘文に拠って、河内鑄物師の根拠をひろってみると、多治比(丹治)・日置荘・草部(艸部)・草賀部(草可部)・佐山(狭山)・黒山・白坂・丹南郷などがあげられるほか、14世紀後半には堺住山川助頼・堺宿院など、16世紀前半には住吉郡我孫子鑄物師・河州駒ヶ家住人平重長・刑部郡針谷郷などの資料がある。これら資料から、河内鑄物師は美原町ほぼ全域・松原市南部・大阪狭山市の一部・堺市西部を根拠とし、中世後期には堺などの周辺にもひろがっていたことがわかる。

河内鑄物師成立の自然的地理的基盤は、旱害が多いことによって開発が遅れた結果残されていた原野が燃料供給地となり、地盤である段丘の水成粘土が良好な鑄型材料となったことによるものと考えられる。

7 原景観の形成

明治17年2万分の1地形図にみられる、集落とそれをむすぶ街道・周辺の農地とこれを灌漑する水路と溜池といった景観は、近世幕藩体制の確立によって土地制度が基本的に固定された結果形成されたといえる。なかでも、狭山池水の水を受ける流域すべての村々から惣代を出して池水を管理することによって灌漑が安定的になったことが、この地域の農村としての発展の基礎となったことは間違いない。

ただし、灌漑水利慣行の安定化が、十分な灌漑用水の供給と同義でないことも明らかである。丹南郡では明治初期において、実綿・菜種を栽培しており両者で米産額の6割程度の産額があったことからわかるように、水田景観が卓越していたとはいえ、土地条件に応じた経営を行っていたことがわかる。

(注14)

明治初期の地形図から復元される景観は、近世以来大きく変わることなく保存されてきたが、昭和期後半の大規模な開発によって一変し、その結果形成されたのが現景観といえる。明治初期の地形図にみられる近世以来の景観は、現景観の骨格となった「原景観」と言えるであろう。(阪田育功)

(注1) 服部昌之「美原町の位置と地形環境」(『美原町史』第1巻 1999)

(注2) 前田 昇「河内石川谷の段丘地形」(『田中秀作教授古稀記念地理学論文集』1956)

岡 義記「大阪平野南東部の地形と地殻変動」(『地理学評論』34-10 1961)

(注3) 足利健亮「景観から歴史を読む」1998 pp232-238

(注4) 直木孝次郎「丹比連について」(『美原の歴史』第2号 1976)

(注5) 末永雅雄・森 浩一「黒塚山古墳の研究」大阪府文化財調査報告書第1輯 1953. 3

(注6) 市川秀之「発掘成果からみた各時代の狭山池」(『狭山池 埋蔵文化財編』狭山池調査事務所 1998年)

(注7) 瀬川 健他「平尾遺跡の検討」(『古代を考える』2 1976)

(注8) 『河合遺跡』大阪府教育委員会 1987

山本 彰「針魚川小考」(『大阪文化財論集』1989)

(注9) 芝田和也「丹比大溝の発掘調査」(『第8回はびきの歴史シンポジウム 古代の開発』羽曳野市教育委員会 1993年)

松原市域の発掘調査成果全般については、松原市教育委員会芝田和也氏・岡本武司氏からご教示を得たほか、足立俊彦氏から資料閲覧の便宜を図っていただいた。

(注10) 『腹仲天皇即位前記』住吉仲皇子の反乱記事 (『記』墨江中王反乱記事もほぼ同様)

『天武紀』天武元年7月条 壬申の乱の際、坂本臣財・老岐史韓固らの進軍・戦闘記事

『孝德紀』大化5年条 蘇我倉山田石川麻呂追討軍の記事

- (注11) 『類聚三代格』 卷15 弘仁12年6月4日 太政官符
この記載に対し、直木孝次郎氏は河内国の不作と旱害記事を全般的に検討した結果、「特に丹比郡が甚だしかつたとする記事はみられない。」としつつも、「太政官符で丹比郡が『旱害にあいやすい』といっているのは事実とみてよいであろう。」とのべている。(『美原町史』第1巻pp289～290)
- (注12) 『丹上遺跡 (その9) 観音寺 (その4)』(財)大阪文化財センター 1995
- (注13) 『真福寺遺跡 概要報告書』1986大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター
『真福寺遺跡 -近畿自動車道松原さみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書-』1997.3 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財調査研究センター
『太井遺跡 (その1) -調査の概要-』1988.3 財団法人大阪文化財センター
『太井遺跡 (その2) -調査の概要-』1988.3 財団法人大阪文化財センター
『太井遺跡 (その3) -調査の概要-』1988.3 財団法人大阪文化財センター
『太井遺跡 (その4) -調査の概要-』1990.3 財団法人大阪文化財センター
『太井遺跡 (その4ほか) 日置荘遺跡 (その1-2) -調査の概要-』1990.3 財団法人大阪文化財センター
『余部遺跡 府営美原住宅の団地建設工事他に伴う発掘調査報告書』1997 財団法人大阪府文化財調査研究センター
『日置荘遺跡 (その1)』1988.3 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター
『日置荘遺跡 (その5)』1989.3 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター
『日置荘遺跡 -近畿自動車道松原さみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査-』1995.3 大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター
『岡2丁目所在遺跡発掘調査概要報告書』1993.3 大阪府教育委員会
- (注14) 猪飼隆明「明治前期丹南郡の経済的状态」(『美原の歴史』第1号 1975)
猪飼隆明「明治の美原」(『美原町史』第1巻 1999)

第3章 調査成果

第1節 基本層序

丹上遺跡では南北約1kmにわたって調査されたにもかかわらず、遺跡全体が低位段丘面上に位置することもあって、沖積地のような河川堆積による急激な地形環境の変化はない。地層の発達状況は悪く、堆積状況は概ね共通している。これは、各時期における段丘面の開発と利用という人間活動の結果が地層として残されたことによるものであり、少なくとも沖積世以降における地形環境の変化、地層の形成においては人為的要因が自然的要因に勝っていたことを示している。

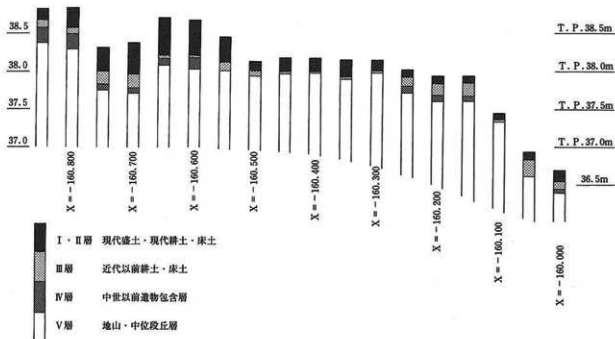
地形変化の主な要因は、耕作に伴う平坦面（水田面）の造成と土壌の形成によるものである。段丘の緩斜面の上部を削平して低い部分に運び平坦面を拡大して耕作地を形成したり、居住に適した生活面を整備したり、自然の窪地を埋めて平坦地を造成するなどの結果、以下に述べるような層序が形成されたといえる。

第Ⅰ層 盛土 最近までの耕作が途絶えた後、その耕作土の上層に形成された人為的盛土。

第Ⅱ層 最近までの耕作土及び床土 耕作土上面の高さは、北端に近いX=-160.000付近でT.P. 36.7m、中央部X=-160.500でT.P. 38.7m、南端のX=-160.900付近でT.P. 38.8m程度であり、全体としてごく緩やかに北に向かって下がっている。南端から200m付近X=-160.700からX=-160.750にかけて0.5m程度低くなっている。

第Ⅲ層 近代以前の耕作土及び床土 第2層の下層に重層的に形成された耕作土である。

江戸時代以降においても数次にわたって耕土が形成されていたと考えられる区域（その2調査区）もあり、それぞれの土層が形成された時期を特定することは難しい。遺構の形成からみると、平安時代（9から10世紀）には小規模な住居が散在する様相がみられることから、この時期に周辺に耕地が形成されはじめていたと推測される。また、中世には後述のように広範囲にわたる土壌の形成と攪拌が行われた形跡がある。条里地割りにそった溝などは確実に中世に遡るので、この頃までには周辺一帯が耕地化さ



第6図 土層断面模式図

れていたと考えられる。

第Ⅳ層 遺物包含層 瓦器・土師器・須恵器・埴輪など中世以前の各時代の遺物を含む遺物包含層が（その1）調査区北半部分に堆積している。この層は、中世の耕作によって形成された可能性が高く、むしろ第Ⅲ層に分類すべきものかもしれない。中世の遺物包含層と、奈良・平安時代の包含層に分離できたのは（その1）調査区、飛鳥時代に限定できる遺物包含層の堆積が認められたのは（その2）調査区の一部であり、いずれも遺構が形成された周辺の局所的な堆積である。

後述の奈良時代から平安時代にかけての遺構のなかで「不定形土坑」として記述するもののうち、「広範囲に及び、かつ平面形態が明瞭でないもの」と分類したものが、この層に相当する。その1調査区の「不定形土坑1-4」は東西20m・南北60mの範囲に及び、深さも5から15cmと浅く、この第Ⅳ層に相当すると考えている。

第Ⅴ層 地山 中位段丘層。調査区全体にわたり上層は黄色粘土層である。その8調査区での試掘調査結果では、上層から黄色の礫混じり粘土層（層厚40cm）、灰白色粘土層（層厚40cm）、黄褐色細礫混じりシルト層（層厚40cm）、灰白色粘質土層（層厚80cm以上）と変化する。この層での遺物の出土は今のところ確認されていない。

上面の高さは、南端のX=-160.850付近で38.4m、北端のX=-160.000付近で36.3m。全体として、北に向かって緩やかに下がっているが、詳細にみるとX=-160.700からX=-160.750にかけて0.5m程度低くなったゆるやかな谷状の地形が認められ、遺跡中央部はほぼ平坦、北端より200m付近からふたたび北に下がっている。この基本地形は第Ⅰ・Ⅱ層上面の高さにも影響を及ぼしており、現地表でも同様の様相を呈している。

第2節 弥生時代以前

弥生時代以前の遺構は検出されていない。当該時期の遺物として図示した30数点の石器の他、数十点の石鏃(片)やサヌカイト剥片などが出土している。しかし、それらのいずれもが後世の遺物包含層あるいは遺構埋土中より出土しており原位置を保っていない。

時期の判明するものを時期ごとにみると、旧石器時代のナイフ形石器2点・翼状剥片1点・有舌尖頭器3点、縄文時代の石鏃11点・石匙4点、弥生時代の石鏃26点、石廬丁1点、時期不明砂岩磨き石1点となる。この他、後の時代のものも含むと考えられる砥石が15点出土している。

ナイフ形石器(1・2)は1平面の片側のみ加工が施されている。3は翼状剥片で両側は欠損しており、全周にわたり明瞭な二次加工は認められない。4～6は有舌尖頭器である。4・5は先端部および基部が、6は先端部が欠損している。6は風化が著しく細部の加工は識別出来ないが、4・5は押圧剥離により見事に仕上げられた優品である。4は背腹両面、5は背面にそれぞれ横方向の平坦で古い剥離面が認められる。二次加工は両者類似している。おおまかな成形の後に両面とも先端部から基部に向かう方向で側縁に押圧剥離を施して形を整え、基部を作り出した後にさらに側縁に細かな剥離を主に腹面側から加え全体を細かな鋸歯状に仕上げている。

石匙7・8はやや縦長で、剥離は表裏全面におよび、素材の一次剥離面は残さない。側縁は両面を剥離整形したのち、先端直下に挟り込みをいれて刃部にはほぼ平行なつまみを作りだしている。刃部も両面から剥離して作り出している。

9の石匙は比較的横長の剥片を素材としている。バルブを除去したうえに、背面の一部に自然面を残すものの、末端部を除いた周縁に背腹両面より剥離を加え成形を行い、おおまかな挟り込みを入れて加撃軸に斜交するような形でつまみを作り出している。刃部は加撃軸に直交するように素材剥片の末端部付近に腹面側より作出されている。

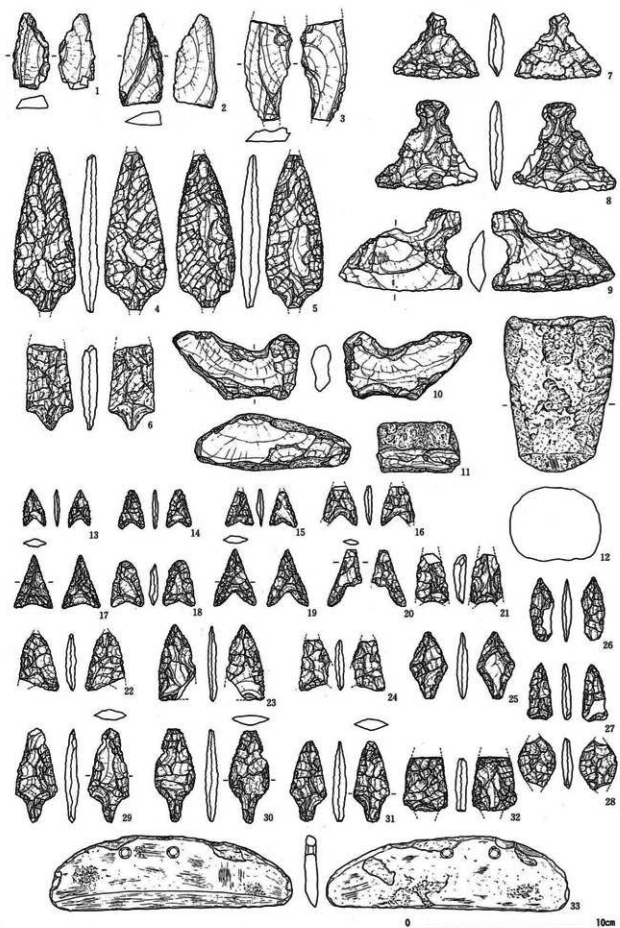
13～32はいずれも石鏃である。縄文時代・弥生時代のものをもとめて以下に記述する。

13から15は小型の凹基式石鏃である。13・14は素材の一次剥離面を残さず、全面を概ね先端から基部にむけて剥離加工して側縁の刃部をつくった後、基部を挟りこんでいる。13は、刃部にさらに細かい剥離を加えて鋸歯状に加工している。15は背腹に素材の一次剥離面を残している。加工は概ね13・14と共通するが刃部の加撃方向はほぼ側縁に直角に近い。

17・18は基部の挟りの浅い凹基式の石鏃である。13～15よりやや大きい。17の刃部は、先端から基部方向にむけて剥離され、刃部は直線をなす。基部の挟りは刃部の加工に先行する。18は背腹両面に一次剥離面を残している。

19・20は基部を大きく挟った凹基の石鏃である。剥離方法は13・17と基本的に同じであるが、挟り部分にも丁寧な剥離を施している。20は片面に一次剥離面を残し、先端と一方の下端を欠いている。16もこれらと同じ形態と思われる。

21～24はやや大型で縦長の、浅い凹基ないし平基の石鏃である。側縁刃部の剥離は、22・23では先端から基部にむかってなされているが、他はそれほどの規則性は認められない。22は先端部と基部の一部が欠損しているが、加工が全面におよび素材の一次剥離面は残っていない。側縁から先端部にかけておおまかに形を整え、その後部分的に細かな剥離を施したうえに基部を若干挟り込んで仕上げている。23は基部の一部が欠損している。背面側に素材の一次剥離面を残しており、背面側、腹面側という順に基部から先端部に向かう方向に剥離を施して形を整えた後に、側縁に剥離を加えて細かな鋸歯状に仕上



第7図 丹上遺跡出土石器 (2分の1)

げている。また基部にも、主に背面側より細かな剥離を加えて極めて浅い決りを入れている。

26・27は、いずれも比較的細身の石鏃である。全面におよぶ粗い剥離で側縁の形を整えた後に基部を作り出しているが、剥離の方向は一定しない。

28は先端部と基部が欠損しているが、現存部から円基式あるいは尖基式石鏃であったことが窺える。全局にわたって比較的平坦な剥離で形を整えているが、明確な方向性は認められない。

29～32は有茎式石鏃である。29は片面に素材の一次剥離面を残すが、全体を平坦に剥離した後、側縁および基部に細かい剥離を施す。先端を欠いている。30は側縁を先端から左右交互に、基部に向けて剥離したのち、細かい剥離を施して鋸歯状の刃部を作っている。31は縁辺から中央に向かって全面に剥離を行い、中軸線には比較的明瞭な稜線を作る。刃部の断面は菱形を呈する。32は比較的大型の有茎式石鏃であるが、先端部と基部は欠損している。背面側に素材の一次剥離面を残している。全局にわたり丁寧な平坦剥離で形を整えているが、明確な方向性は認められない。また、側縁にはさらに細かな調整を加えて仕上げている。12は砂岩製の磨石あるいは敲石である。先端部が丸く磨耗しており、直線状の浅く細い線状痕も若干認められる。上面は折れているが、正面および側面には敲打痕と考えられる凹みが存在する。10は比較的厚い剥片の四周に比較的丁寧な剥離を施している。左側縁から上縁にかかる部分、右側縁から上縁にかかる部分、下縁の一部に比較的顕著な敲打痕が認められる。11はその形態から石核であると考えられるが、剥離面の風化程度に差が認められその性格に若干の疑問が残る。

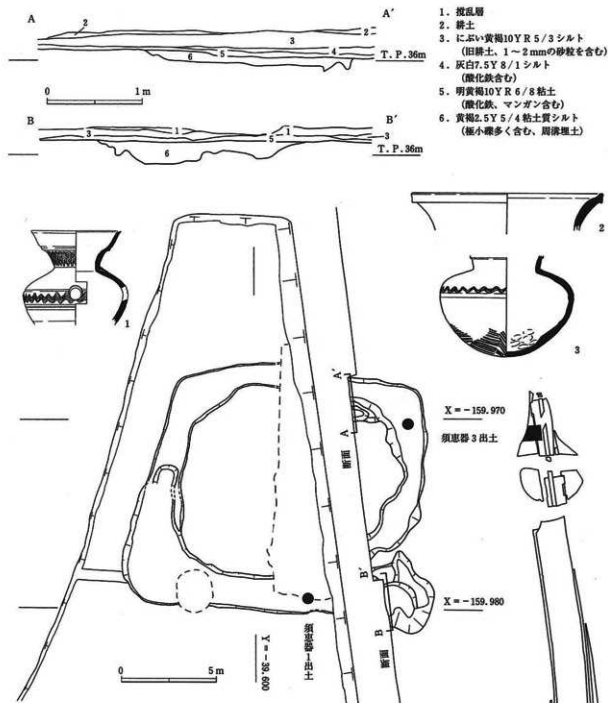
33の石廬丁は緑色片岩製であり、全体的に風化している。右側の面に背面に向かって紐擦れ痕がみられ、背面には二次使用痕の背潰れ痕も観察される。

このような遺物から、中位段丘上にある当地域は、旧石器～弥生時代にかけて狩猟の場であったと理解される。

ただ、唯一ほぼ完形で出土した石廬丁は、弥生時代にこのような段丘上に水田があった可能性を考えさせるが、ムラから水田への途上に失われたものかもしれず、評価は保留したい。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構の密度は稀薄である。その中であって、5世紀代末と考えてよい小規模な方墳が検出されていることが注目される。丹上遺跡においてはこのほかに墓は検出されておらず、独立して築造されていると思われる。一方、生活の痕跡を示す土坑や井戸が $X = -159.630 \sim X = -159.650$ 付近で検出されている。時期は古墳に先行するものである。これらもやはり居住域とよべるほどの遺構密度をもたず、遺物包含層から同時期の遺物の出土も極めて少ない。後世の削平を考慮しても、集落とよべるほどの生活の痕跡は認められない。



第8図 丹上1号墳

丹上1号墳

この古墳は、遺跡北端近くで検出されたもので、東側は(その3・5)調査区の概要報告で、「溝5」「土坑2」として報告され、西側は(その7)調査区で検出されたものであり、本報告において丹上1号墳と命名する。両調査の図面を合成したところ(その5)調査区土坑2は古墳周濠の東南端にあたると思われた。従って、溝5と土坑2との間は陸橋のように周濠がとぎれていた部分であると推定される。溝の幅は、北辺が広く2.1m、南東角付近が狭く1.3m。断面形は皿状を呈し、深さは0.2m程度残存したのみである。埋土は灰白色粘土(10YR 7/1)1層でしまりがよい。周濠埋土に滯水した状況は認められない。周濠肩部はT.P.36.15mを測る。周濠内側ラインの形状は不整形円形乃至は隅丸方形とも見えるが、周濠の外側ラインがほぼ方形を呈するので、墳丘は方形と推定しておく。墳丘規模は東西11m・南北10m、残存周濠を含めた規模は東西15m・南北13mである。墳丘盛土は残存していない。周濠北東角の南で口縁部を欠いた須恵器壺1個体、南側周濠のやや東よりから底部を欠く須恵器甕が出土した(第8図1・3)。

甕(第8図1)ほぼ完形で底部のみ欠いている。口縁部はやや内湾気味に外に開き、端部は凹面を為す。頸部との境には断面三角形の鋭い稜をもつ。頸部は細かい波状文を施している。体部は最大径部分を挟む上下に2条の凹線をいれ、その間を波状文で飾っている。体部調整は口縁部径9.6cm、体部最大径11.0cm。

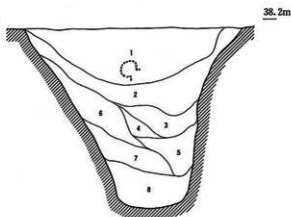
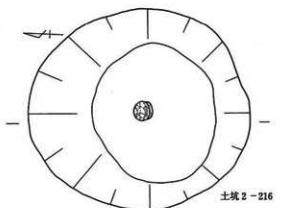
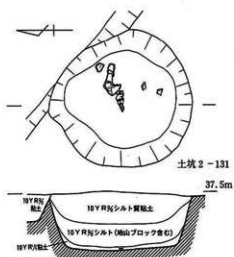
壺(第8図3)口縁部を欠く他は完存している。体部上半部に最大径をもち、頸部は上外方へのびる。体部最大径14.1cm、現存高10.8cmを測る。体部最大径の上一条の波状文、その下には凹線を一条めぐらす。体部下半から底部外面にかけては、不整形方向の平行タタキを施す。頸部には一条の凸帯が残りに、体部内面底部付近には指オサエが見られる。肩部および底部内面には自然釉がかかる。

土坑2-131(第9図)

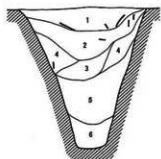
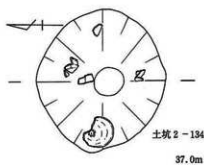
本線トレンチのほぼ中央部東側(X=-160.635)に位置する。北側の一部を飛鳥時代の溝2-35に切られている。平面形はほぼ円形を呈し、直径74cmを測る。深さは30cmを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、自然堆積による埋没状況を示しており、3層に分層される。遺物は、主として中・下層から出土している。遺物は、いずれも土師器であるが、劣化が著しく図化しえたのは高杯(5)のみである。高杯は、杯部を失い、倒立した状態で出土している。他の遺物としては、甕胴部片、小型丸底甕胴部片が出土している。

土坑2-134(第9図)

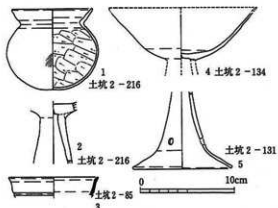
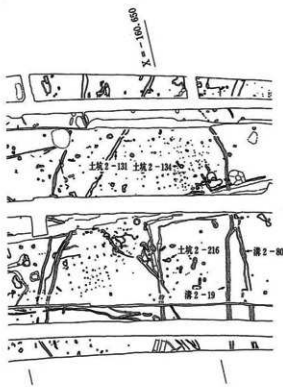
本線トレンチのほぼ中央部東寄り(X=-160.650)に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、東西長75cm、南北長68cmを測り、東西に若干長い。深さは、74cmを測り、底面は平坦で径15cmの面を成し、断面形は台形状を呈する。埋土は、自然堆積による埋没状況を示しており、上・中層が粘土であるが、下層には粗砂が堆積していた。調査時、この砂層の掘り下げ段階で湧水が認められた。遺物は、すべて土師器であるが、いずれも劣化が著しく図化しうるものは、わずかに高杯(4)のみである。また、下層からは、口縁端部を肥厚させた布置式期の特徴を示す甕も出土している。いずれの遺物も器表面の剥離、磨滅が著しく、年代については即断を避けたいが、5世紀前半代を前後する時期を当遺構の埋没時期と考えておきたい。調査時にも湧水が認められたこと、堆積状況からすれば、井戸であった可能性もある。



1. 10YR 光シルト質粘土
2. 10YR 光シルト質粘土
3. 2.5Y 光シルト
4. 2.5Y 光シルト (細砂じり)
5. 10YR 粘土
6. 10YR 粘土 (塊状ブロック含む)
7. 5Y 7R 粘土 (塊状ブロック含む)
8. 10YR 粘土



1. 10YR 光シルト質粘土 (細砂じり)
2. 10YR 粘土 (塊状ブロック含む)
3. 10YR 粘土 (塊状ブロック含む)
4. 10YR 光シルト (細砂じり)
5. 10YR 粘土 (塊状ブロック含む)
6. 10YR 粘土



第9図 古墳時代の遺構 (20分の1) と遺物 (4分の1)・遺構位置図 (1000分の1)

土坑 2-216 (第 9 図)

本線トレンチのほぼ中央部西側 (X = -160.640) に位置する。平面形は、ほぼ円形を呈し、東西長 1.07m、南北長 1.17m を測り、南北径が若干長い。深さは、96cm を測り、底面は径 34cm でほぼ平坦面である。断面形は台形状を呈する。埋土は、南側で若干みだれるが、ほぼ自然堆積による埋没状況を示すものと考えられる。遺物は、最上層よりほぼ完形の小型甕 (1) が底部を斜め上方に向けた状態で出土している。その他にも非常に少量の遺物が出土しているものの、いずれも磨滅が著しく、図化しえたのは、下層より出土した高杯脚部 (2) 1 点のみである。甕 (1) は、器高 8.5cm、口縁径 8.5cm を測る。外面は、器表面の剥離が著しいが、部分的に細かい斜め方向のハゲ調整が認められる。内面は、丁寧なヘラ削りが施され、器壁は、かなり薄い。口縁部は、直線的に斜め上方にのび、端部は若干内側にむかって肥厚させる。以上のような形態から考えて、当遺構の埋没時期は、4 世紀後半代を前後する時期と考えておきたい。

溝 2-19・2-80 (第 9 図)

上記土坑が検出された範囲の南に東西方向に掘られた溝である。調査区西半部分では 2 条検出された溝が中央付近で合わさり 1 条となっている。

このほか、古墳時代の遺構としては、土坑 2-85 があり、第 9 図 3 の須恵器 (甕?) 口縁部破片が出土している。

第4節 飛鳥時代の遺構と遺物

飛鳥時代の遺構は調査区全体に分散的に検出されている。遺構としてはそのほとんどが溝である。溝は形態からみて2種類に分類できる。1つは弧状を呈したり、蛇行や分流・合流したり、「不定形土坑」につながるなど自然地形に規制されたものようである。1つは直線的に掘られた溝である。2条の溝が平行して掘削されたり、途中で屈曲して更に直線的にのびるものがあるなど、極めて計画性を感じさせるものがあることが注目される。溝の埋土からは、完形または完形に近い遺物が出土しており、この時期以降丹上遺跡で本格的な開発が始められたことがわかる。また、遺跡南部で検出された計画性を認め得る直線的な溝は、条里に先行する直線的な地割の施行を示すものかもしれない。

溝7-23 (第11図)

ロータリー部分北西部で検出された溝で、北西・南東方向をとり、調査区南東隅ではほぼ直角に折れて南西方向調査区外にのびる。幅1.2~1.8m、深さ0.45m、埋土の上層は粘土質で下層ほど細礫を多く含む層で徐々に埋没した様相を呈している。埋土から完形に近い須恵器杯、土師器甕などが出土している。

溝7-23出土土器 (第10図)

須恵器杯は蓋に返りを持つものから返りの消失したもので含まれる。陶器ⅢからⅣ型式、(7世紀後半から8世紀前半ごろまで)に比定することができよう。7は土師器甕破片であるが器表面が風化し調整は不明である。

溝7-24 (第11図)

溝7-23から別れて南西方向に延びる溝である。切り合い関係は確認できなかったのでこれと同時期と判断した。幅0.75m・深さ0.2m程度で断面は緩やかな逆台形、埋土は黄褐色粘質シルトである。

溝7-25 (第11図)

南西に開く平面U字形を呈する溝で、南西に開く部分が溝7-23に切られている。幅0.7m~1.2m、深さ0.15m残存していた。埋土は上層が粘質強く下層は粗砂を含む。切り合いから奈良時代以前のもので判断している。

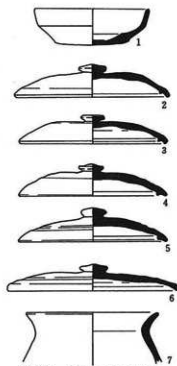
溝7-26・65 (第11図)

溝7-25と同様に全体の平面形は南西に開くU字形で、南西側が溝7-23に切られている。検出時には溝7-65を切って溝7-26が掘られていると認められた。溝7-38が北西にむけて溝7-65から延びている。溝7-23に切られていることから、奈良時代以前のもので判断している。

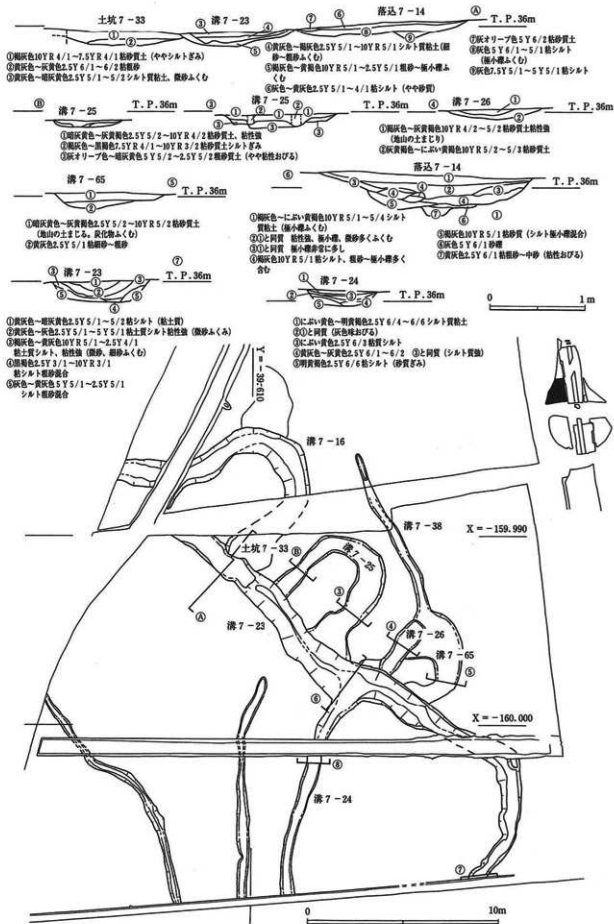
溝7-16 (土坑7-33) (第11図)

平面形は南西に開くU字形に掘られた溝で南西部分は溝7-23に切られている。土坑7-33としたものと一連の同一の溝である。幅は1.5m~2.0m、深さ0.15m程度である。溝7-23に切られていることから、奈良時代以前のもので判断している。

これら、平面U字形に掘られた3条の溝とそれぞれに接する溝7-23は、一定の空間を区画するかのよう掘られている。また、この調査区周辺で、埴輪片がわずかながら出土していることも考え合わせれば、これらが墓地であったの可能性もある。



第10図 溝7-23出土遺物
(4分の1)



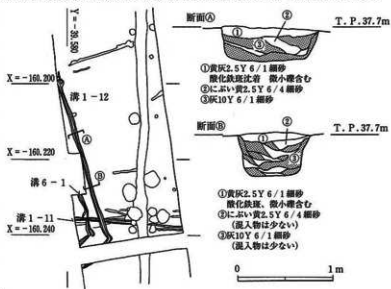
第11圖 溝 7-23・24・25・26・65 土坑 7-33平面圖 (200分の1) 断面圖 (40分の1)

溝1-12 (第12図)

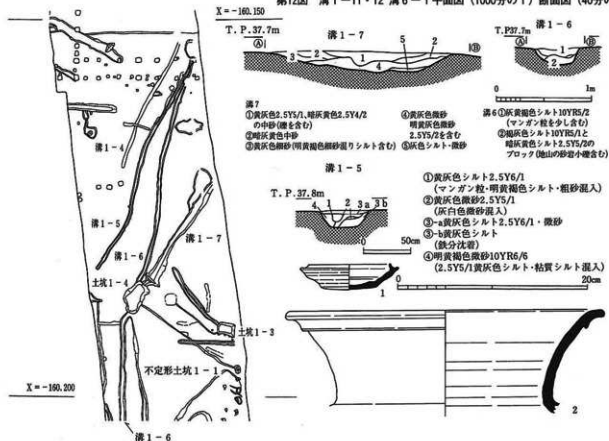
その1調査区及びその6調査区で検出した。N-20°-W方向に直線に延長40m確認され、北は調査区外に延びる。X=-160.240付近で約100度の角度で屈曲し西にのびる。幅0.7m~0.95m・深さ0.2~0.4m、溝東辺は断面凹字形のしっかりした掘形であるが、各コーナー及び南辺は、急に浅くなり断面U字形となる。埋土は、東辺部では地山の黄色粘土をブロック状に含み、非常に固くしまっており、南辺部分では礫を比較的多く含む黄灰色細砂となる。溝底面は、東辺部では平坦な一面となるが、各コーナー及び南辺部分では若干の凹凸が見られた。遺物は、底面より須恵器製の体部細片が1点出土したのみである。東辺の北よりのその6調査区付近では、規模が上端幅95cm・底部幅4cm・深さ20cmで断面がU字形を呈し、埋土は褐灰色シルト質粘土(10YR6/1)と灰褐色シルト(7.5YR6/2)の2層に分かれ、比較的しまりもなかった。

溝6-1 (第12図)

溝1-12の西約5mにこれと平行に掘削された溝である。南端では同様に屈曲し、溝1-12と平行して西にのびる。上部幅60~80cm、底部幅20~30cm、



第12図 溝1-11・12 溝6-1平面図(1000分の1) 断面図(40分の1)



第13図 溝1-4・5・6・7平面図(1000分の1) 断面図(40分の1) 出土遺物(4分の1)

深さ15～40cmを測る。断面は逆台形を呈し、西側部分で規模・掘り方がしっかりしている。埋土は溝1-12と同様であった。

遺物は7世紀代の須恵器杯をはじめ、土師器破片等が少量出土したが、細片のため図示できるものはなかった。

溝1-4 (第13図)

ほぼ南北方向に走る幅0.4m・深さ20cmの小溝で、建物6と重複し、建物より古い。長さ18.2mを検出した。埋土は黄灰色シルト(2.5Y 6/1)の1層のみである。

溝1-4 出土土器 (第13図)

1は須恵器杯の完形品であり口径8.7cm、器高2.7cmを測る。底部はヘラ切り不調整、底部内面には不定方向ナデ調整が施される。2は須恵器壺である。復原口径33.6cm、残存高11.0cmを測る。口頸部下半部には同転ナデ調整が施されているが、外面には平行叩き痕、内面には同心円文叩き痕が残っている。口縁部は折り返されて段状口縁になっており1と同様7世紀初頭のものであろう。

溝1-5 (第13図)

溝1-4の東側に位置し、溝4とはほぼ平行して南北方向に走る幅0.5m・深さ20cmの溝である。長さ53.4mを検出した。北端は近世以降の掘削によって削平されている。h-5付近で、ほぼ完形の須恵器杯と甕口縁が出土した。掘立柱建物6の柱掘形および掘形4と溝6と重複する。建物6と掘形4より古く、溝6とは同時併存か新しいと思われる。

溝1-6 (第13図)

溝1-5の東側に位置し、北端は溝1-5と重複する。X=-160.185付近で土坑1-4に取り付き、更に南へ屈曲して南下し、不定形土坑1-3へ至る。幅0.5m・深さ18cmを測る。

溝1-7 (第13図)

溝1-6と同様に土坑1-4に取り付く。南北に走る幅0.8m・深さ30cmの溝である。土坑1-4の北側には溝と直交して東西0.4m・南北1.2mの溝があり、河原石数個が置かれていた。仕切板のような施設が設けられていた事も考えられ、埋土中には、粗砂・シルトも含まれる。多くの遺物が出土したが細片が多く図示しえるものはわずかであった

溝1-8

ほぼ東西方向に延びる幅0.5m・深さ20cmの浅い溝で、不定形土坑1-3と土坑1-7につながっている。埋土は暗灰黄色シルト(2.5Y 5/2)で、不定形土坑1-3付近では、粗砂・中砂が混入する。南へ屈曲するb-4付近で、須恵器杯、広口壺が出土した。

溝1-8 出土土器 (第14図)

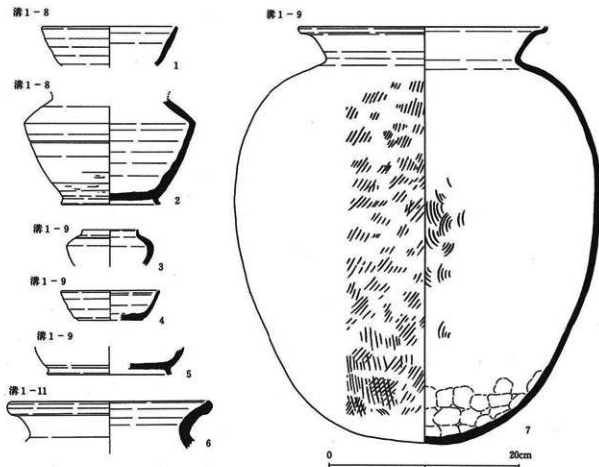
1の杯は復原口径11.4cm、残存高4.2cmを測る。高台の有無は不明である。口縁部の形状からこの形態の杯の中では古く、7世紀～8世紀初頭と考えられる。2の広口壺は口頸部が欠損しているが、肩部の屈曲の様子及び、内面底部の不定方向ナデ調整、内面底部の広い部分に自然軸がかかっていることなどから広口壺と判断した。体部最大径18.0cm、残存高11.3cmを測る。広口壺が出現するのは壺蓋のかえりの消失する7世紀後半頃なのでそれ以降のものといえる。1・2両者から溝1-8は7世紀後半～8世紀初頭と考えられる。

溝1-9

掘立柱建物1-7の南側に位置し、東西方向に走る幅1.5m・深さ20cmの溝である。東端では幅0.2mと狭くなり、断面はV字状になる。また西端では浅くなり、平面形態が不明瞭となる。最も深くなるd-4地区では、ほぼ完形に復原される須恵器甕(7)が細片となって一括で出土した。完掘後、この土器が出土した地点は、幅0.1m・長さ1mの溝状の落ちが認められた。この他にも、図示できる遺物が出土している。

溝1-9出土遺物(第14図)

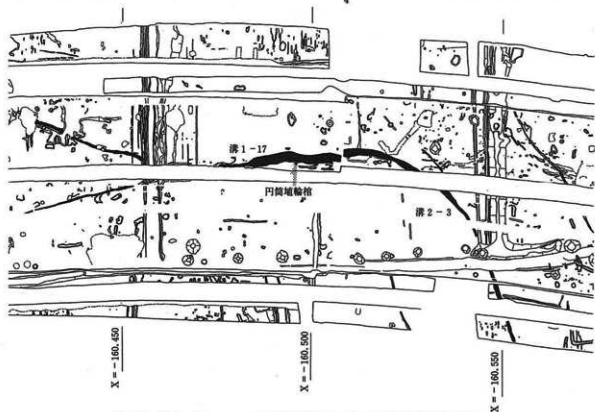
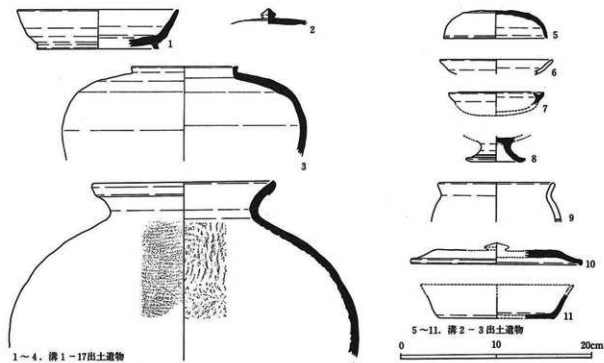
1は復原口径26.4cm、器高44.5cm、胴部最大径39.0cmを測る。口頸部内外面から肩部外面まで回転ナデ調整を施しており、体部外面には凹凸の浅い平行叩き痕が残り、内面には丁寧なナデ調整が施され同心円文叩きは一部にしか認められない。肩部の張りはなだらかで、最大幅は上位3分の1の部分にあり底部に至るカーブは緩やかで、全体的に長円形を呈す。口頸部は外反して立ち上がり端部で上方に屈曲し端部内面に凹面をつくる。内面の丁寧なスリケン調整など古墳時代的な古い様相を示すと思われるが、体部の形状や全体的に鋭さが見られない事等から、8世紀前葉頃と考えたい。2の杯Aは復原口径10.4cm、器高3.2cmを測る。比較的小型化した時期のものである。底部には粘土のはみ出した部分があり、ヘラおこしのままである。7世紀代頃と考えられる。3の杯Bは高台径13.0cm、残存高2.9cmを測る。高台は口縁部の立ち上がり部にあり、8世紀代の大形杯になるであろう。4の小型短頸甕は、復原口径5.8cm、胴部最大径9.1cm、残存高3.8cmを測り、7世紀後半～8世紀初頭頃と考えられる。



第14図 溝1-8・9・11出土遺物(4分の1)

溝1-11

溝1-9の南側にあつて一部重複する東西方向に走る幅0.9m・深さ10cmの溝である。d-6付近では、中世糸里溝（溝1-22）によって分断されている。これより西側では、同じ方向に走る溝が存在するが、埋土の検討から、時期の異なるものと判断した。後世に掘りかえされた事も考えられる。出土遺物はd-5地区で須恵器の甕が出土した他、須恵器杯B・杯蓋・土師器甕等が出土している。



第15図 溝1-17・2-3平面図(1000分の1) 出土遺物(4分の1)

溝1-11出土土器 (第14図)

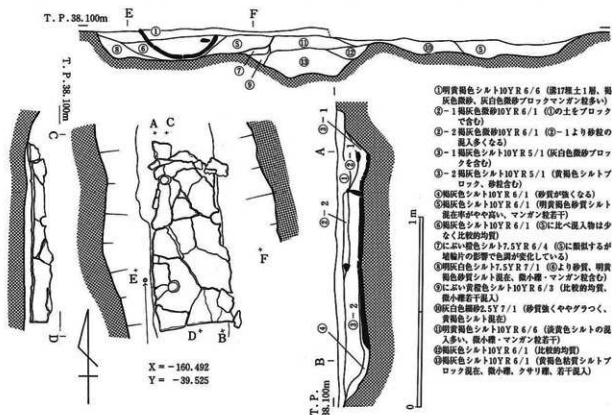
甕(6)は復原口径21.6cm、残存高5.0cmを測る。口縁部は外反して立ち上るが短く分厚い。口縁部で外方に屈曲し、上端部は上方につまみ出され端部内面は凹面を呈する。伴出している杯Bも口縁部の立ち上がり部分よりはかなり内側に高台が位置しており、7世紀後半頃のものと思われる。また杯蓋は口縁がS字状に屈曲しており、8世紀代になるであろう。溝1-11の遺物は7世紀後半～8世紀にかけてのものである。

溝1-17・2-3 (第15図)

その1調査区X=-160.400付近からその2調査区X=-160.550付近にかけて検出された溝である。その1調査区X=-160.480～X=-160.500付近で最も幅広く、幅2.5m・深さ25cmを測る。X=-160.450付近では、幅0.2m・深さ10cmと規模を縮小し、北西方向と北東方向に分かれて延びる。その2調査区のX=-160.500からX=-160.550にかけては、弧状を呈しながら南西方向の調査区外に延びる。幅は、1.1mを測り、さらに幅50cmで深く掘り込み二段になる。埋土は、3層に分かれ、上層が灰白色シルト(2.5Y 7/1)、中層が灰白色シルト質粘土(2.5Y 7/1)、下層が黄灰色粘土(2.5Y 6/1)である。X=-160.490付近では、溝底部から埴輪筒棺が1基検出され、またf-3地区でも上半部が復原できる須恵器甕の破片がまとまって出土した。後述の出土遺物からみて飛鳥時代に掘削され、奈良時代なかばには埋没したと思われる。

溝1-17出土遺物 (第15図)

1の杯Bは復原口径16.8cm、器高4.1cmを測る。口縁部は外上方へ直立気味にのび、口径の割合に器高の低い7世紀後半～8世紀初頭頃のものか。2の杯蓋は天井部中央部分のみで、その径に比して高さのある宝珠状のつまみがついている。口縁部の形状は不明だが、口縁部内側にかえりがつき、天井部



第16図 円筒埴輪筒棺平面図・断面図(20分の1)

のやや平坦な7世紀前葉頃のものと考えられる。3の短頭壺は復原口径11.2cm、胴部最大径25.8cm、残存高9.6cmを測る。肩部が丸く大きく張り出しており、自然納がかかっている。口縁部はほぼ直立して立ち上がり上端面は平坦面を呈す。口縁部の周辺に降灰のない部分があり、有蓋短頭壺だったことがわかる。肩部の張りはかなり丸みをもっており8～9世紀のものであろう。4の甕は復原口径19.6cm、胴部最大径37.0cm、残存高19.0cmを測る。口径は胴部径の1/2に近く、かなり口頸部は小さくなっている。肩はなだらかに下がり、なで眉状を呈する。体部外面は格子状叩きの後、粗いカキ目調整が施されており内面は同心円文のみで調整痕はみられない。このような特徴から7世紀代のもと考えられる。1・2・4は時期差に幅があるが7世紀代と考えられ、3の有蓋短頭壺は、体部の丸みが特徴的で、時期は下がり、8～9世紀頃とみられる。このほかに溝17からは土師器皿・甕、須恵器坏A、製塩土器なども出土している。その2調査区でこれと連続する溝2-3からは、下層より須恵器杯身・杯蓋・低脚高杯が出土している。また、中下層からは土師器杯・甕・須恵器杯蓋・杯身が出土している。5は、径11.8cm、器高2.9cmを測り、天井部はヘラ切り未調整である。7は、径10.2cmを測り、短く内傾する口縁部をもつもので、体部下半は欠損する。下層出土の遺物は、概ねTK-217型式に併行する時期のものと考えられる。また、上層出土の土器は、杯蓋・杯身の諸形態からみて、土師器杯・甕を含めて奈良時代の前半代を前後する時期のものと考えておきたい。

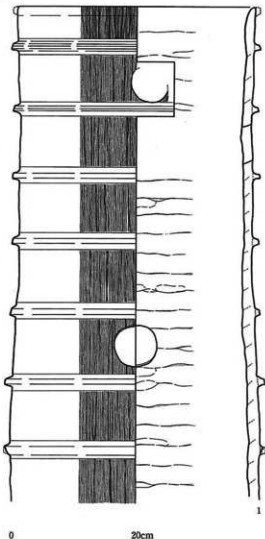
これら遺物の様相から、溝は7世紀には掘削され、8世紀末頃に埋没したと考えられる

円筒埴輪棺 (第16図)

X = -159.490付近で検出された。棺は底部のみ残存し、長さ約1m・幅40cm程度。北側の小口に閉塞として用いられた埴輪片が若干残存していた。縦断面A-Bの観察では墓坑両端の小口が立ち上がっているので、残存していた1本の円筒埴輪を主体部とし、両端に閉塞を行った小型の棺であることがわかる。

横断面土層の観察では、円筒埴輪棺掘形の埋土である⑤⑦が、溝埋土である⑩を切っているようにみえるので、溝埋没途中に周辺の古墳の円筒埴輪を利用して築造した円筒埴輪棺であると考えられる。

棺本体とされていた円筒埴輪は、復原径40cm・残存高80cmを測る。ほぼ直立する体部にやや外半する口縁部をもつ。口縁部外面は摩滅が激しいが、剥離痕跡とみえる部分もあることから、口縁部外面に突帯を貼り付けていた可能性がある。底部は欠失している。外面には細かい縦方向のハケ調整、内面はヨコナデが施される。タガは断面台形を呈す。2段目、3段目、6段目に円形透しがあり、1段目のタガ間の幅が約4cm、他では約8cmを測り、他の段より幅が狭いという特徴をもつ。



第17図 棺転用円筒埴輪 (6分の1)

溝2-2 (第18回)

X = -160.550からX = -160.580にかけて、トレンチ東端から南西方向にのびトレンチを横断している。方向は溝2-1・溝2-14などとほぼ同じであり、両者の溝から23mの間隔を有し、ほぼ等間隔で平行している。不定形土坑2-1の底面に検出された溝2-33に連続するか、あるいはこれと交差して溝6-2につながる可能性がある。交差する付近は井戸2-9に切られて不明である。遺物は僅少であるが、須恵器の杯蓋が2点出土している。1は、口径10.8cm器高2.7cmを測る。2は、口径11.5cm器高4.3cmを測り、底部外面はヘラ切り未調整である。溝2-14などと同時期のTK-209型式に併行する時期のものと考えておきたい。

溝2-33 (第18回)

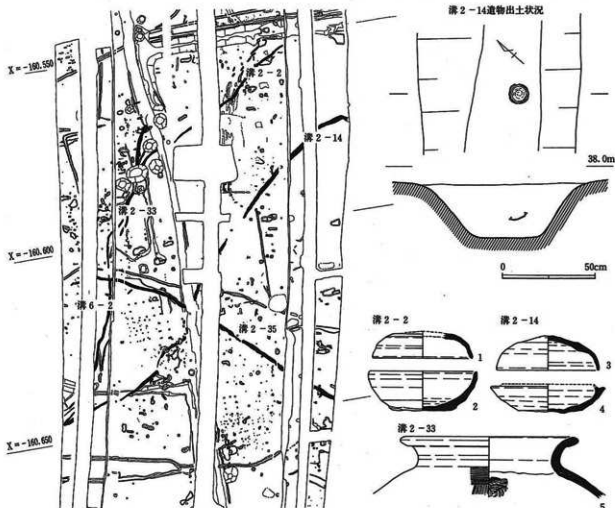
溝2-2の延長上で、不定形土坑2-1の底面から検出された。幅0.5~0.8m、深さ0.15mで南南西方向をとるが、その2調査区西端でとぎれる。遺物が出土している。

溝6-2 (第18回)

その6調査区でX = -160.600からX = -160.650付近で検出された幅0.3~0.5m、深さ0.2m、の溝である。トレンチに平行に南南西方向にのびたのち、弧状に西に曲がり調査区外に続く。

溝2-14 (第18回)

X = -160.570からX = -160.650にかけて検出された溝で、ごくゆるやかなS字状を描きながら北東・



第18回 溝2-2・14・33・35・6-2平面図(1000分の1) 溝2-2・14・33出土遺物(4分の1)

南西方向にのび、東端ではほぼ直角に南に折れる。幅0.85m、深さ0.28m、断面は逆台形を呈す。

遺物は僅少であるが、ほぼ完形に近い杯身と杯蓋がそれぞれ1点ずつ出土している。4は、本線トレンチ側で出土したものであり、口縁端部を欠損している。受部径12.4cm器高は残存で2.8cmを測る小型の杯身である。底部はヘラ切り未調整であり、他はヨコナデ調整である。3は、側道トレンチ側で出土したものであり、口径11.1cm器高3.7cmを測る。天井部は、ヘラ切り未調整でやや尖り気味である。時期は、形態および杯身・杯蓋ともヘラ切り未調整であることからTK-209型式に併行する時期のものと考えておきたい。

溝2-35 (第18図)

X=-160.610からX=-160.650で検出した北西・南東方向の溝である。幅2.3m、深さ0.2m、肩からゆるやかに下がり、底は幅広い平坦な面をもち南端で部分的に0.4m程度の深さとなる。埋土は灰白色(2.5Y7/1)シルト質粘土である。

溝2-102 (第19図)

X=-160.700からX=-160.720で検出した南にふくれる弧状を呈する溝である。調査区東よりでは、幅が広く3m程度となるとともに、溝肩がはっきりせず途切れ気味となる。西よりでは、幅1.5m、深さ5~10cm、断面は浅い皿型を呈する。

溝2-103 (第19図)

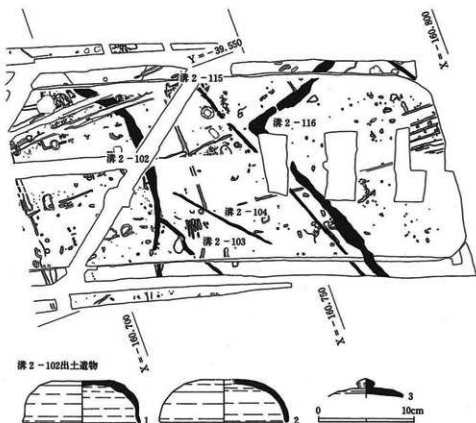
溝2-102から別れて南西方向にのびる。幅1.0m、深さ0.15m、断面は皿形を呈す。

溝2-115 (第19図)

X=-160.735からX=-160.760で検出したN68°E方向の直線の溝である。幅0.5~0.6m、深さ0.25m、南に平行して掘られた溝2-116とともに、計画的に掘削されたものと思われる。

溝2-116 (第19図)

溝2-115と平行にのび、Y=-39.570付近ではほぼ直角に南に折れる溝である。幅1.8~3.0m、深さ0.2m。屈曲点の南約8mのところの一部途切れており、土橋状を呈している。



第19図 溝2-102・103・104・115・116平面図(1000分の1) 溝2-102出土遺物(4分の1)

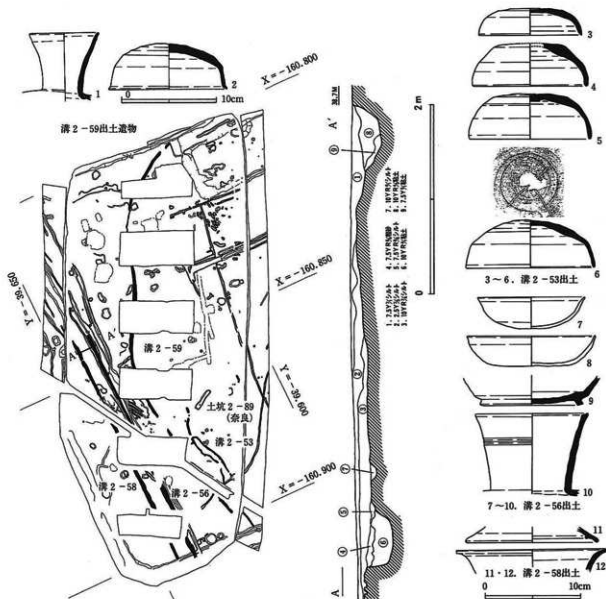
溝 2-53 (第20図)

本線トレンチの南東部に位置する溝である。トレンチ東側より蛇行して西方にのびる2条の溝で、トレンチ東端より約15mの地点で交差し途切れている。上部が、かなり削平されているが、現況で幅2.0m、深さ0.5mを測る。埋土は、黄灰色土(10YR 6/1)の単層である。

遺物は、須恵器の杯蓋のみ4点出土している。1~3は、いずれも全体をヨコナデ調整し、天井部外面はヘラ切り後、未調整である。4は、天井部外面を丁寧にヘラ削りし、また、その中心付近に「T」字状のヘラ記号が施される。時的には、4が若干古相を示し、MT-85型式に併行する時期のものと考えられる。他の3点については、いずれもTK-209型式に併行する時期のものと考えられる。したがって、当遺構の埋没時期についても後者の年代を考えておきたい。

溝 2-56・溝 2-58 (第20図)

調査区南端近く $X = -160.840$ から $X = -160.900$ 付近に幅3・6mの間隔をおき平行して北へのびる2条の溝である。トレンチ南端より67mの所で両者とも途切れる。溝 2-56は、幅60cm、深さ25cmを



第20図 溝 2-53・56・58・59平面図(1000分の1) 断面図(40分の1) 出土遺物(4分の1)

測り、溝2-58は、幅65cm、深さ25cmを測る。埋土は、双方ともほぼ同じであり、2層に分かれる。それぞれ上層が褐灰色粘土(10YR 4/3)であり、下層が灰色粘土(7.5Y 5/1)である。両者は、埋土・構造が酷似しており、しかも等間隔を保ち平行してのびることからも、両溝を側溝とする道路状遺構の可能性が考えられる。

遺物は、共に僅少であるが、土師器坏・須恵器杯蓋・杯身・平瓶・広口壺が出土している。それらの遺物からみて、TK-217型式・飛鳥Ⅲ～Ⅳに平行する時期のものと考えられる。

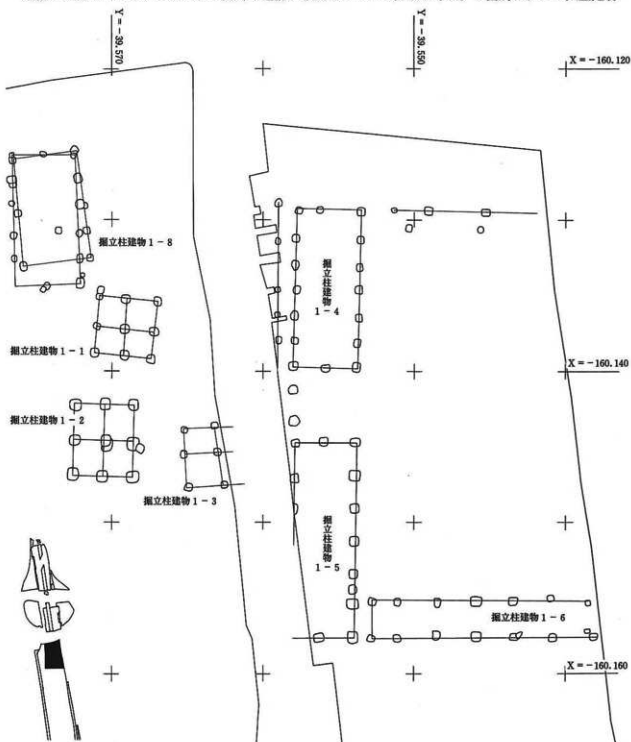
溝2-59 (第20図)

調査区南端で検出された東に開く弧状を呈する溝である。6-2調査区の南端X=-160.790付近からX=-160.900付近まで延長140m以上検出し、北端は調査区外に続いている。幅0.4~1.0m・深さ0.15~0.25m。

第5節 奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺構で注目されるものは、調査区の北端 $X = -160.100$ から $X = -160.170$ 付近で検出された大型掘立柱建物群と倉庫群である（第21図 掘立柱建物 1-1～6・8・9）。南北6間・東西2間の掘立柱建物を2棟南北に連続して配置し、北辺を柵、南辺を東西に長い奥行き1間の掘立柱建物で囲うように配置した掘立柱建物群は、「官衙的」様相を示している。この時期の第一級国道であった竹内街道に近接した区域にこの時期の掘立柱建物群が検出されたことに注目すべきである。

遺構の配置をみると、このほか3箇所遺構が形成されている区域がある。1箇所は、この大型建物



第21図 掘立柱建物 1-1～6・8 配置図 (200分の1)

群の南は50m (X = -160.220) 付近である。ここには掘立柱建物1棟・土坑などが検出されている。1箇所はさらに南に約200m離れてX = -160.500付近に東西方向の溝・南北方向の溝や小規模な掘立柱建物が発見されている。1箇所はX = -160.590付近で、柵や柱穴群・遺物を多く出土した不定形土坑や土坑などが検出されている。

これら遺構のありかたをみると、きわめて計画的に配置された建物にみられる「政治性」と、すでにそれに先行してこの地域を開発していた人々の「在地性」が窺えるようである。

掘立柱建物1-1 (第22図)

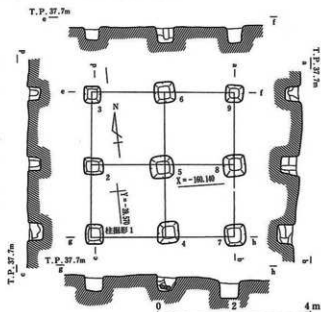
2間 (3.9m) × 2間 (3.9m) の総柱の建物である。柱間寸法は、1.95mである。棟方向は、N-6°-Eを示し、掘立柱建物2・4・5に対して約5°東に振っている。柱掘形は、一辺0.6m、深さ0.3~0.5mの方形を呈し、柱掘形1-1と1-4にはこぶし大の根石が据え置かれている。柱掘形の埋土は粗砂・礫を含む褐灰色・灰黄色シルトの層と、これに地山の明黄褐色粘土のブロックが混入した層に大別できる。これは、建物1-2・4・6・7とも共通している。

掘立柱建物1-2 (第23図)

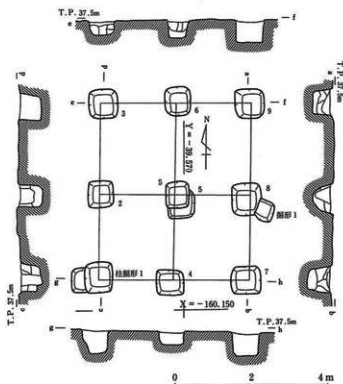
掘立柱建物1-1の南側約3mの所に位置する2間 (4.8m) × 2間 (3.9m) の総柱の建物である。柱間寸法は、桁行2.4m・梁行1.95mである。柱掘形は、一辺0.7~0.8m・深さ0.6mの方形を呈する。各柱掘形からは、7世紀代の須恵器杯蓋の小片が出土しているが図示し得るものはなかった。棟方向は、N-1°-Eを示す。建物の南半部は、東西6.0m・南北5.5m・深さ0.2mの不整形な落ち込みと重複している。掘立柱建物1-2掘形8の東に接する掘形1および掘立柱建物1-2柱掘形3より埴輪片が出土している。

掘立柱建物1-3 (第24図)

掘立柱建物1-2の東側約2.5mの所に位置する建物で、東側は現代水路によって削平されている。2間 (3.9m) × 1間 (2.1m) を検出したが、東側に広がる可能性もある。柱間寸法は、桁行1.8~2.1m・梁行



第22図 掘立柱建物1-1平面図・断面図 (100分の1)



第23図 掘立柱建物1-2平面図・断面図 (100分の1)

2.1mである。柱掘形は、一辺0.4m・深さ0.2mで方形を呈し、柱掘形底にこぶし大の根石が据え置かれているものもある。棟方向は、 $N-5^{\circ}-W$ を示す。

掘立柱建物1-8 (第25図)

掘立柱建物1-1の北西で検出された南北方向の4間(7.2m)×2間(4.2m)の建物である。概報作成時点では櫓と認識されていたものである。柱穴は掘立柱建物1-9の柱穴に切られたり、ほとんど重複しているものがある。柱掘方はほぼ長方形で一辺0.4~0.6m、深さ0.2~0.5m程度残存していた。 $N-8^{\circ}-W$ の方位をとる。

掘立柱建物1-9 (第25図)

掘立柱建物1-8を一部切ってほぼ同位置に建てられた南北方向の5間(8.6m)×2間(4.2m)の建物である。北辺は掘立柱建物1-8と同位置で桁行は南に1間分延長している。棟方向は、掘立柱建物1-8よりやや正方位に近づき $N-3^{\circ}-W$ を示す。

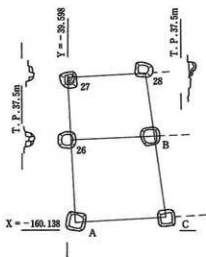
掘立柱建物跡1-4 (第26図)

建物1-1と1-3の東側約9mの所に位置する。溝1-1と重複し、溝1-2より古い。南北方向の6間(10.5m)×2間(4.2m)の建物である。柱間寸法は、桁行1.75m・梁行2.1mである。fライン以北が近現代に0.3m程度削平されている。柱掘形は方形のプランを呈し、一辺0.5m・深さ0.2mが残る。棟方向は、 $N-1.5^{\circ}-E$ を示す。身舎西側掘形列より約1.2m離れて掘形列が検出されている。柱掘形は一辺0.4mの方形プランを呈し、柱間は1.75mである。西面する庇又は建物群の西辺を限る櫓であると考えられる。

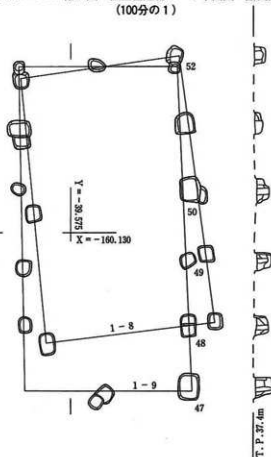
掘立柱建物1-5 (第27図)

掘立柱建物1-4の南側約4mの所に位置し、同様に南北方向をとる6間(12.9m)×2間(3.9m)の建物である。溝2と重複し・溝2より古い。全体の配置関係から、建物1-4と同様西側に庇を持つ可能性もある。身舎の柱配置は掘立柱建物1-4と同様であるが、規模は桁行が建物4よりもほぼ1間分(約2.4m)長い。柱間寸法は、桁行2.15m・梁行1.95mである。柱掘形は、一辺0.7m・深さ0.8mの方形を呈し、柱掘形には径約0.2mの柱痕が残存するものもある。棟方向は $N1-1^{\circ}-E$ を示す。

建物1-4との間には、それぞれ1m離れて、一辺0.6mの柱掘形が2個あり(堀形1-2・3)、柱間寸法は2.1mである。西側の倉庫群との間を画する門扉の柱穴であるかもしれない。堀形1-2からは、須恵質の埴(第29図1)が出土している。



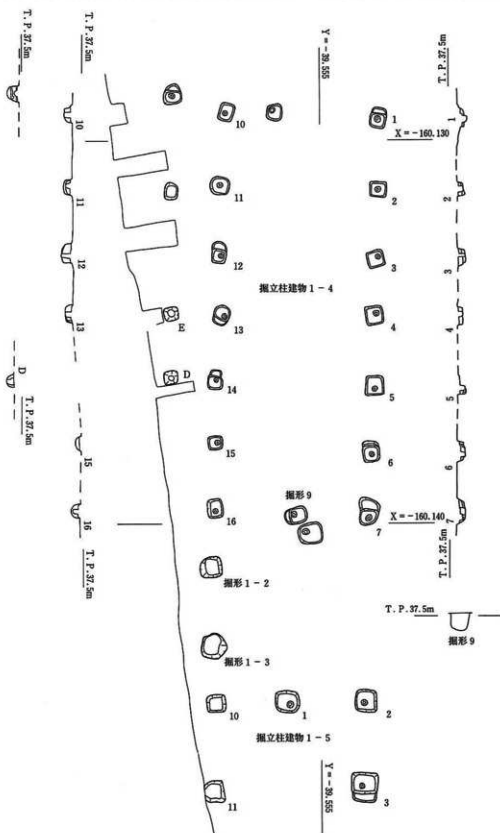
第24図 掘立柱建物1-3平面図・断面図(100分の1)



第25図 掘立柱建物1-8・9平面図・断面図(100分の1)

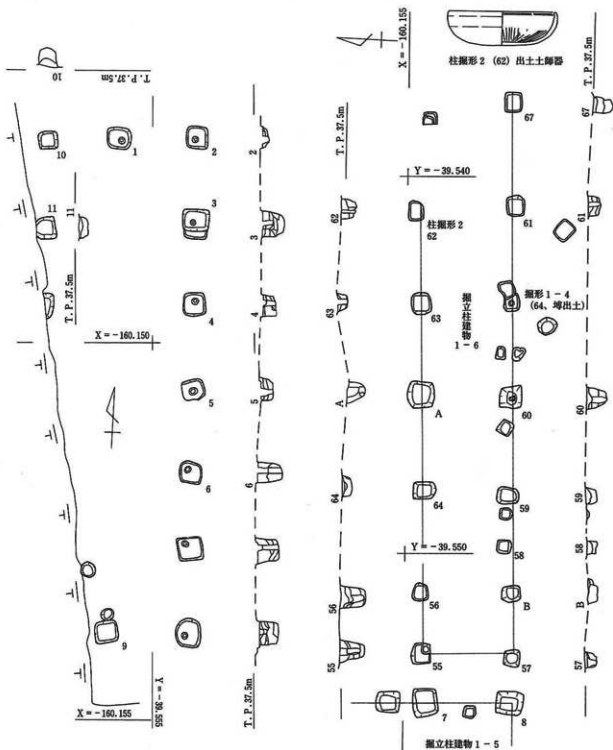
掘立柱建物 1-6 (第28図)

掘立柱建物 1-5 の東側に位置する東西 6 間 (14.65m) × 南北 1 間 (2.4m) の建物である。東側へは更に延びるものと思われる。柱掘形は平面方形を呈し、一辺 0.5m ・ 深さ 0.4m のものと、一辺 0.7



第26図 掘立柱建物 1-4 平面図・断面図 (100分の1)

m・深さ0.6mの2種類があり、大きな掘形は中央に6個並ぶ。柱間寸法は、桁行が1.65mと2.6m・梁行が2.4mである。棟方向は、N-88.5°-Eを示す。柱掘形には、こぶし大の根石が据えられているものもある。掘形4から須恵質埴が出土している。掘形62から土師器杯が出土している。杯は口径11.6cm・器高3.6cm、口縁部内面に放射状暗文が施されている。放射状というよりは平行した暗文が4箇所重なりあっており、調整の際に持ちかえて施文され一見放射状にみえる。口縁部内面はヨコナデ調整、外面底部は不調整である。口縁部外面は剥落が著しく調整はよくわからないが、粗い暗文があるよ



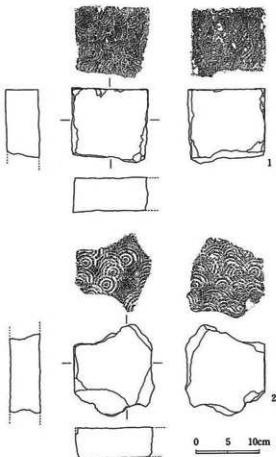
第27図 掘立柱建物 1-5 平面図・断面図 (100分の1)

第28図 掘立柱建物 1-6 平面図・断面図 (100分の1)

うにも見える。口縁端部は内側に屈曲している。底部は丸底気味平底である。器形上は飛鳥の特徴をもつが、暗文の施し方は新しい様相を呈しており、飛鳥V～平城Iである。創建時期の上限を示している。

掘立柱建物掘形出土埴（第29図）

掘立柱建物1-4・1-5間にある掘形2から第29図1、掘立柱建物1-6掘形4より2の埴が出土している。1は現存長12.0cm、現存幅11.5cm、厚さ5.1～5.6cmを測る。両平面と二側面が生きており、両平面とも粗く表面を削り取るようなナデ調整がみられるが、その下に淡く同心円文の叩き目が残り、更に一平面には布目痕が残っている。側面は二面共削り痕がみられる。2は現存長15.0cm、現存幅12.8cm、厚さ4.7～4.9cmを測る。両平面と一側面が生きている。両平面とも同心円文叩き痕が明瞭に残っており、一平面はそれから粗くナデしているが、もう一方の平面には布目痕が現存している。その面には増を分割する際の線刻が直交して入っており側面から9.7cmの間隔で区画されている。その面にはまた幅4.5cmの降灰を受けていない部分があり、焼成の際に何か挟んだものか、また埴の厚さと近似値を示しているので埴を直交して重ね焼きをした痕跡かとも考えられる。側面は丁寧なナデ調整が施されている。真福寺遺跡で同様のものが出土しており、8世紀代のものであろう。



第29図 柱穴掘形出土埴（6分の1）

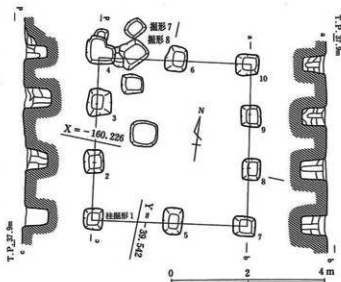
掘立柱建物1-7（第30図）

A地区建物群の南約65mの所に位置する3間（4.35m）×2間（4.0m）の建物である。周辺の掘形と重複する。身舎内には、整地の跡と思われる東西2.4m×南北6.0m・深さ13cmの不整形な浅い落ちがある。柱間寸法は、桁行2.17m・梁行2.0mである。柱掘形は、一辺0.5m・深さ0.2mの方形を呈する。棟方向は、N-9°-Wを示す。

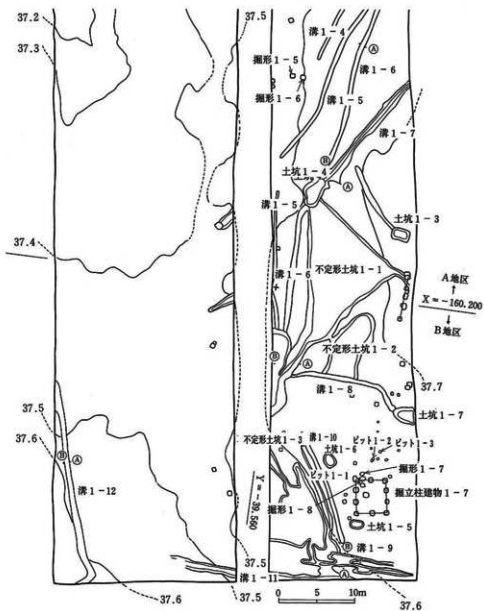
掘立柱建物1-7周辺ピット出土土器（第31・32図）

1はピット3から出土した土師器杯Aである。復元光景19.0cm、器高3.6cmをはかる。器表の剥落著しく、調整不明。口縁端部も剥落しているので詳細な形態は不明だが、内側に丸く屈曲するとおもわれる。

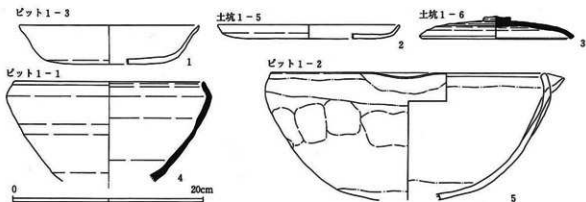
5はピット1-2より出土した土師器鉢A



第30図 掘立柱建物1-7平面図・断面図（100分の1）



第31図 A～B地区 奈良・平安時代遺構配置図(500分の1)



第32図 ビット・土坑出土遺物(4分の1)

であり、片口である。復原口径29.1cm、残存高13.6cmを測る。4はピット1より出土した須恵器鉢Aである。復原口径20.2cm、残存高10.7cmを測る。尖底になるとみられる。口縁部はくの字形に屈曲し、端部は立ち上がり丸く終わっている。法量は比較的小さく、鉄鉢形土器の中でも新しくなる。4・5ともに9世紀頃になるとみられる。土師器鉢(5)・須恵器鉢(4)は、掘立柱建物群の周辺にあるピットの時期を表すもので9世紀代になると考えられる。建物柱掘形からは他に掘立柱建物1-7柱掘形4の周辺のピットから須恵器坏B、掘立柱建物1-2柱掘形5より7世紀代の須恵器のかえりの付く坏壺、同柱掘形9から須恵器坏体部が出土している。坏Bは高台が口縁部立ち上がりより内側にハの字形に位置しており、坏も立ち上がりの屈曲は丸く、両者共1と同様7世紀後半~8世紀初頭といえる。

掘立柱穴群 6-2-221

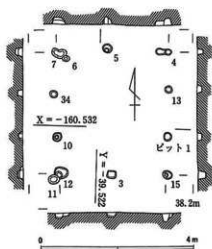
6-2調査区の北端近くX=-160.170で検出した柱穴群である。柱穴間の距離は24と22間が4.6m、21と23間が約半分の2.35mであり、ほぼ直角に配置されているので掘立柱建物の可能性がある。周辺の状況から奈良時代の可能性がたかいものと考えている。

掘立柱穴群 6-2-222

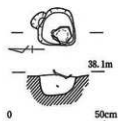
6-2調査区X=-160.210付近で検出した柱穴群である。同様に周辺の状況から奈良時代の可能性がたかいものと考えている。

掘立柱建物跡 2-1

調査区の北東部(X=-160.530)に位置する。建物の規模は、梁行3間、桁行2間であるが、柱間の距離は桁行が1~1.25m、梁行が1.35~1.65mを測り、当遺跡で認められる掘立柱建物中で、最小の建物である。なお、桁行は座標北の方向に一致する。また、当建物は3箇所5柱穴に認められる切り合い関



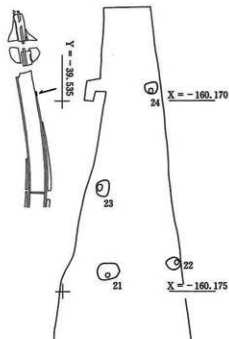
第33図 掘立柱建物2-1平面図・断面図(100分の1)



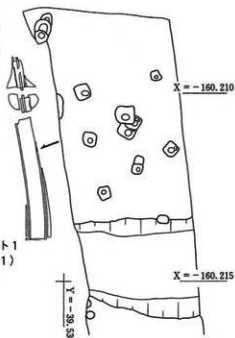
第34図 掘立柱建物2-1ピット1遺物出土状況(20分の1)



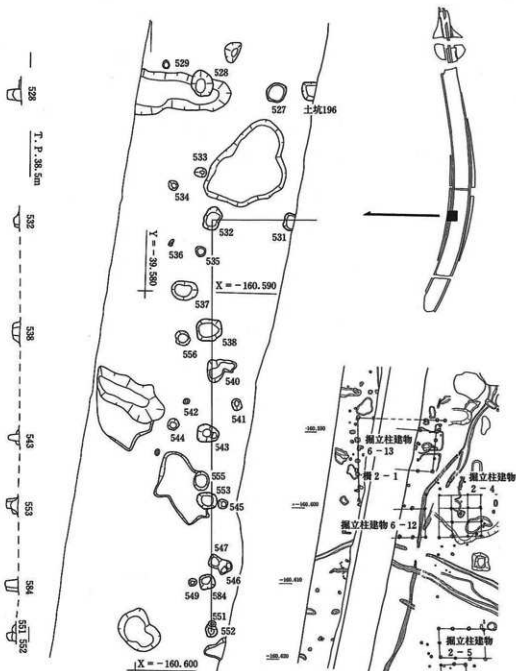
第35図 掘立柱建物2-1ピット1出土遺物(4分の1)



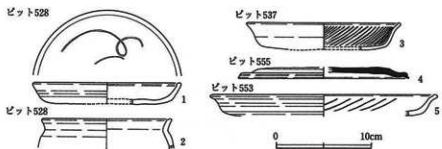
第36図 掘立柱穴群6-2-221平面図(100分の1)



第37図 掘立柱穴群6-2-222平面図(100分の1)



第38図 構2-1平面図・断面図(100分の1)



第39図 構2-1ピット出土遺物(4分の1)

係から、同位置およびそのやや西側で少なくとも2回の建て替えがあった可能性がある。

各柱穴は、ほとんどが柱を抜き取った後に廃棄されたと考えられるものであり、一般に堆積の状況は灰褐色粘土(10YR 4/1)、または、暗灰黄色シルト(2.5Y 4/2)の単層、および、黒褐色シルト(10YR 3/2)と黒褐色粘土(10YR 3/1)の2層である。また、ピット15からは断面で柱痕跡が確認され、その直径は10cmを測る。

柱穴は平面形が円形を呈し、規模は残存の直径が最大で36cm、最小で18cm平均24.6cmを測り、深さ最深で20cm、平均13.7cmである。

遺物は、ピット1の埋土最上部から須恵器壺底部破片が出土している。底部は器壁が薄く、胴部はゆるやかに立ち上がる。高台は断面が方形を呈する低い形態を呈し端部には、葦状の圧痕が認められる。時期は8世紀代と考える。ピット2からは、奈良時代の平瓦が、4点出土している。内面には布目痕を残し、厚さは2.5cmを測る。また、当建物跡の東側にも約5×5mの範囲で、ピット群が検出された。それらの形態は、多くが柱痕跡を残すのみの小規模な柱穴群であり建物を復原するには至らなかった。

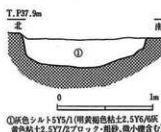
ただし、ピット2をはじめとするいくつかのものは、掘方の規模が直径40~24cmを測るものがある。欄2-1(第38図)

調査区西端のX=-160.590からX=-160.600にかけて柱穴群が検出された。このうち奈良時代と考えられる柱穴は北からピット532・538・543・553・547であり、N-1'-Wの方向で、ほぼ同一直線上に並びさらにはほぼ直交に東におれる。その2調査区概報時点で「柱穴群1」としていたものである。掘方の規模は、大型のピット538が直径0.57m、深さ0.2m、小型のピット543は直径0.2m、深さ0.29mを測り、柱間の距離は北から3.0m、2.7m、1.8m、2.1mである。埋土の状況は、いずれも柱抜き取り後の埋没状況を示しており基本的には褐灰色粘土と灰褐色粘土の上下二層に分けられる。ピット528・ピット548では直径が0.25mを測る柱根跡が確認された。

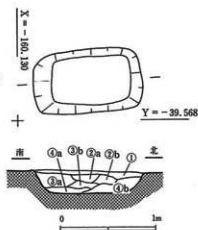
遺物は主として土師器杯・皿類が出土した(第39図)。1はピット528出土の土師器皿である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は肥厚した後内折して、端部内面には浅い凹線が残される。外面の調整は、口縁部から体部下半まで丁寧な横ナデが施されており、底部は不調整である。胎土は比較的緻密であり、色調は赤みがかった褐色を呈する。なお、口径は15.8cm、器高は2.3cmである。2はピット528出土の土師器甕である。胎土はやや粗く、色調は暗褐色を呈する。3はピット537、5はピット553出土の土師器杯・皿である。ともに直線的な体部と外上方へ屈曲する口縁部から構成される。また、口縁端部も肥厚して弱く内折するが、5の端部上面は、やや扁平気味の形態を呈する。胎土にはともに微砂粒をほとんど含まず、色調は3が明黄褐色、5が明赤褐色を呈する。

土坑1-1(第41図)

掘立柱建物1-1の北約5mに位置する長辺1.1m・短辺0.7m・深さ25cmの隅丸長方形の土坑である。底面は平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。埋土は、2層に大別され、遺物は1層中に比較的集中する。細片が多く、図



第40図 土坑1-3 断面図(40分の1)



第41図 土坑1-1 平面図・断面図(40分の1)

示しえるものは少ない。

土坑1-2

掘立柱建物1-2の北東コーナーに隣接してある長辺1.0m・短辺0.7m・深さ0.2mの隅丸長方形の土坑である。底面は平坦である。壁は上部が削平されわずかしか残っていない。

土坑1-3

調査区東端X=-160.190付近で検出した長辺2.2m・短辺1.5m・深さ0.4mの隅丸長方形の土坑である。底面は若干舟底状となり、壁は比較的ゆるく立ち上がる。埋土は、地山の黄色粘土をブロック状に多く含む1層のみで人為的な堆積を示す。1~3mm大の砂粒も多く含んでいる。遺物は、細片が多く図示しえるものは少ない。

土坑1-4

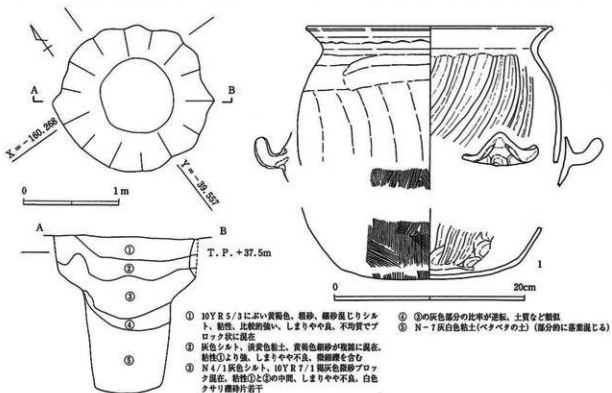
X=-160.185・Y=-39.545付近で検出。溝1-6・7と重複する長軸4.3m・短軸2.5m・深さ0.2mの不整形な土坑である。底面は、凹凸が目立ち、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土の第1層は、粗砂、中砂で溝6・7にも及ぶ。同時併存するものである。細片ではあるが多くの遺物が出土した。

土坑1-5

掘立柱建物1-7の南西コーナーに隣接する長軸1.8m・短軸1.2m・深さ0.1mの浅い楕円形の土坑である。底面は平坦で、壁の残りは悪い。埋土は灰黄褐色シルトの1層のみで、埋土中には炭・焼土がわずかではあるが含まれる。出土遺物は細片が多いが、土師器皿が図示し得た(第32図-2)。復原口径19.6cm、器高1.5cmを測る。内面の調整は磨耗のため不明だが、外面全体に直交する暗文がみられる。8世紀代のものであろうか。この他に須恵器杯Bや土師器羽釜、製塩土器片等も出土している。

土坑1-6

溝10の東に位置する長軸1.9m・短軸1.4m・深さ10cmの楕円形の土坑である。底面は平坦で、壁の



第42図 井戸1-1平面図・断面図(40分の1)・出土遺物(4分の1)

立ち上がりはゆるやかである。埋土は、灰黄褐色シルトの1層である。遺物は細片が多い。須恵器坏蓋が図示し得た(第32図-3)。天井部全体に浅いふくらみもち、中央に扁平な擬宝珠状つまみが付される。復原口径16.3cm、器高2.4cmを測る。7世紀後半のものと考えられる。

土坑1-7

X = -160.215付近調査区東端で検出。溝1-8と続く、長軸2.7m・短軸2.1m・深さ0.4mの楕円形の土坑である。底面は若干舟底状を呈し、底面との境は不明瞭であるが、壁は、ほぼ垂直に近く立ち上がる。埋土は、地山の黄色粘土をブロック状に多く含む1層のみで、土坑1-3と同様な人為的な堆積を示す。遺物は、細片であるが比較的多く出土している。

井戸1-1 (第42図)

今回の調査で検出された唯一の当該時期の井戸である。径1.5m、深さ1.6mの円形素掘りの井戸である。底面は、径0.7mの円形を呈し、壁は、底面から1.0m前後で段をなして広がり、上部は垂直に立ち上がる。埋土は、1層-ふい黄褐色粗砂混りシルト、2層-黄色粘土、黄褐色細砂の混入する灰色シルト10YR 5/3、3層-灰色粘土N 4/0、4層-広葉樹の葉が多く含まれる灰白色粘土N 7/0の4層に大別される。4層上面から土師器甕B、底面から須恵器片が出土したのみである。土師器甕Bは、復原口径26.0cm、器高22.5cm以上、胴部最大径28.0cmを測る。周囲の面を平坦面につくる平面形三角形の把手がつく。外面はその把手を境界にして体部上方にナダ調整、下方にハケ調整、体部内面にはヘラ削り調整が施される。把手は胴部最大径の位置する所にとりつけられると思われるが、その位置と把手部分の調整痕と一致する部分がなかったため、把手のとりつけ部については現在の所保留しておきたい。胎土は雲母、石英、長石、花崗岩粒、チャート粒等の微砂粒が多量に含まれている。底部はやや丸みを有する平底であり、把手のつくりはしっかりしており、時期的にそう新しくはならないと思われるが、現在のところ8世紀代としておきたい。この土器と形態・調整が非常に類似している甕が河内船

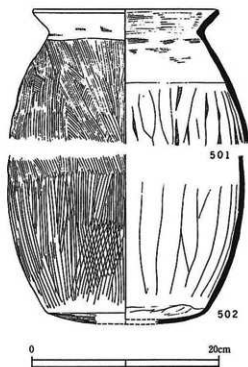
橋遺跡0地区V層より出土している。これは古墳時代(船橋0-V様式)に属する。平底の形状、体部外面下半部の目の粗いハケ調整、体部内面の縞状の削り状にナダた痕跡、口頸部の形態と類似点が多いため参考例としてあげておきたい。今後の検討課題である。

最下層より、外面に平行引き上カキ目調整痕、内面に同心円文のある須恵器甕で、酸化炎焼成のため土師器甕のようにみえる破片と外面に丁寧なカキ目調整の施された提瓶体部と考えられる破片が出土している。

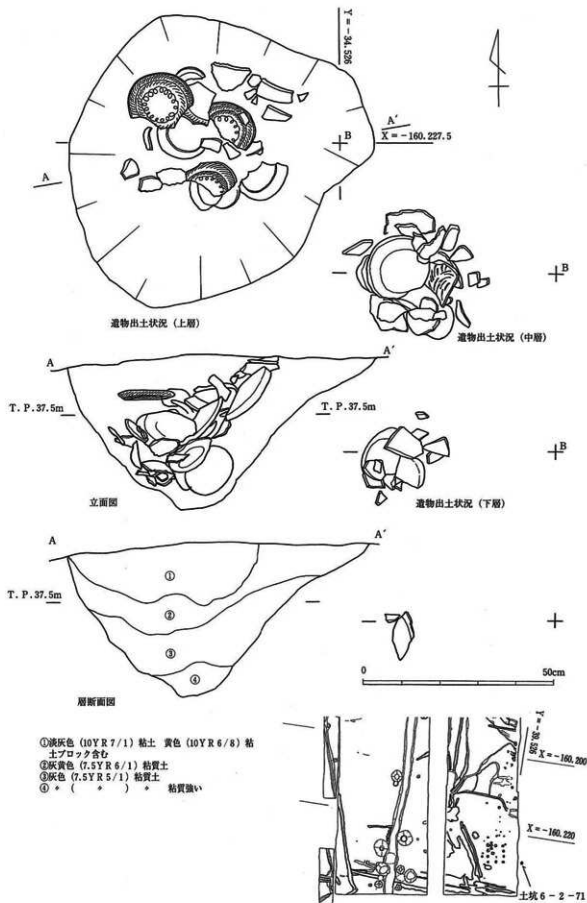
土坑6-2-71 (第44図)

掘立柱建物1-7の南東約10m、その6-2調査区で検出された土坑である。墨書をもつ土師器杯などが多量に出土した。平面不整形円形で径0.8m程度、深さ0.4mで断面V字形に掘りこまれた土坑である。

埋土上層は地山の黄色粘土塊を含む淡灰色粘土で遺物はほとんど含まない。中層は灰黄色粘質土で遺物はこの層以下から出土している。下層は粘質が強くなる。中層以下は遺物が



第43図 船橋遺跡出土土師器甕



第44図 土坑 6-2-71 平面図・断面図・遺物出土状況 (10分の1)

集中して廃棄されたような状態で埋まっていた。

土坑6-2-71出土土器 (第45図)

6・7は須恵器、他は土師器である。1は外反ぎみに立ちあがった口縁の端部を内側に丸めて肥厚させている。内面に2段の放射状暗文を施し、底部は連弧状暗文、外面は体部に横方向の丁寧なへら磨きを施している。2は10%程度の残存。1と同様の体部形態をもつが、内面のへら磨きは1段、外面にも横へら磨きを施す。3は口縁部を一部欠くのみで残存良好。口径13cm、体部は外上方にまっすぐのびて、端部はまるくおさめる。内面体部から底部半ば付近まで連続する放射状、底部中央には連弧状暗文を施す。口縁部外面は強い横ナデを施す。4は口縁端部内側を僅かに凹線状に仕上げ、口縁部内外面ともに丁寧なへら磨きを施している。5は口縁端部にわずかに内傾する面をもつ。内面は底部から口縁部にかけて円周状にへら磨きのち、丁寧な放射状暗文を施す。外面底部は一方方向のへら削り、体部下半は4方向からへら削りを施す。9は5分の1程度の残存。器表が荒れているが、内面は放射状暗文がわずかに認められる。外面は粗くへら削りを施すが表面に凹凸を残す。体部下半はへら削り。10は底部のほとんどを欠く口縁部・体部6分の1程度の残存。体部内面は放射状暗文を施すが、外面はなで調整。

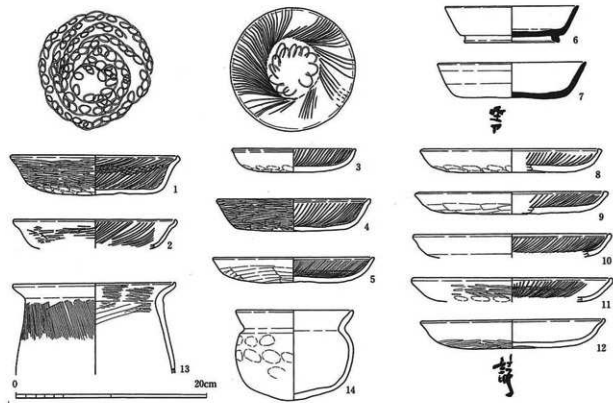
12は内面の器表が摩滅し調整不明。外面は底部・体部下半にへら削りを施す。外面底部には墨書がある。(図版80-7')

須恵器杯6は底部3分の1、口縁部わずかに残存。内外面ともに丁寧な回転なで調整。須恵器杯7は完形で出土。底部内面不整方向なのでのち体部・口縁部にかけて回転ナデ調整。底部外面に墨書がある。

(図版80-4')

土坑2-41 (第46図)

本線トレンチの北部 (X=-160.590) に位置し、不定形土坑2-1を切った状態で検出された。遺



第45図 土坑6-2-71出土遺物 (4分の1)

構の平面形は、南北に長い楕円形を呈し、規模は長軸が2.4m、短軸が1.1m、深さが6cmを測る。埋土は褐灰色（10YR 4/1）シルト質粘土であり、遺物は多くが、上面付近より集中して検出された。

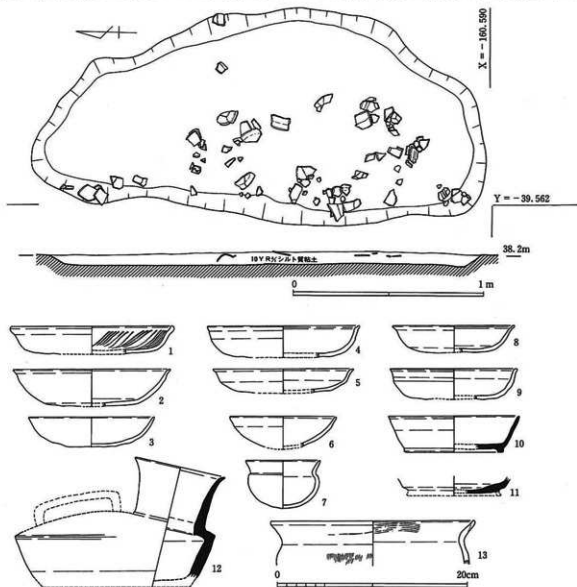
遺物は平均して比較的遺存状態の良好なものが多いが、いずれも小片であり、また、土師器製品が量的に須恵器製品を凌駕している。

1～8は土師器杯・皿類であり、口縁部と体部の形態から大きく2類に分けられる。

I類（1・4・8）は体部が直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は屈曲して、さらに、外方へのびる。端部内面に凹線状の調整痕を残すものである。

このうち1は土師器杯類の古相をもっとも良く残すものであり、口縁端部は肥厚気味に丸く仕上げられるとともに、外折した後に若干内方へ屈曲させる状況が認められる。体部内面には、斜射暗文が施されているが、その施文の状況は著しく簡略化され、5～6条単位の磨きの間隔には粗さがめだつ。

4・8はともに端部が尖り気味に仕上げられている。口縁部内面は、いずれも外斜して整形されており、端部が内折する特徴的な形態は凹線状の調整痕にのみかがわれるだけである。外面の調整は、体部上半まで丁寧な横ナアが施されている。体部下半、および、底部の外面は不調整である。胎土は砂粒



第46図 土坑2-41平面図・断面図（20分の1）・出土遺物（4分の1）

をほとんど含まない緻密なものであり、焼成は良好である。

Ⅱ類(2・5・9)は、内湾気味に立ち上がる体部と、外反する口縁部から構成される。このうち、2・5は、口縁端部を尖らせて成形しており、5・9は、体部外面上半の横ナデにより、体部の中位に屈曲部を有する。外面の調整は、体部上半まで横ナデが施されており、下半、および、底部は不調整である。胎土は比較的緻密で、色調は暗赤褐色を呈する。口径は16.5~13.3cm、器高は4.0~3.3cmを測る。

Ⅲ類(3・6)は、丸みを帯びた底部から内湾気味に体部が立ち上がるもので、口縁部は、6が横なでにより体部外面中位に弱い稜を形成するものの、端部は尖り気味のまま、外上方へのびる。口径は3が13.2cm、6が11.4cmであり、器高はともに3.2cmを測る。胎土は比較的緻密で、色調は淡赤褐色を呈する。

10・11は須恵器杯身である。体部は直線的に外上方に立ち上がり、底部には断面が方形を呈す低い高台が貼りつけられる。口径は14を測る。胎土は緻密で、色調は暗灰色を呈する。

12は須恵器平板であり、口縁部から体部にかけての部分が残存している。頸部はゆるやかに外反してのび、尖り気味に仕上げられた口縁部に達する。頸部の内外面とも丁寧な横ナデ調整が施されており、口縁端部の内面には幅の狭い平坦面が形成される。体部上面と側面の境は鋭く屈曲し、内面には同部位の接合痕が認められる。

7・13は土師器甕類である。7は丸底の胴部と、直線的に外上方へのびる短い頸部から構成される。口縁部には強い横ナデが施され、その結果胴部との境に鋭い稜が形成される。胴部は内面に丁寧な不定方向のナデが施され、外面には指頭圧痕が認められる。

13は長胴型の甕と考えられる。頸部内面には粗い横位の刷毛が、胴部外面には縦位の刷毛調整が認められる。

土坑2-42(第47図)

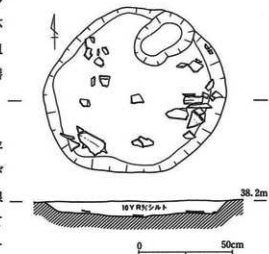
本線トレンチの北部(X=-160.600)に位置し、不定形土坑を切って検出された。同じく不定形土坑を切って検出された土坑2-41の南側約13mに位置する。

平面形態は、ほぼ円形を呈し、規模は南北89cm、東西が99cmを測り、残存する深さは6~8cmである。また、当遺構内の北東部はビット2-168によって切られており、その結果、当遺構は不定形土坑2-1に後出し、ビット2-168に先行する。

埋土は褐灰色シルト(10YR5/1)であり、遺物の多くは底部近くから検出された。出土した土器の構成は、不定形土坑2-1・土坑2-42を通じて、原則として杯・皿類を主としたものであったが、当遺構に関しては、非供膳系の製品が比較的多く認められた。

土坑2-42出土土器(第48図)

1~3は土師器杯・皿類である。このうち1・2は、平らな底部から内湾してつづく体部下半と、外反気味にのびる体部から構成され、口縁部は屈曲し、端部内面には沈線または、凹線状を呈する。また、端部は丸く仕上げられている。調整はともに、外面の口縁部から体部上半まで横ナデが施され、下半部は不調整である。



第47図 土坑2-42遺物出土状況(20分の1)

内面の調整は、表面の剥離が著しく、不明瞭な部分が多いが、1は約1cmの間隔で粗い斜放射暗文が認められる。

法量は1の口径が14.7cm、器高が2.4cmを測り、2の口径は19.8cm、器高は2.6cmを測る。胎土は良好で器表の色調は黄橙色を呈し、焼成は良好である。

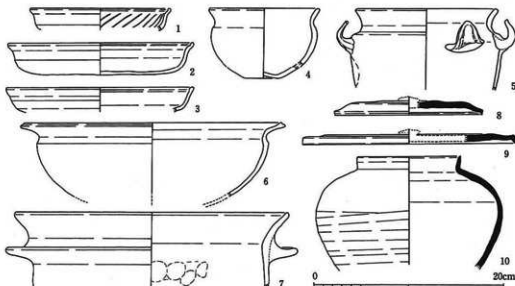
3は体部が直線的に外上方へ立ち上がるもので、底部と体部の境は比較的屈曲が強い。口縁部は肥厚し、端部は丸く仕上げられ、端部内面には凹線が残る。調整は体部外面の上半が横ナデで、下半部は不調整である。胎土は細密であり、色調は黄橙色を呈し、焼成は良好である。なお、口径は19.4cm器高は3.4cmを測る。

4は土師器小型甕である。形態は、やや内側へくぼむ底部と、内彎気味に立ち上がり、屈曲して外上方へ直線的にのびる口縁部から構成される。器表の磨減が著しいため詳細な調整は不明であるが、体部の形態から、口縁部から体部にかけての外面には強い横ナデが施されていたものと考えられる。胎土は細密で、器表の色調は暗黄褐色を呈し、焼成は良好である。なお、口径は、11.5cm器高は7.4cmを測る。5・6は土師器甕・鍋である。5は胴部上位の口縁部直下に把手が付けられたものである。把手は胴部を穿孔した後に挿入されて付けられており、外面には丁寧なナデ調整が施されているが、内面は不調整で、挿入された端部がそのまま残されている。把手部外面の形態は、三～五角形を呈しており、周縁は外面へ向かって弱く折り曲げられており、その結果、中央部は浅く凹む形態を呈している。法量は、長さが3.5cm、幅が2.6cm、厚さが0.7cmである。

一方、甕の口縁部は、外面の横ナデにより、胴部上端より比較的強く外上方へ立ち上がる。また、口縁端部は、丸く仕上げられている。胎土は細密で色調は黄橙色を呈し、焼成は良好である。なお、口径は、27.0cm、器高は7.9cmを測る。

6は浅く丸みを帯びた底部と、強く屈曲し外反してのびる口縁部から構成され、底部と口縁部の境には稜が形成されている。口縁端部は内端部が上方へのび、断面は三角形を呈する。また、端面には凹線が走る。胎土は砂粒が多く、色調は暗黄褐色を呈し、焼成は良好である。なお、口径は14.5cmを測る

7は鈎釜である。口縁部の形態は、胴部から比較的強く外折して直線的に外上方へのびる。口縁端部は内端部が上方へ尖り気味に仕上げられており、内側には浅い凹線が走る。鈎部は口縁部と胴部の境で



第48図 土坑2-42出土遺物(4分の1)

貼りづけられており、厚さは1cmを測る。胎土は生駒西龍系である。

土坑6-1 (第61図)

建物6-13・不定形土坑6-1と重複し、不定形土坑6-1の底面で検出された。長軸1.2m、短辺0.95m、深さ0.5mの隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、壁はほぼ直に立ち上がる。埋土は、6層に大別され、中位に厚さ約0.1mの炭層を挟む。遺物は、この層および2層中から、奈良時代中頃の土師器杯・皿・高杯・小型壺・羽釜、須恵器鉢・甕などが比較的まとまって出土したが、いずれも破片の割合が多く、図示できたのは土師器杯(第61図1)・須恵器碗(第61図3)のみである。

1の土師器は器壁摩滅し調整不明。3の須恵器碗は体部内外面に丁寧な横ヘラ磨き、内面底部と体部境には弧状の磨きを施している。

不定形土坑

次のような相違点と特徴を持つものを、一応不定形土坑として扱い区別する。その性格・機能については、整地層・旧地形に自然に堆積した層などが考えられるが、遺物の出土状況・周辺遺構のあり方・地形(等高線)などと併せて考えると一律ではない。

- 1) 広範囲に及び、かつ平面形態が明確でない場合が多い。
- 2) 底面は明瞭に区別されず、地山粘土層に褐灰色粘土がブロック状に入り込み、著しく凹凸な面となる。

これらの特徴をもつ不定形土坑と報告されたものを、その形成過程から分類すると、

- 1) 自然地形の凹地に堆積した土層で後世の削平をうけるなどして部分的に残存した土層の堆積範囲を示すもの。遺物の包含量は少ない。
- 2) 住居等の遺構周辺に形成された部分的な遺物包含層で比較的多量の遺物を含む。

ものに分類できるようである。

不定形土坑1-1 (第31図)

東西8m・南北12mの範囲に広がる。平面形は三角形を呈し、深さは0.1~0.25m。南コーナー部分は、幅1m・深さ0.2mの溝状となり不定形土坑1-3へ続く。壁の立ち上りは比較的明瞭である。東コーナーでは、焼土・炭化木・炭とともに多くの遺物が出土した。

不定形土坑1-2 (第31図)

東西4m・南北9m・深さ0.2m。壁はゆるやかに立ち上がるが、南側では、浅くなってプランも不明瞭となる。不定形土坑1-1の南西に隣接し、不定形土坑1-1とは、幅0.3m・長さ0.2m・深さ5cmの小溝で繋がる。南辺は溝1-8と接する。埋土は、不定形土坑1-1と同様で、更に若干の炭化物・砂粒を含む。

不定形土坑1-3 (第31図)

A地区で南北9m・東西2m、B地区溝1-10の西側・溝1-9の北側で南北8m・東西8m・深さ0.1mの規模で広がる。A地区では、溝1-5・6が続く、B地区では、北西と南東に幅1m・深さ0.1mの溝状の落ちがのび、南東部では溝1-9と続いている。この土坑の南北の広がりは、北西-南東方向にのびる浅い谷状地形を示す10cm等高線の展開方向にほぼ一致している。埋土は、10YR 6/3にぶい黄褐色微砂(中砂・10YR 6/1 褐灰色シルトのブロックを混入)で、多量の遺物が出土している。

不定形土坑1-4 (X=-160.400~-160.450 Y=-39.500~-39.530)

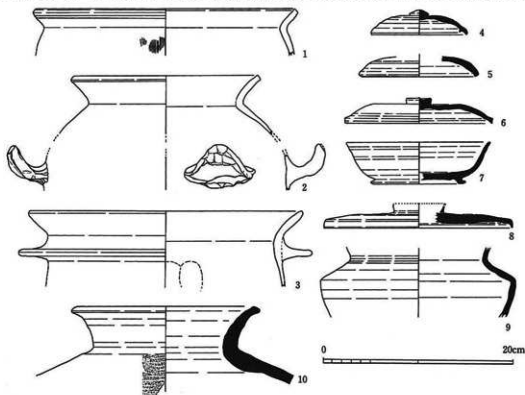
D・I地区にかけて広がる東西20m以上・南北59m・深さ5~15cmの大規模な土坑である。平面形

態は、不明瞭で地山面との境も明瞭でない。底面の状況は、1～3と同様である。埋土は10Y R 4/2 灰褐色粘土で、地山の明黄褐色粘土がブロック状に混入する。遺物の出土はほとんど見られなかった。溝1-17の北東方向にのびる支流と溝1-16がこれに続いている。周辺地山面は、平坦ではあるが、浅い沼状の旧地形に、自然に堆積したものと考えられる。

不定形土坑1-1・2出土遺物（第49図）

1は不定形土坑1-1より出土した土師器甕Aである。小片のため不確定であるが復原口径28.0cm、残存高4.9cmを測る。体部外面に縦方向のハケ調整、内面にはヘラ削り調整が施されている。口頸部はくの字形に屈曲しやや内樽気味に立ち上がり端部はわずかにつまみ出されており端部内側で浅く凹む。8世紀頃であろう。

2～10は不定形土坑1-2より出土した。3は土師器羽釜である。復原口径29.0cm、残存高8.0cmを測る。口頸部はくの字形に屈曲しており胴部のあまり張らない形態である。2は土師器甕Aで、復原口径20.0cm、残存高6.2cmを測る。把手は平面形三角形の厚みのあるしっかりした作りである。4は須恵器杯蓋の完形に近いもので、口径10.2cm、器高2.6cmを測る。天井部は深く中央にやや偏平な宝珠つまみがつく。かえりは口縁端面よりやや上位に位置し断面三角形を呈する7世紀初頭のものである。天井部外面に縦軸の長い十字形のヘラ記号がある。5は口径12.7cm、残存高2.1cm、6は口径15.6cm、器高2.7cmを測る杯蓋で、5より口径は大きくなり、天井部が深く口縁部があまり発達していない7世紀後半のものと考えられる。7は須恵器杯Bで口径15.2cm、器高4.5cmを測る。高台は口縁部立ち上がり部分より内側に位置しハの字状に付され端部は段を成している。これは6の杯蓋とセットになると考えられる。8は口径20.0cm、器高2.5cmを測る環状つまみの杯蓋である。天井部はほぼ平坦で口縁部が直角に屈曲している。これは金属容器の模倣による形態で天井部が平坦化し大型になっており8世紀代と考えられる。9は須恵器広口甕で、復原胴部最大径20.6cm、残存高7.5cmを測る。10は須恵器



第49図 不定形土坑1-1・2出土遺物（4分の1）

寛で復原口径20.0cm、残存高7.4cmを測る。口径に比べ肩部は大きく張り出しており、肩部外面には横方向の平行叩き、内面には同心円文が施されている。8世紀の中でも新しくなると考えられる。

不定形土坑1-2からは以上の器種の他、土師器杯・高杯・鉢、須恵器杯・杯A・高杯・甕・平瓶・蛸壺などが出土しており7世紀初頭～8世紀末頃までの遺物を含んでいるといえる。

不定形土坑2-1

本線トレンチの中央部やや北側に位置する（X=-160.590付近）。遺構の先後関係としては、飛鳥時代の須恵器甕を出土した溝2-33の上面に位置し、また、後に述べるように、平安時代と考えられる掘立柱建物跡2-4は、当遺構を切って柱穴が掘り込まれている。

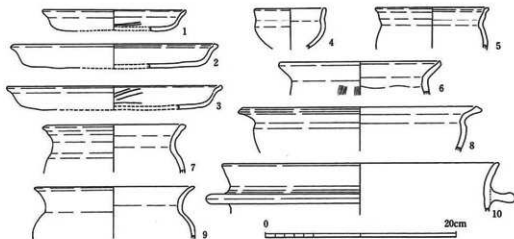
確認された平面形は、西縁が溝2-33に沿ったかたちで南端はトレンチ外へ達し、北端は井戸2-9に切られている。東縁は直線的に南北にのび、さらにその東側を比高差約22cmの一段低い平坦面と接している。ただし、当遺跡周辺は、おそらく鎌倉時代以降の耕作により大幅な削平を受けたと考えられるため、現状では南北に長い溝状を呈するものの、その性格については整地層などとしての可能性も残されるものである。検出された遺構の規模は、南北が26m、東西が9mであり、深さは0.2mを測る。

埋土は褐色粘土（10YR 5/1）であり、おもに上面付近より土師器を中心とした遺物が出土している。

不定形土坑2-1出土遺物（第50図）

1～3は土師器杯・皿類である。基本的な形態は、直線的に立ち上がる体部と、短く外折する口縁部から構成されるものであるが、1の形態は、体部から口縁部への屈曲がゆるやかであり、その結果体部は外反して直接口縁部につながる形態を呈する。なお、口縁端部は内折し、端部内面には顕著な凹線が認められる。外面の調整は口縁部外面に横ナデが施されており、内面には粗い斜放射暗文が認められる。

4～10は土師器甕・鍋類である。このうち5・7の形態は、強い横ナデにより胴部と隔絶した直線的な頸部を特徴とするものであり、口縁部は肥厚して、上面には平坦な端面が形成される。胎土には石英、長石の細粒が多く認められ、器表は褐色を呈する。6は長胴型の甕であり、口縁端部は上方へやや突出する。胎土に含まれる微砂粒は比較的少量であり、色調は明黄褐色を呈する。8は鍋、10は甕である。色調はともに暗褐色を呈するが、10の胎土はいわゆる生駒西麓の上に類似しており、多量の角閃石・石英・長石を含んでいる。



第50図 不定形土坑2-1出土遺物（4分の1）

溝 3-2

ロータリー部分の最北端および北東端で検出した。溝の途中部分は調査区外となり、部分的な調査となったが、溝の南岸部約20mと底の一部を確認した。

溝の規模は、上面のレベルがT. P. 35.7~35.75m、底面のレベルが34.7mとなり、約1mの深さである。また下端幅は0.7mである。上端幅は、北岸部が調査区外となるためわからないが、南岸部の上端・下端から推定すると3.2~4.3mという数値を測る。

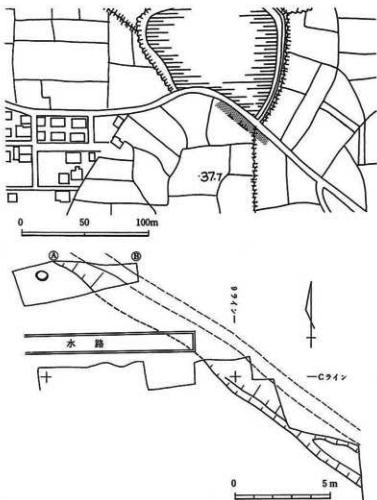
溝の断面は逆台形状を呈し、その流れの方位はおおよそN-55°-Wとなる。この方位は調査地付近より松原市新堂方面に伸びる斜行地割に平行しており、現在も斜行地割上には、用水路が存在している。溝の埋土は、最下層付近では部分的に厚さ約0.1mの粗粒砂が堆積しているが、ほとんどの所は粘土層とシルト層が互層となって堆積していた。遺物は、上部の赤灰色シルト層からは土師器の小片が40~50片、下部の灰褐色粘土層からは土師器の小片が少し出土しているが、いずれも細片のみで時期は不明であった。

なお、溝2の西に接して長径0.67m、短径0.5m、深さ0.15mの楕円形のピットを検出しており、溝にかかわる遺構の可能性も考えられる。

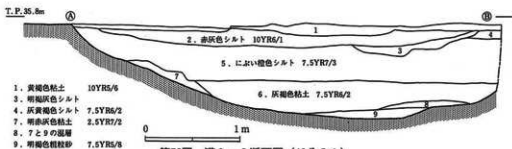
検出位置と方向から足利脱斜向丹比道に関連する溝である可能性が高いものと判断している。

溝 1-13 (第54図)

調査区西端X=-160.490付近で検出した東西方向の溝で、幅0.8~1.0m・深さ6cm程度である。南北方向の坪境溝1-22の東では検出されていない。埋土は、小礫をわずかに含む2.5Y 6/1 黄灰色シルトの1層のみである。遺物は、細片のみで、図示しえるものはなかった。



第51図 溝3-2位置図(3000分の1)・平面図(200分の1)



第52図 溝3-2断面図(40分の1)

溝 1-14 (第54図)

溝 1-13の北約1.9mにある東西方向に延びる幅約0.5m・深さ8cmの浅い溝である。埋土は、溝 1-13とはほぼ同様である。北肩部は溝 1-15と一部接している。

溝 1-15 (第54図)

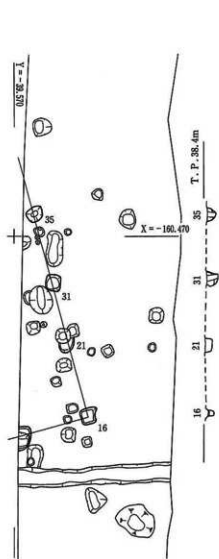
溝 1-14の北側に隣接して東西方向に延びる幅0.6~0.9m・深さ7cmの浅い溝である。埋土は、溝 1-13・14とはほぼ同様で、壁のたちあがりも同様にゆるやかで、底面との境も不明瞭である。

溝 1-I-16

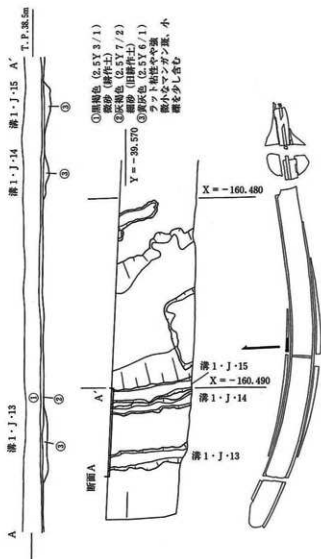
調査区東端 $X = -160.500$ 付近から、ほぼ北方向へ延びる幅1m・深さ0.2mの溝である。埋土は、地山粘土のブロックを含む灰オリーブ色粘土7.5Y 5/2である。壁は垂直近くまでたちあがり、底面は平坦である。溝の中央付近は大きく攪乱を受けるが、推定延長は約95mを測る。

掘立柱建物柱穴群 1-204 (第53図)

その1調査区南西端で検出した。位置から奈良時代と推定しているが、掘立柱建物とすれば方位が西に偏しているので、これに先行する時期のものである可能性もある。



第53図 掘立柱群 1-204 平面図・断面図
(100分の1)



第54図 溝 1-13・14・15 平面図(200分の1)・断面図
(40分の1)

第6節 平安時代の遺構と遺物

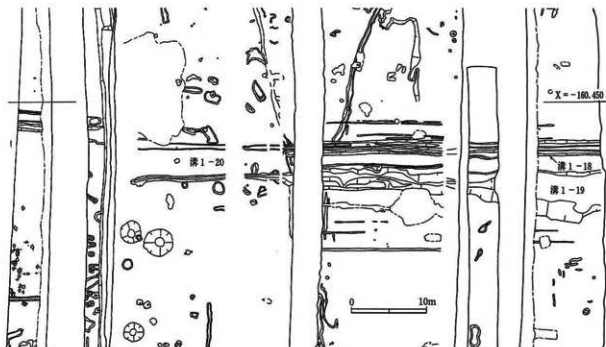
平安時代の遺構は主に調査区南南部のその2調査区X=-160.550からX=-160.650にかけて検出されている。掘立柱建物と柱穴跡・土坑が主なもので、この時期に限定される溝は少ない。このことは、平安時代に掘削された溝が、後の時代にも同じ位置で機能していたことを示すものかもしれない。集落は、掘立柱建物2・3棟からなる1単位が4箇所、それぞれ10mから20m離れて形成されている。それらは全体として東に開く弧状に配置されていたかのようなのである。建物は、2×3間を基本とし、あるいはこれに庇がつくやや大型のものと2×2間程度の小型の建物がセットで1単位を構成している。倉庫とみられる総柱建物は必ずしもすべての単位に伴ってはいない。掘立柱建物の軸はすべてがほぼ南北に一致している。

また、坪境位置で検出された東西方向の溝1-18からは平安時代（10世紀末頃）の完形の高台付き皿が出土しており、条里地割の施行時期の下限を示すものとして重要である。

また、この時期の集落を避けるように掘削された南北方向の坪境溝1-22の形状は、集落の存続した時代に溝が掘削されたことを示すようであり、この地域の条里地割とそれに沿った基幹灌溉水路の掘削の実態を示すものとして興味深い。

溝1-18（第55図）

この溝は、現地表の条里界線に位置し、北側に平行に掘られた中世の溝1-20に北半部が切られている。現存幅1.2m、深さ0.4mの比較的しっかりした溝で、西端は溝1-22につながらずに消滅する。遺物は底付近から土師器高台付皿が完形で出土した（第79図-2）。皿は口径15.8cm、器高5.0cmを測る。内外とも剥落が著しく調整は不明であるが、皿部外面に三段の指頭圧痕がみられる。高台は高く余り開かずしっかりしており、この器種の中でも古く位置付けられ、10世紀末頃と考えられる。



第55図 溝1-18・19・20平面図（500分の1）

掘立柱建物 2-2 (第56図)

本線トレンチの東北部 ($X = -160.550$) に位置する。建物の規模は、桁行 3 間、梁行 1 間である。梁行の距離は 3.93m を測り、桁行の平均柱間距離の約 2 倍を示している。そのため、調査過程において梁行の中間部分で柱穴検出の精査を行ったが、現状での確認にはいたらなかった。全面にわたり江戸時代以降の耕作による削平が著しく、残存する一部のピットにも浅いものが認められることから、梁行の中間に位置するピットは失われた可能性が高い。桁行の柱間の平均距離は、北から 1.77m、2.38m、1.72m を測り、中央の柱間が両端の柱間より 1 : 0.75 の比率で長くなっている。なお、桁行の方向は $N-7.5^{\circ}-W$ である。

ピットの平面形は一般に隅丸の方形を呈し、深さは最深で 0.30m である。柱痕跡はピット 46・48 で認められ、直径は 0.2m を測る。埋土の状況は一般に褐灰色シルト (10Y R 6/1) 褐灰色シルト (10Y R 4/1) の 2 層である。

土師器破片が僅かに出土したのみであるため、詳細な時期は不明であるが、遺構の切り合いから平安時代以前に比定される。

掘立柱建物 2-3 (第57図)

本線トレンチの北西部 ($X = -160.570$) に位置し、北東に位置する掘立柱建物 2-2 との距離は約 30m、掘立柱建物跡 2-4 とは南側約 23m を隔てる。

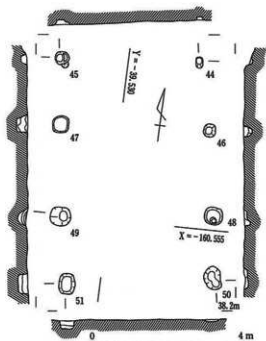
建物の規模は桁行 2 間、梁行 2 間であり、柱間の距離は最大 2.32m、最小 1.96m であり、平均で、2.06m を測る。また、その結果、当建物の東西は 4.36m、南北は 3.92m を測るため、東西を桁行と考えることができよう。なお、梁行の方向は北に一致する。

残存する柱穴の多くは柱痕跡と考えられ、平面形態は一般に円形を呈する。ただし、ピット 144・146 では平面形態が方形、または、楕円形を呈する掘形が確認された。掘形の規模は、最大径が 0.52m、最深が 0.4m を測り、柱痕跡の直径は 15cm、埋土は灰黄褐色シルト (10Y R 5/2) である。

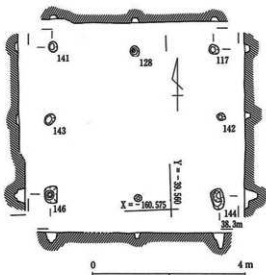
遺物は、土師器の細片が少量認められたのみであるため、詳細な時期は不明であるが、建物の軸が他の平安時代掘立柱建物と共通するため、平安時代に比定されるものと考えられる。

掘立柱建物 2-4 (第58図)

本線トレンチの西北部 ($X = -160.600$) に位置する。構 2-1 の東側約 11m、掘立柱建物 2-5 の



第56図 掘立柱建物 2-2 平面図・断面図 (100分の1)



第57図 掘立柱建物 2-3 平面図・断面図 (100分の1)

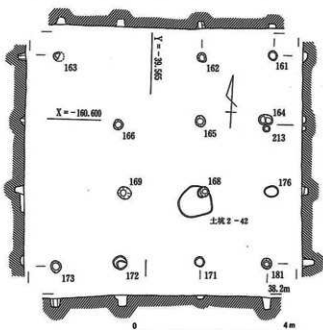
北側約12mにあたる。切り合いに関しては、他の建物跡同様に、上部を江戸時代以降の耕作により削平されており、一方で、不定形土坑2-1、土坑2-42に後出する。北西付近が擾乱により削平されているが、建物の規模は、桁行3間、梁行3間の総柱建物と考えられ、それぞれ5.6m、5.52mを測る。柱間の距離は、最大が2.12m、最小が1.72mを測り、平均は1.87mである。なお、南北軸は北に一致する。

柱穴掘方の平面形は一般に円形を呈し、直径は0.34m、深さは最大で0.3mを測り、柱痕跡の直径は約12cmである。埋土は褐灰色粘土(10YR 4/1)である。

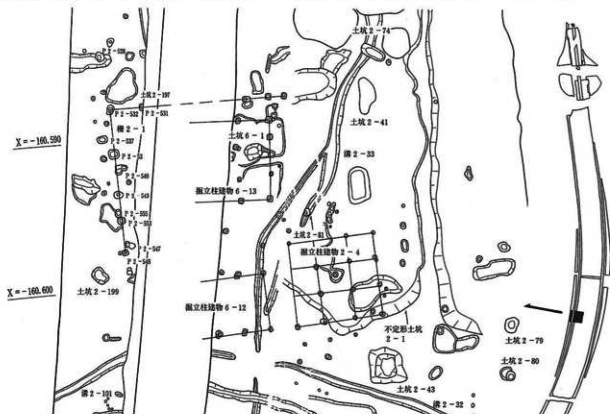
遺物は、土師器の細片が少量出土したのみであり、詳細な時期は不明であるが、土坑2-42をはじめとする遺構の切り合いから、平安時代以降に比定される。

掘立柱建物6-12(第59・60図)

掘立柱建物2-4の西側1.6mの所に位置する東西棟の建物である。2間(3.75m)×2間(3.55m)分を検出した。なお、西方は調査区外にのびる。南側柱穴列は、建物4の南側柱穴列の延長に一致する。柱間寸法は、1.75~1.8mを測る。柱掘形は、平面方形を呈し、規模は一辺0.3m・深さ0.1~0.3m。埋土は、暗褐灰色シルトで、炭・焼土粒を多



第58図 掘立柱建物2-4平面図・断面図(100分の1)

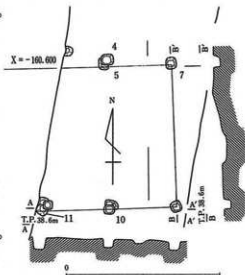


第59図 掘立柱建物2-4・6-12・13 構2-1配置図(250分の1)

く含むものもある。遺物は、土師器の細片が少量出土しているが、詳細な時期は明らかでない。

掘立柱建物 6-13 (第59・61図)

掘立柱建物 6-12の北側4.6mの所に位置する南北棟の建物である。不定形土坑1と重複し、切り合い関係から不定形土坑1に後出することがわかる。1間(2.1m)×4間(5.36m)を検出した。なお、西側は調査区外にのびる。棟の方向は、N-45°-Eを示し、建物3とはほぼ一致する一方で、建物2-4とは約7°の偏差をもつ。柱間寸法は、1.1~1.8mを測る。柱掘形は、一辺25~45cm・深さ15~25cmの方形を呈し、ピット4では、径14cmの柱痕跡が確認された。埋土は建物6-12と同様で、炭・焼土粒を含むものもある。なお、遺物は、土師器細片が少量出土しているが、詳細な時期は明らかでない。

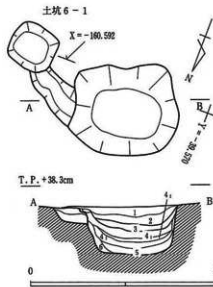


第60図 掘立柱建物 6-12平面図・断面図 (100分の1)

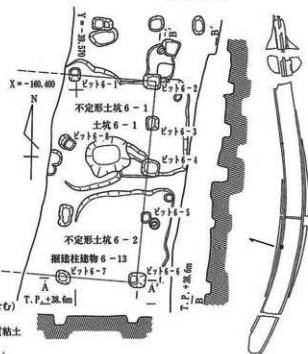
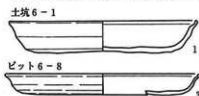
掘立柱建物 2-5 (第63図)

本線トレンチ西北部 (X = -160.615) に位置する。柱穴の配列は桁行3間、梁行2間で、東面に庇をもつものであるが、当該部分が建物内部の仕切りである可能性も考えられる。

柱間の距離は、最大2.12m、最小1.88mを測り、平均は1.96mである。梁行は座標北に一致する。



1. 褐灰色シルト
(灰白色シルトのプロック、マンガング粒を含む)
2. 褐灰色シルト 3. 炭屑 (赤土粒を含む)
4. 暗灰色シルト質粘土 4. 灰黄褐色シルト質粘土
5. 灰黄褐色シルト
(黄褐色粘質シルトのプロック、中砂を含む)
6. にぶい赤褐色シルト (中砂、炭を含む)

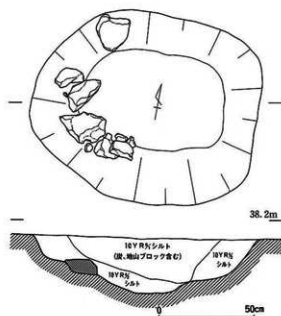


第61図 掘立柱建物 6-13平面図・断面図 (100分の1) 土坑 6-1平面図・断面図 (40分の1) 出土遺物 (4分の1)

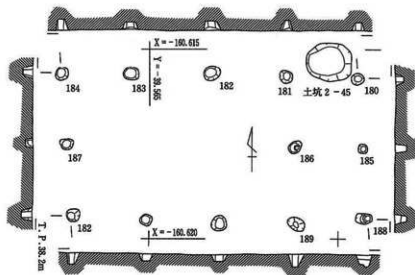
掘方の平面形は円、または楕円形を呈し、直径は0.4m、深さは最大で0.34mを測る。なお、柱痕跡の直径は約18cmである。埋土は、褐灰色粘土(10YR 5/1)と黄灰色シルト(2.5Y 4/1)の2層に分けられる。

ピット 2-185 (第64図)

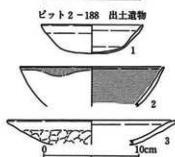
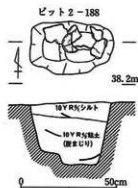
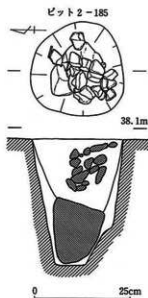
掘立柱建物 2-5 の東辺の中央に位置し、直径0.24m、深さ0.33mを測る。堆積は2層に分けられ、上層では浮いた状態で小礫が、下層には直径16cm程の礫が認められた。ピットからも小礫の出土が認められることから、掘形に詰められた石とも考えられるが、他のピットからはその痕跡は認められなかった。また、遺物は、ピット 2-188から土師器杯・皿、黑色土器A類碗が出土した。



第62図 土坑 2-45平面図・断面図 (20分の1)



第63図 掘立柱建物 2-5 平面図・断面図 (100分の1)



第64図 ピット185・188平面図 (10分の1)・断面図 (20分の1)・出土遺物 (4分の1)

土坑 2-45 (第62図)

平面形態が東西に長い楕円形を呈し、規模は長径が1.2m、短径が1.0m、深さが0.3mを測る。埋土は、底面、および、側面を覆うように灰褐色シルト(10YR 4/2)が廻り、上層は炭・地山のブロックを含んだ褐色シルト(10YR 5/1)が堆積する。

遺構の西側には、被熱により破砕したと考えられる花崗岩礫が、一部地山に食いこむ形で確認された。遺物は、土師器の細片が少量出土したのみである。

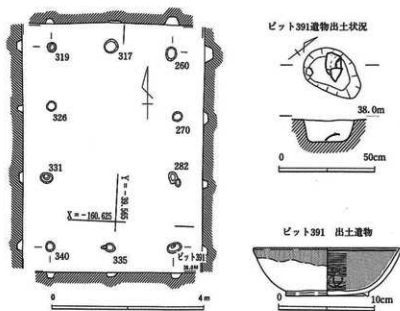
土坑 2-45の時期については、建物跡 2-5 との切り合いが認められないため、その先後関係は不明である。底面をはじめとする他の部位では焼土、および、被熱の痕跡が認められず、火を使う遺構である可能性は少ないと考えている。

掘立柱建物 2-6 (第65図)

本線トレンチ西北部(X=-160.620)に位置する。北側には約1mを隔てて掘立柱建物 2-5 が位置する。建物の規模は、桁行 3間、梁行 2間であり、桁行は北に一致する。柱間の距離は、最小1.55m 最大1.85mを測るが、1.6mの箇所が6箇所におよび、平均は1.66mを示す。桁行の全長は平均5.2m、梁行の全長は3.2mである。

柱穴掘形の平面形態は、円形、または楕円形を呈し、規模は、最大径が0.4mを測り、深さは同じく最大で0.22mである。なお、ピット 2-331からは柱穴の底部で柱痕跡が確認され、その直径は12cmである。また、ピット 283からは、建て替えの可能性をうかがわせるピットの切り合いが確認された。柱穴埋土は褐色シルト(10YR 6/1)の単層であり、いずれも柱を抜き取った後の堆積状況を示している。

遺物としては、ピット 391から黒色土器碗A類が出土した。これは柱の抜き取り後に廃棄された状態で、全体のほぼ3分の2が残存していた。いずれも形態は、やや丸みを帯びた底部からゆるやかに内湾する体部と、直線的に外上方へのびる口縁部から構成される。また、口縁端部はそのまま屈曲せずに、丸く仕上げられており、内面には細い沈線が認められる。なお、外面は磨滅が著しく調整は不明である。



鳥丸線立合17-井戸1または、平安京右京二条二坊SX01の時期に併行するものと考える。

第65図 掘立柱建物 2-6 平面図・断面図(100分の1) ピット 391 遺物出土状況(40分の1)・出土遺物(4分の1)

掘立柱建物 2-7 (第67図)

本線トレンチの北西部 ($X = -160.625$) に位置する。建物の規模は、桁行 3 間、梁行 2 間で西面に庇がつく。庇の柱穴は、約 2.3m の間隔で 4 箇所検出され、このうち北からの 3 箇所は 2 柱穴がセットとなっていることから底部分のみの建て替えが行われていたと考えられる。柱穴の間隔は、最小 1.8m 最大 2.2m を測り、平均は 2.1m であり、桁行の全長は 6.48m、梁行は 3.96m、庇部分 2.3 から 2.7m である。桁行の方向は座標北に一致する。

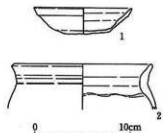
柱穴掘方の平面形態は円形を呈し、直径は最大で 0.48m である。さらに、四隅の柱穴は全て深く掘り下げられており、中間部の柱穴と差が認められる。前者はいずれも 0.5m 以上、後者はビット 253 を除いて 0.2m を測る。また、柱痕跡が、四隅の柱穴をはじめとして検出された。その直径は平均して 16cm を測る。

遺物はビット 238 から土師器片が出土している。第 66 図 1 は、はさみ山遺跡を中心にみられる杯であり、胎土には白色微粒を含み、色調は明黄褐色を呈する。2 は甕の口縁部と考える。形態の特徴は、短く屈曲する頸部と直線的に外上方へびる口縁部にみられ、口縁端部は、断面が隅丸の方形を呈する。

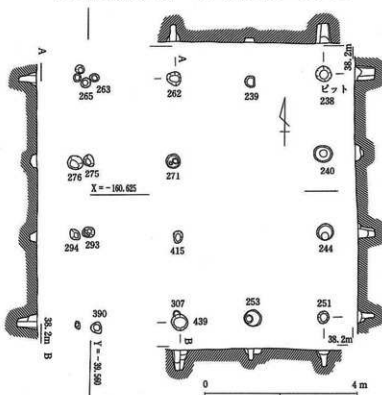
口縁部、頸部の内外面は丁寧な横ナアが施され、胴部内面には指押さえ痕が残されている。胎土には長石の微粒を多く含み、色調は明褐色を呈する。

掘立柱建物 2-8 (第68図)

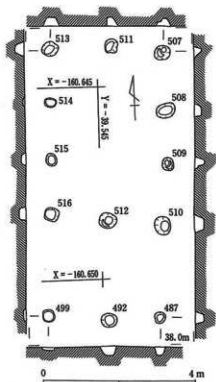
本線トレンチの中央部東側 ($X = -160.655$) に位置し、掘立柱建物跡 2-7 のさらに南東約 17m を隔てる。規模は、桁行 3 間・梁行 2 間で、南辺に 1 間の庇部または間仕切りを想定させる柱穴の配列を有する。なお、桁行は北に一致する。



第66図 掘立柱建物 2-7 ビット 238 出土遺物 (4 分の 1)



第67図 掘立柱建物 2-7 平面図・断面図 (100分の 1)



第68図 掘立柱建物 2-8 平面図・断面図 (100分の 1)

柱間の距離は、最小1.4m、最大1.6mを測り、平均1.5mである。また、南側3箇所の柱穴については、柱間の距離が、平均1.46m、2×3間部分との距離は平均2.54mを測り、その結果、底状部分を含んだ桁行の全長は7.08m、梁行の全長は3.0mである。

柱穴掘形の平面形態は、一般に円形を呈し、最大直径は0.44m、深さは最深で0.24mである。なお、ピット2-507・509からは底部で柱痕跡が確認され、直径は12cmを測る。

遺物は、土師器の細片が少量検出されたのみであり、埋土は、一般に褐灰色シルト(10YR 5/1)である。

掘立柱建物2-10(第69図)

本線トレンチの中央部東側(X=-160.660)に位置する。軸を同一にする掘立柱建物跡2-8とは、北側5.0mを隔て、同じく掘立柱建物跡2-11は、東側3.6mに位置する。なお、南東隅において掘立柱建物2-9の柱穴と切り合い関係にある。

建物の規模は、桁行2間、梁行2間である。柱間の距離は、最小1.80m、最大2.14m、平均1.93mを測り、その結果、南北長は3.80m、東西長は4.05mである。なお、軸は北と一致する。

柱穴掘方の平面形態は不整形円形、または、楕円形を呈す。柱穴は南・北辺の中央部柱穴は直径20cmと小型であり残存深さも10cm程度である。一方、東・西辺の中央、および南部分の柱穴は比較的大きく直径40cm前後・深さ40cmを測る。これら大型の柱穴には直径が19~14cmの柱痕跡が認められ、また、埋土中から土師器、黒色土器が出土した。掘方の埋土は一般に褐灰色シルト(10YR 5/1)を基本とするが、柱痕跡は灰黄色シルト(2.5Y 6/2)・褐灰色粘土(10YR 4/1)に分けられる。

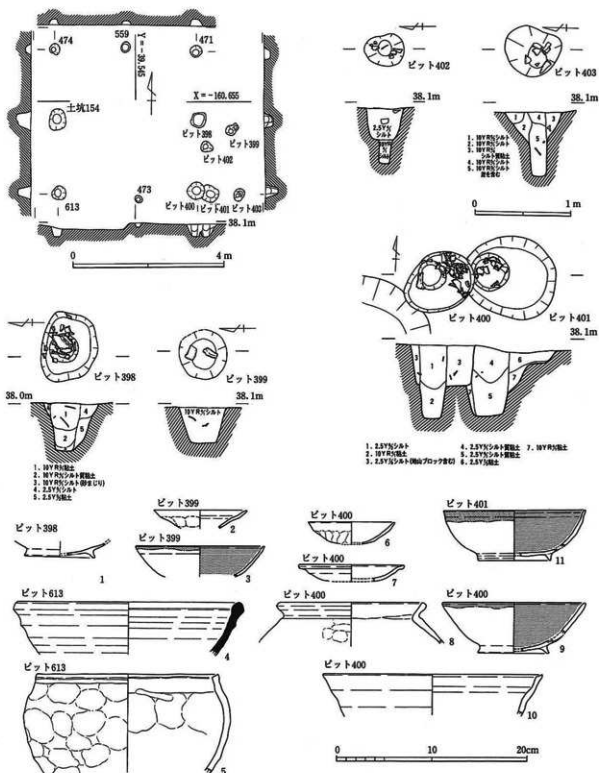
掘立柱建物2-10周辺にはいくつかのピットが検出された。ピット399・402・403は掘立柱建物跡10の東、および、南東に位置し、土師器、黒色土器等を包含している。各柱穴掘方の平面形態は、不整形円形を呈し、規模は直径25cm、深さは最大34cmを測る。なお、ピット402・403からは柱痕跡が確認され、直径は9cmである。

遺物はピット2-398・399・400・401・613から出土した。

このうちピット2-400に切られているピット2-401は、当遺構の周辺に同規模の建物跡が認められない点から、当建物跡が建て替えられた痕跡を示すものとも考えられるが、出土遺物において著しい時期差は認められなかった。

1・3は黒色土器である。2は土師器杯、胎土は比較的緻密で、色調は黄褐色(7.5YR 8/3)である。4は窯窯系と考えられる須恵器鉢である。口縁部は玉縁状に肥厚し、体部外面にはナデ調整の際に残された凹凸が認められる。色調は明灰色を呈する。5は土師器片口鉢と考える。10と同様口縁部のみ横ナデが施され端面には凹縁が廻る。胎土には石英・長石粒を多く含み、明黄褐色を呈する。6は、はさみ山遺跡を中心にして多く認められる土師器杯である。体部外面下半部は強い指押さえによりやや外反状にくぼむ。口縁部は横ナデにより直線的に整形されており、端部はそのまま尖り気味に仕上げられている。胎土は粗く砂粒を含み、色調は灰褐色を呈する。7はいわゆる「て」字状口縁を有する土師器皿である。体部内面、および外面上半部に横ナデが施され、口縁部は短く立ち上がる。胎土には、微細な雲母を僅かに含むものの砂粒のみられない緻密な粘土を使用しており、色調は淡褐色を呈する。8は土師器甕の口縁部と考える。胴部から口縁部へは強く屈曲して断面が「く」字状を呈する。内・外面ともに横ナデが施され、内面は浅くくぼみ、端部はゆるやかに湾曲する面を形成する。胎土には長石、石英粒を多量に含み、色調は暗黄褐色を呈する。9は黒色土器A類碗である。ともに細片のため正確な

形態を復原するに至らなかった。胎土は細密で、白色微粒を含む。色調は明褐色である。10は土師器鉢口縁部と考える。直線的に外上方へのび、端面には浅い凹線が形成される。胎土には白色微粒が多量に認められ、色調は明赤褐色である。11は黒色土器碗、体部はゆるやかに内湾し、口縁部は強い横ナデによりやや外反気味にのびる。胎土は細密で色調は明褐色を呈する



第69図 掘立柱建物2-10平面図・断面図(100分の1) 柱穴平面図・断面図(40分の1) 出土遺物(4分の1)

掘立柱建物 2-11 (第70図)

本線トレンチの中央部東側 ($X = -160.650$) に位置し、掘立柱建物 2-9・10とは東へ3.6mを隔てる。建物の規模は、桁行2間、梁行2間であり、軸は北に一致する。柱間の距離は、最小1.43m、最大1.75mを測り、南北の全長は3.2m、東西の全長は2.9mである。柱穴掘方の平面形は不整形円形を呈し、規模は0.2m前後を測る。なお、深さは0.3m程残存している。

掘立柱建物 2-9 (第71図)

本線トレンチ中央部東側 ($X = -160.650$) に位置し、北辺を掘立柱建物 2-8と重複して検出された。建物の規模は、桁行2間、梁行2間の総柱であり、梁行はほぼ北に一致する。柱間の距離は、最小1.32m、最大1.88mを測り、平均は1.63mである。なお、東西の全長は3.64m、南北の全長は2.88mであり、東西を桁行と推定する。柱穴の平面形は一般に不整形円形を呈し、規模も直径0.28m程の小型が多い。なお、深さは最大0.3mまで確認された。

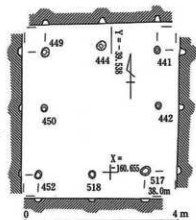
掘立柱建物 2-9・2-11とも遺物は土師器細片のみである。北東隅のピットは掘立柱建物 2-8に切られている。したがって、当遺構は掘立柱建物 2-8・10・11に先行する時期に比定されよう。

土坑 2-132 (第73図)

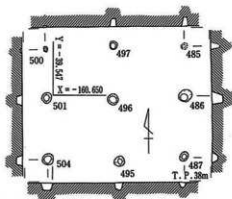
本線トレンチの中央部東側 ($X = -160.650$) に位置する。掘立柱建物 2-10の南約5mにあたり鎌倉時代以降の遺物を出土した溝 2-76に切られて検出された。

遺構の形状は、ゆるやかな傾斜でくぼむ浅い楕円状をなし、平面形態は南北方向にやや長い楕円形を呈する。規模は、長径が4.1m、短径が4.0mであり、深さは0.4mを測る。

埋土は4層に分けられ、遺物はおもに第Ⅲ・Ⅳ層から出土した。第Ⅰ層は明黄褐色シルト質粘土 (10YR 6/6)、第Ⅱ層は黄橙色粘土 (10YR 6/3) である。ともに包含する遺物の量は僅少であり、それらがまたいずれも著しい磨滅を受けていることと併せて、両層は、二次的堆積によるものであることが示唆される。一方、第Ⅲ層は褐灰色粘土 (10YR 5/1) 第Ⅳ層は灰色砂層であり、特に第Ⅳ層は遺構の北東部に偏っての堆積が認められた。



第70図 掘立柱建物 2-11平面図・断面図 (100分の1)



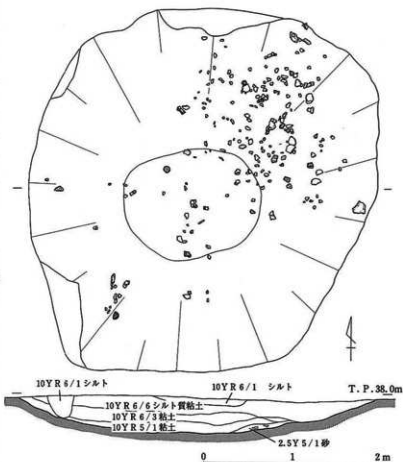
第71図 掘立柱建物 2-9平面図・断面図 (100分の1)



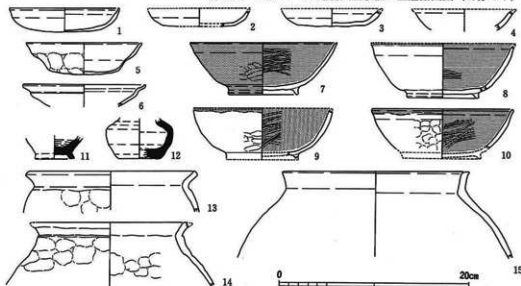
第72図 掘立柱建物 2-8~11 土坑 2-132配置図 (1000分の1)

出土遺物は、大半が土師器、黒色土器で、須恵器は小型の壺が数点認められたにすぎない（第74図）。

土師器は、皿・杯・甕が出土した。1～6は皿・杯類である。このうち1～3は、体部が内湾気味に立ち上がるもので、1の口縁部は尖り気味に仕上げられ、端部内面に凹線状の調整が施されている。5は、はさみ山遺跡を中心に多く認められる器形に類似する。体部は指押さえにより強く外反して立ち上がり、直線的に外上方へのびる口縁部につながる。口縁部外面、および、内面には横ナデ調整が施され、端部はわずかに外折する。6は口縁部がいわゆる「て」字状を呈するもので、強い横ナデにより屈曲する口縁部と体部の境には稜が形成される。胎土は緻密で、色調は淡褐色を呈する。7～10は黒色土器碗であり、いずれも内面に比較的粗い磨きが施されており、外面は口縁部に弱い横ナデが認められる以外、不調整である。また、7は内・外面ともに黒色処理が施されるB類である。体部の形態は、一般に直線的な立ち上がりを見せるが、8は体部下半において緩やかに屈曲している。口縁部は横ナデ調整の強さにより外反気味に仕上げられるもの（9・10）と、そのまま尖り気味にのびるもの（7・8）に分けられ、前者の場合口縁端部内面に残される沈線は



第73図 土坑2-132遺物出土状況・土層断面図（40分の1）



第74図 土坑2-132出土遺物（4分の1）

顕著に認められる。11～13は甕類である。調整はいずれも口縁部に横ナデ、胴部に指押さえが施されている。他地域における当該土器の類例として、黒色土器の形態に加えて、同B類の存在は薬師寺西僧房の資料に対比される。また、「て」字状口縁土器は平安京右京二条二坊SX01、および、京都市烏丸線立ち合い調査17区井戸1に類似し、後者においては、黒色土器の様相も近似していると考ええる。なお、前者においては、口縁部と胴部の境に稜を形成する12の甕に対比される資料も出土している。

井戸2-19

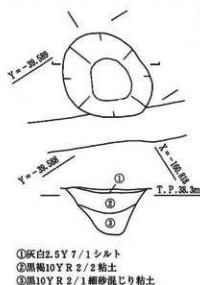
Hトレンチ北東隅、X=-160.820付近で検出した。平面楕円形で長径1.0m短径0.8m深さ0.5mである。その他の土坑出土遺物（第76図）

1は土坑2-89（X=-160.880）出土の土師器である。遺構の平面形態は南北に長い隅丸の長方形を呈し、規模は、長辺が5.95m、短辺が1.40m、深さが0.11mを測る。埋土は黄灰色シルト（2.5Y 6/1）である。土器は「平城」分類による椀Cと考えられ、口縁部は端部内面に外斜する平坦面を有する。胎土は緻密で、色調は淡赤褐色を呈する。

3・4は土坑2-74（X=-160.580）出土の土師器杯・皿類である。遺構の平面形は楕円を呈し、底部は比較的急に落ちこんでいる。埋土は褐灰色シルト（10Y R 4/1）の単層である。規模は長径が1.57m、短径が0.68mであり、深さは0.10mを測る。4は高台を有する皿である。体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外折し、端部は肥厚して丸く仕上げられている。また、体部内面には粗い斜放射暗文が認められる。外面の調整は、剥離が著しいため不明であるが、体部中位には鈍い稜が形成されている。胎土は緻密で、色調は淡赤褐色である。

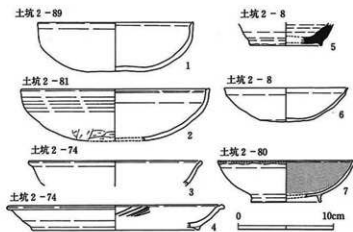
5・6は土坑2-8（X=-160.540）出土である。遺構の平面形は、ほぼ円形を呈し、規模は直径が2.6mを測る。また、底部は播鉢状を呈し、深さは0.57mである。6は、はさみ山遺跡周辺でみられる土師器杯に類似す内・外面ともに剥離が著しいため調整は不明であるが、口縁部は強いナデにより薄く仕上げられている。

7は土坑2-80（X=-160.620）出土の黒色土器椀A類である。遺構は直径が0.92mを測るほぼ円形の土坑であり、深さは0.77mである。埋土は褐灰色粘土（10Y R 4/1）の単層である。7の体部は大きく内彎して立ち上がり、口縁部は肥厚して丸く仕上げられている。また、底部には比較的高い高台が貼りつけられる。



①灰白2.5Y 7/1シルト
②黒褐10Y R 2/2粘土
③黒10Y R 2/1細砂混じり粘土

第75図 井戸2-19平面図・断面図
(40分の1)



第76図 土坑出土遺物（4分の1）

第7節 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、建物が検出されておらず、溝がほとんどである。溝は現地表に遺存する条里地割に合致する坪境溝と、一坪内をさらに小さく区画する溝がある。小区画溝には坪境溝とつながって水路の機能を持っていたと思われるものと、水路とはつながらず単に一定の面（耕地）を区画する機能を持つものがあるようである。

調査区の中央を南北に貫く坪境溝（溝1-22）は、現代まで機能していたため埋土からは中世以降の多量の遺物が出土したが、溝肩部分に中世遺物を含む層が残存していたことから、中世に機能していたことが確認されている。またこれに直交する東西方向の坪境溝や、それぞれに平行した区画を形成する溝などの遺構は、中世には調査区全面にわたって耕地が形成されていたことを示すと見える。

出土遺物などから中世と判断された遺構（主に溝）の位置を昭和37年3000分の1地形図（航空写真により畦畔位置を追加）に重ねると、中世以来の地割がほぼ現代まで踏襲されていたことがわかる。現代の農地景観の骨格がこの時期に形成されていたとみてよい。一般的にみれば、現地表の条里地割に直接継承される遺構が形成されるのがこの時期であるといえる。

ただし、詳細にみれば、その2調査区の平安時代掘立柱建物群2-3~7の東にはしる南北方向の坪境溝1-22は、掘立柱建物群を避けるようにして東へ張り出しており、この部分での条里坪境溝の掘削が、掘立柱建物の存続していた平安時代（10世紀頃）に掘削されたことを示している。

なお、その2調査区の $X = -160.640$ から $X = -160.730$ 付近にかけて検出された溝2-70・2-87・2-82・2-110は坪境溝とは別に「コ」字状に掘削されており、あたかも宅地（屋敷地）の区画を示すかのようである。しかし、住居などの遺構が検出されておらず、削平の可能性を考慮したとしても、遺物からもこれを傍証する証拠がないため、ここでは今後の検討課題としておきたい。

冨線（南北方向）坪境Ⅰ（ $X = -160.050$ ・ $Y = -39.560 \sim X = -160.700$ ・ $Y = -39.550$ 付近）

全調査区を南北に貫く坪境が検出されている。遺跡北端に近い $X = -160.050$ 付近で $Y = -39.560$ 、調査区南部の $X = -160.700$ 付近で $Y = -39.550$ をとおり、ほぼ国土座標南北方向に一致している（0度49分西偏）。

遺跡北端ではその5調査区概報で「坪境溝」と報告されている溝がこれにあたる。幅2.7m、検出延長10mを測る。溝中央部を現代水路が通り抜けており攪乱部分が多いが、埋土は浅黄色極細砂が堆積していた。

その1調査区では溝1-22がこれにあたる。この溝は道路予定地となるまでは水路として機能しており、埋土からは近現代遺物が多量に出土した。また溝肩部の一部には中世遺物を含む層がみられることから、中世にも機能していたことがうかがえる。溝は上端幅約3m、下端幅約1.5m、深さ約0.7mを測る。

その2調査区でもこの溝の延長が検出されているが、その直上を現代水路が攪乱しているため遺構番号は与えられておらず、「江戸時代以降の水路」として報告されている。この水路は $X = -160.570$ から $X = -160.650$ 付近で最大5m程度東にふくらんでいる。先述のように、この区域の西側には平安時代の集落が形成されており、溝はこれを避けて掘削されたものと推定される。

冨線Ⅱ（ $X = -160.900$ ・ $Y = -39.656$ 付近）

その2調査区最南端の西隅で検出された溝が坪境にあたる。 $X = -160.900$ で $Y = -39.656$ を通る。この溝は後述の冨線Ⅲの坪境溝から連続して北に折れるものである。同位置に江戸時代以降の坪境溝が重なっているため、幅・深さとも不明であるが、残存部分の最深部から幅2m程度・深さ0.2m程度と

推定される。

陌線（東西方向） 坪境溝

丹上遺跡においては南北延長1.0kmにわたって調査しており、陌線は9箇所で見出されている。以下、北から順に記述する。なお中世を遡る時期の遺構についても随時言及しておく。

陌線Ⅰ（ $X = -160.012$ 付近）

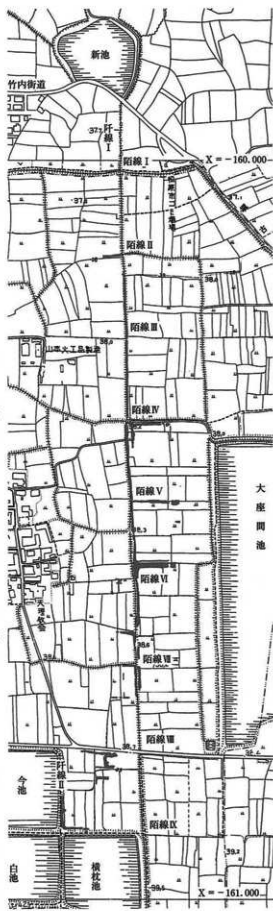
坪境溝5-1が坪境となる。溝は遺跡北端のロータリー部分Mトレンチの南端近く（ $X = -160.010$ ）で見出した。東西方向の溝で、溝の南半分は後世の水路および現代の水路改修工事によって削平を受け、西側は現代の池によって切られているが、長さ13.2m、幅2.2m、深さ0.8mの部分が残存していた。南肩は現代水路の南に現れていた落ちこみの肩と推定し、現代水路の中心を溝中心と仮定すれば、溝の座標位置は $X = -160.012$ である。溝の埋土は、大きくわけると新、旧の2層に分かれる。上層0.2m余りは中粒砂が均一に堆積しているが、その下部では上方に粗砂、下方にシルト、粘土が堆積していた。また遺物は、白磁、瓦器などの中世遺物の細片が出土している。

陌線Ⅱ（ $X = -160.128$ 付近 その1調査区坪境A）

現地表の坪境付近の第3面上面では坪境と思われる溝が陌線西側で2条検出されている。 $X = -160.127$ （溝中心）を通る溝3（旧番号）と $X = -160.129$ （溝中心）を通る溝4（旧番号）がそれで、溝あるいは両溝にはさまれた畦畔が中世の坪境にあたると考えている。ただし、現代の坪境水路が、陌線西では $X = -160.119$ で、陌線東では $X = -160.122$ で陌線坪境溝ととりついており、この直下に重なって存在した可能性も否定できない。

しかし1坪北の坪境溝5-1との距離をみると溝3・4が106mとなり、現代水路はこれよりさらに北に偏しており坪間が5m短くなるので、溝3・4を中世の坪境溝と考えている。

なお、奈良時代の建物1-4を切って掘られた溝1-1（坪交点付近で $X = -160.129$ ）は埋土から奈良・平安時代と推定しているが、溝方向は東やや南に振っており、この方向を踏襲するようにこれに平行して7m北に現代坪境水路が掘削されていることが注目される。



第77図 中世遺構位置図（5000分の1）

陌線Ⅲ (X=-160.238付近 その1調査区坪境B)

溝1-11の位置が坪境にあたる。溝1-11の出土遺物は先述のように7世紀後半～8世紀にかけてのものである。これとほぼ平行して掘られた溝1-9も同時期で、坪区画の初現として注目される。周辺には数条の溝が検出されているが、溝1-11の位置をもって坪境としておく。

陌線Ⅳ (X=-160.353付近 その1調査区坪境C) (第78図)

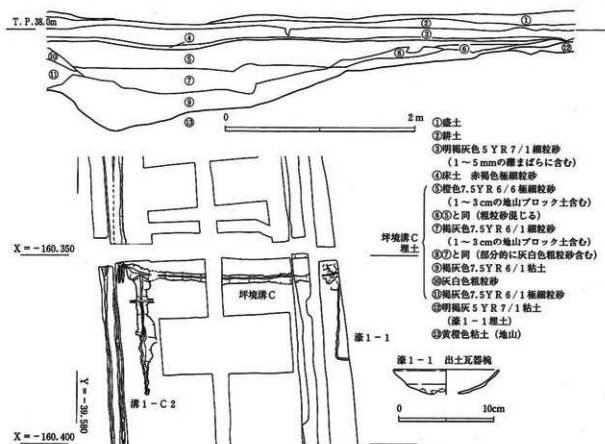
調査ではX=-160.355を中心とした東西方向の溝(旧番号溝1C-1)が検出されている。溝は幅1.8から2.0m程度、深さ0.6m、断面はゆるやかなV字形を呈している。戸線と接する部分は幅狭く、落込み状に広がったのちほぼ等幅で東へ延びている。調査区東端では溝1-1を切っている。また戸線の接するところの東に戸線坪境溝1-22と平行に溝1C-2が南30mへ延びている。

その6-2調査区部分では溝1C-1の北肩から4.5～4.8m離れて、北に落ち込む溝らしい遺構の南肩を検出している。このほかの部分は現里道に重複するため調査できなかったが、この溝が坪境里道の北溝にあたると思われる。復元できる坪境は南北に溝を持つ幅約4.5mの里道で、里道の中心はX=-160.353となる。

陌線Ⅴ (X=-160.454・X=-160.458付近 その1調査区坪境D) (第79図)

溝1-18・19・20が近接して検出されている。溝1-18は10世紀末頃の完形に近い高台付里が出土しているので他に先行し、北の肩は溝1-20に切られているが、埋土の断面をみると何回か掘り返されて、最終的に溝1-20が掘削されたことがわかる。

溝1-19は東に向かって徐々に幅を広げ、調査区東端では幅6.8mを測る。深さは0.3m程度と浅く、



第78図 陌線Ⅳ 坪境溝平面図(1000分の1)・断面図(40分の1)

底面は平坦である。溝の北側の肩はほぼ直線に通るので、溝1-19の北・溝1-20の南の部分が埤境畦畔あるいは里道となっていたと推定される。道幅は約2m、道の中心位置は $X = -160.458$ となる。

阡線の西には東側よりやや北にずれて2条の溝が検出されている。時期は不明であるがこれも埤境と考えてよいと思われる。2条の溝に挟まれた部分(畦畔か)の位置は $X = -160.454$ となって阡線の東西で4m程度のずれが認められる。このずれは現地表にも踏襲されている。

溝1-19から瓦器小皿(3)、瓦器碗(4)が、出土している。3は内面及び口縁部外面にナデ、内面底部には平行のヘラ磨きを施す。4は内面の調整不明、外面は口縁部に横ナデを施す。

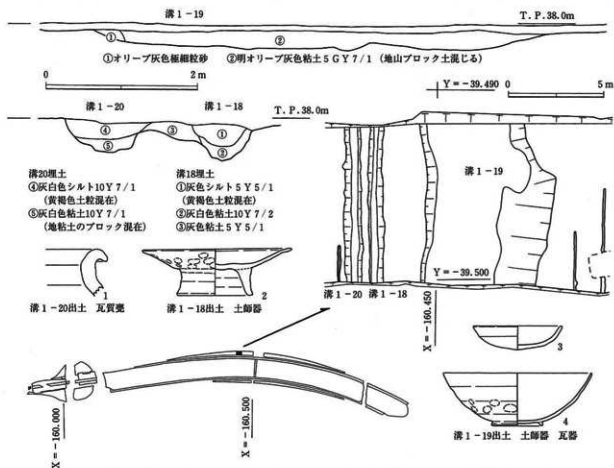
陌線VI ($X = -160.567 \cdot X = -160.545$ 付近)(第80図)

阡線の東においては、その2調査区の溝2-5・6・7が埤境にあたる。溝2-6・7は坪交点付近で1.0m、調査区東端で2.2m離れて東西に走っている。溝2-6は幅0.7~0.8m・深さ0.2m、溝2-7は幅0.9~1.1m、深さ0.3m程度で部分的に0.5mと深くなるところがある。東よりでは幅を狭めて木樋を埋設した箇所が確認されており、この溝が水路として機能していたことがわかる。

溝2-5は溝2-6・7の南に位置している。西端は阡線につきあたるように南折して15m、北にも5m延びておわり、東はトレンチ外へ延びる。検出された上端での幅は約4.8mを測り、深さは約80cmである。埋土は大きく3層に分けられ、遺物の多くは下層の褐灰色粘土より出土した。

溝2-5の最深部は溝2-6・7を切って掘られているが、埋土の最上層は溝2-5と溝2-7の両方を埋めて堆積していたので一体として機能していた時期があると考えられる。

以上から、埤境は溝2-6と溝2-7に挟まれた幅1~2mの畦畔あるいは里道と考えられ、その中



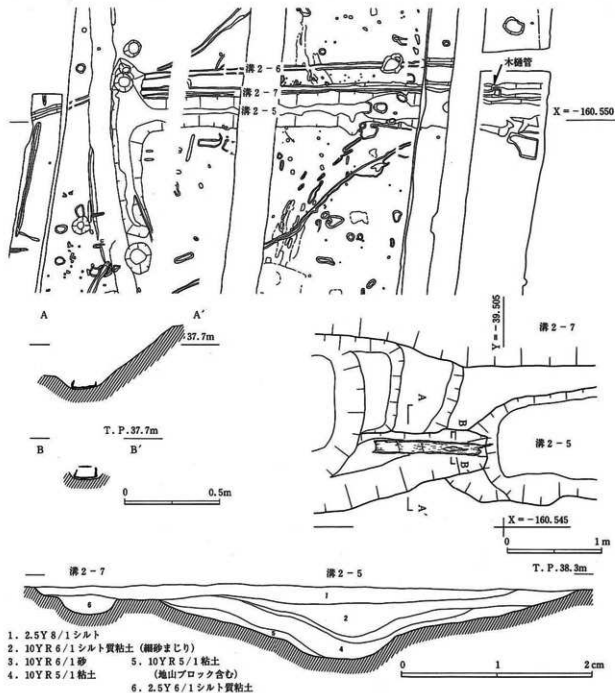
第79図 陌線V 溝1-18・19・20平面図(200分の1)・断面図(40分の1)・出土遺物(4分の1)

心は $X = -160.545$ となる。この位置は北側の「六ノ坪」と南の「五ノ坪」との小字界となっている。

阡線西側には東側と対応する坪境となるべき畦畔・水路などの遺構が検出されていない。東の坪境より南に約22mずれて東西方向から南に折れる溝2-100が検出されている。阡線とはとぎれており、また阡線の西24mで南に折れるので坪全体の区画とはなっていないが、南北の陌線V・Ⅵからそれぞれほぼ1町の間隔となり、また北の「里の東」と南の「四ノ坪」との小字界となっていることからここを阡線西側の坪境と考えてよいと思われる。位置は $X = -160.567$ となる。

なお、現地表では東の陌線と同位置に畦畔があり、ここも北の「実盛」との小字界となっている。

溝2-5からの出土遺物は瓦のほか瓦質羽釜・白磁碗皿類がある(第80図)。1は、瓦当全体の3/4



第80図 陌線Ⅵ 坪境溝2-5・6・7平面図・断面図(500分の1) 溝2-5木樋平面図(40分の1)・同断面図(20分の1) 出土遺物(4分の1)

を欠損しているが、復原径13cm、瓦当厚は下端で3.4cmを測る。瓦当文様を復原すると図化したように内区の中央に宝珠を三角に配置した宝珠文軒丸瓦となる。また、内区の宝珠の下部および側部には唐草文が反転しながら廻る。外区は、無文であり、周縁は直立縁とする。文様が、形骸化した園縁で表現されることなどから鎌倉時代初頭のものと考えておきたい。2・3は、珠文軒平瓦であり、内区、外区を画する園縁を表現するが、外区は無文である。3は、瓦当幅3.4cmを測り、周縁が比較的幅広いの対して、2は周縁幅がかなり狭い。5cm前後で珠文を配する。両者とも室町時代に属するものと考えられる。4は、唐草文の軒平瓦である。多くを欠損しており、その全容を知りえないが、均整唐草文軒平瓦である可能性が高い。周縁は直立し、顎形態は段顎である。内区は、形骸化した唐草文を配し、外区は、上区、脇区のみで下区が省略され、比較的粗い珠文を配する。1の軒丸瓦同様、鎌倉時代のものと考えられる。5・6は、その文様構成が、酷似した唐草文軒平瓦である。いずれも、内区と外区を園縁で画するが、外区は無文である。内区の唐草は、一筋の子葉が大きく巻き込み、反転させている。

9は瓦質の羽釜である。口縁部に段をもち、鈿はやや反り気味に貼りつけられている。内面には、斜め方向の刷毛調整が認められる。7・8は白磁皿・椀である。7はいわゆる口禿げと称されるものである。8は高台を4箇所折り込んでいる。

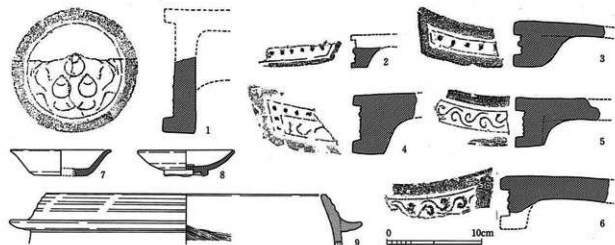
陌線Ⅶ (X=-160.683付近)

その2調査区の第Ⅲ層上面で検出された溝2-82の北辺・溝2-87、およびこの北に東西にはしる溝2-83が坪境にあたる。

溝2-82は阡線の西に1.6~2.6m離れて南北延長44m、北端で西に折れて16m、南端でも西に折れて16.5mでいったん途切れたのちに幅を減じて15.6m続き(溝2-87)、全体で「コ」字形に掘削された溝である。

溝2-83は溝2-82の北辺との間に1.0m程度の空間をもちながら、阡線からはじまって西にのびている。幅は1.6~2.4mであるが阡線にとりつくところは狭く、調査区西では幅を広げたのち近世に埋没する井戸を避けるように幅を減じているので、やや新しい時期のものかもしれない。

溝2-82の北辺が途切れる部分に南北方向の小溝が検出されているが、この南北溝の位置及び東西溝溝2-87が「四ノ坪」と「田井中」との小字界にあたる。小字界となっている溝2-87の中心をもって坪境とすると、その位置はX=-160.683となる。なお阡線の東側での坪境の遺構は検出されていない。



第81図 坪境溝2-5出土遺物(1・5・7・8・9)・溝2-7出土遺物(2) 井戸2-14出土遺物(3・6)・覆乱溝(4)

陌線Ⅷ (X=-160.801付近)

その2調査区Hトレンチの北端に検出された東西方向の溝2-64が坪境溝にあたると思われる。溝は大部分が南肩を検出できただけであったが一部溝幅のわかる部分では、幅1.4m深さ0.4m程度であった。この溝の中心をもって坪境と考える。位置はX=-160.801となる。なお、この坪境位置は道路となっており、当時においても里道であった可能性もある。とすれば、坪境がやや北になるかもしれない。

陌線Ⅸ (X=-160.907付近)

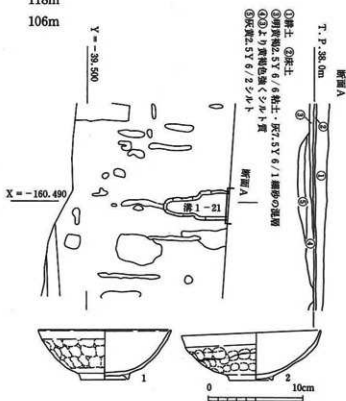
その2調査区南端で溝の北肩のみ検出され、南肩は江戸時代以降の坪境溝で壊されている。その2調査区の東に接するその4調査区ではこの溝の続きと、これから南に約4m離れてもう1条溝が検出されている。したがってこの坪境は南北に溝をもつ里道であったと思われる。北の溝はY=-39.656付近で北に折れて阡陌Ⅱとなる。坪境位置は里道の中心でX=-160.907である。阡陌の交点はX=-160.907 Y=-39.656となる。

以上の結果をまとめると以下のような数値が得られる。

陌線位置	南の陌線との間隔
陌線Ⅰ (X=-160.012付近)	116m
陌線Ⅱ (X=-160.128付近)	110m
陌線Ⅲ (X=-160.238付近)	115m
陌線Ⅳ (X=-160.353付近)	101m 105m
陌線Ⅴ (X=-160.454・X=-160.458付近)	113m 87m
陌線Ⅵ (X=-160.567・X=-160.545付近)	116m 138m
陌線Ⅶ (X=-160.683付近)	118m
陌線Ⅷ (X=-160.801付近)	106m
陌線Ⅸ (X=-160.907付近)	
陌線間平均	110.75m

溝1-21 (第82図)

その1調査区南東部X=-160.490付近で検出した東西方向の溝で幅1.0~1.6m深さ0.1m、検出長3.5mで東は調査区外にのびる。瓦器碗が出土している。1は口径14.0cm、器高5.3cm、2は口径14.8cm、器高5.1cmを測る。両者共磨耗が著しく内面の調整は不明である。しかし2の内底面にわずかに平行してならぶ暗文がみられる。外面には三段の指頭圧痕が残る。高台は逆台形を呈しており、13~14世紀の瓦器碗と考えられる。2は焼成不良のため還元しきれおらず赤褐色を呈している。



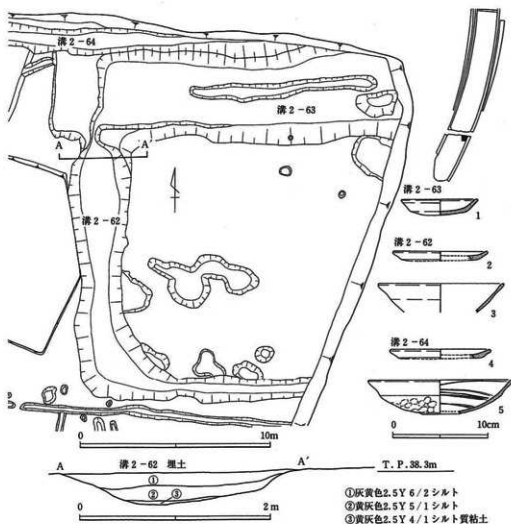
第82図 溝1-21平面図(200分の1)・断面図(40分の1)
出土遺物(4分の1)

溝 2-62・63 (第83図)

溝 2-62・63はトレンチ南部X=-160.810付近に位置する。平面形は東側がトレンチ外に延びるため全体の形態は不明であるが、溝 2-82同様「コ」字状または囲い溝となって区域を画する可能性が強いものである。溝 2-63は軸を東西方向に一致させ、現存長18m、幅5m、深さ50cmを測る。

溝 2-62は溝 2-63の西よりで狭口部を経て13.2m南下し、更に直角に東折して調査区外へ延びる。確認された最大幅は3.2m、深さは平均34cmを測る。埋土は灰色シルトであり、瓦器椀片が少量検出されている。

1～5は瓦器椀・皿である。1の瓦器小皿は内面の磨耗が著しく調整不明、外面底部は指おさえ、口縁部は横ナデ。2・3・4は摩滅した小片で調整不明 5は体部が内彎気味に立ち上がり、形骸化した高台が貼り付けられたものであり、磨きは内面のみ粗く施される。尾上分類のIV-4に比定されるものと考えられる。



第83図 溝 2-62・63・64平面図 (200分の1)・断面図 (40分の1) 出土遺物 (4分の1)

第8節 近世以降の遺構と遺物

近世以降の遺構は水路と井戸など耕作に関連する遺構に限られると言ってよい。中世以来の坪境水路は近世以降現代まで機能していたし、周辺一帯は農地として継続して耕作されていた。遺跡周辺に築造された溜池は、村毎にあるいは数か村共同で狭山池からの水を受けて貯留し、周辺の耕地を灌漑していた重要な遺跡であるといえる。また、坪境水路近辺に掘削された「井戸」は湧水の利用とともに、耕地一筆ごとあるいは耕作者ごとに用水を貯留する機能を持っていたものと推定される。近世の丹上遺跡はこれらが一体となって農村景観を形成してきたといえる。

近世においては、狭山池水下の村は池水の分水・管理をきわめて厳密に行っていたことが、「水割符帳」などさまざまな資料で明らかにされている。用水をめぐる村どうしの水論も、このような厳密な水管理を逆に裏付ける資料であるともいえる。したがって、現代に至るまで近世の用水体系は基本的に変化していないと考えてよい。溜池の新たな築造や廃絶も、この用水体系のなかでのものといえる。以下、近世の遺構について調査結果を示すとともに、現代の用水状況が近世と基本的に変わっていないとの推定のもとに、昭和37年大阪府作成3000分の1地形図の状況をあわせて述べる。

亅線Ⅰ

中世坪境溝を踏襲し、同位置で機能していたと思われる。現代坪境水路により攪乱をうけ、規模等は不明。この水路は狭山池中樞筋から発し、多治井（丹比）神社の南でわかれ、桂池・小池（矢地池）などの溜池に分水貯留しながら流下している。亅線Ⅲの位置で東に分水して水下の立部・松原・新堂村の共同の溜池である大座間池につながっている。

亅線Ⅱ

その2調査区南端西端で検出された溝は中世の様相と同様に、亅線Ⅳから北に連続して掘削されている。現代では横枕池からの用水路となっている。

亅線Ⅲ

大座間池から北西方向に流れた水路がこの位置で西に向きを変えて亅線Ⅰの水路と合流したのちさらに西に流れていた。この位置は美原町と松原市立部町との境界をなしており、桑里地割の基線となるラインである。また竹内街道の原ルートとも考えられているラインでもある。

亅線Ⅳ

現代坪境溝が東から流れて亅線坪境溝Ⅰに合流していた。この水路は亅線Ⅲの位置で亅線Ⅰから東に分かれて、大座間池のすぐ西を北流し、再びこの位置で亅線Ⅰの水路に合流する水路である。

亅線Ⅴ

現代では畦畔が坪境となっていた。

亅線Ⅵ

現代水路は亅線Ⅲの位置で亅線Ⅰから東に分かれて、大座間池のすぐ西を北流する水路から分かれて西に向かい、亅線Ⅱと同様に亅線Ⅰ水路に合流していた。亅線の西側にも、亅線水路から分かれて西に向かう水路がある。丹上集落の北東部から出る里道がこの水路に沿って延び、大座間池の北岸を通過して野村・郡戸集落に続いていた。

亅線Ⅶ

現代では中世水路が検出されていた同位置に畦畔があって坪境となっていた。

陌線VI

畦畔が環境となっていた。阡線Iの西側では、中世に環境と推定した位置に畦畔があるほか、阡線Iの東にあった中世環境水路の延長線上にも畦畔があって小字境となっている。

陌線VII

現代水路は阡線Iの水路から西に分かれて丹上集落方向にのびている。阡線Iの東は幅1m程度の畦畔である。

陌線VIII

現在は真福寺集落から奥ヶ池・今池の北堤にそって大座間池の南から郡尸集落の南に至る東西道路となっている。天保7年(1836年)の「狭山池掛り村々絵図」にこれに当たる道が描かれている。また、このラインの西の延長線上には「大道上」などの小字があって、古代の丹比道あたりという説もあるが、調査では当時の状況は確認できていない。(注1)(注2)

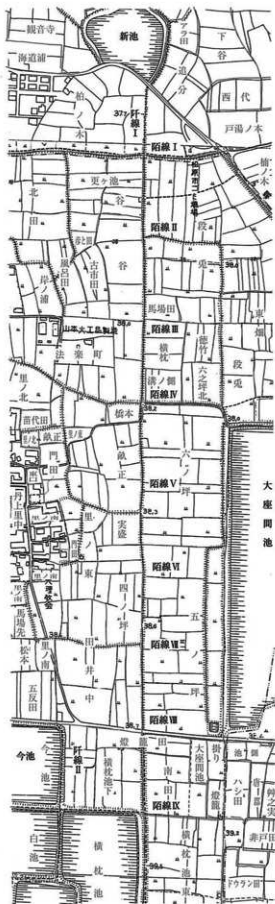
陌線IX

横枕池の北堤の位置にあたる。堤の裾には池から出る水路があって北側の田地を灌漑している。

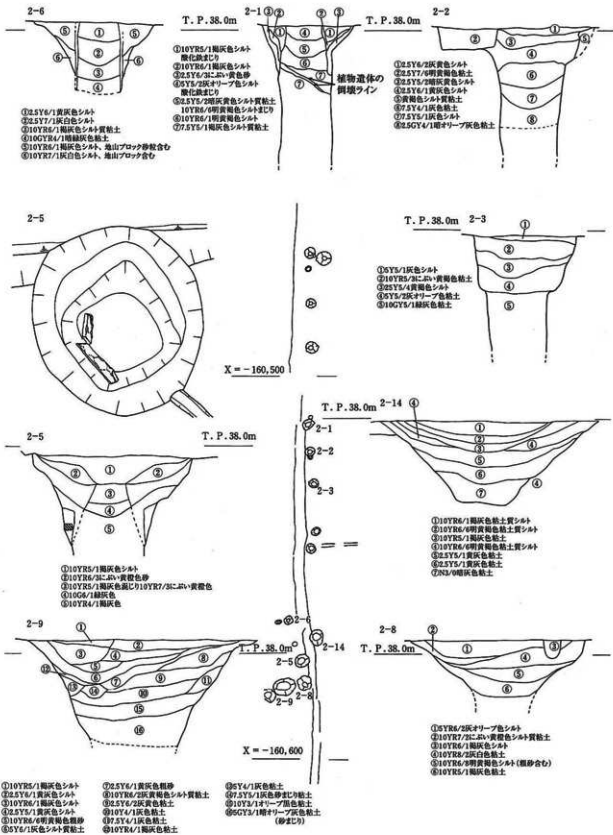
井戸

井戸は規模、形態、井戸枠の有無などから以下のように分類できる。

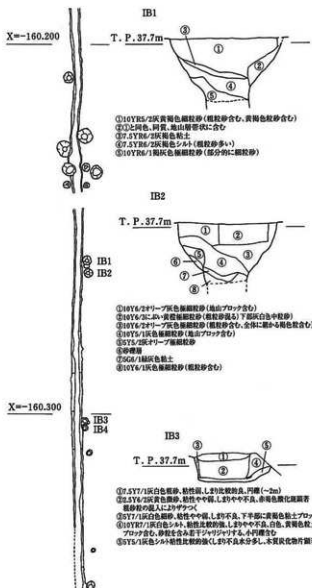
- ①直径が1～2m程度のもの、井戸枠はない
 - ②直径4m程度の大型で井戸枠のないもの
 - ③井戸枠を有するもの、大型で直径4m程度が多い
- ①は深さ1m程度から3m程度まで多様であるが、1m程度の浅いものは、湧水も期待できないので井戸というより小規模な水溜りというべきであろうか。埋土は下層では粘質が強い部分があるが、上層は細砂であることが多い。
- ②は上部2m程度までは漏斗状に開き、これより下層は円筒状に掘り下げられているものが多い。深さは3m程度からそれ以上のものまであって、完掘できていないものも多い。埋土はほとんどがシルト質で、下層はやや粘質をおびる。壁が崩壊して袋状を呈するものもある。
- ③井戸枠を有するものは少ない。地盤が段丘層で比較



第84図 近世以降の坪境と地割(5000分の1)



第87図 近世井戸(3) 平面図・断面図(80分の1)



第88図 近世井戸(4)断面図(80分の1)

の崩壊が少ないため井戸枠構築する必要がなかったものと思われる。井戸1B8は検出面下2.5mのところまで井戸に蓋をするように板材がならべられており、その下層は6本の柱枠を組んで井戸枠としていた。湧水層に達するまで掘削しているものもあるが、水路と溝でつながっているものは水溜として機能していたと思われる。

- (注1) 大阪狭山市教育委員会・狭山池調査事務所『絵図に描かれた狭山池』1992 p.27
(注2) 松田正男『古代丹比道の復元』(『大阪春秋』第72号 1993)

第9節 微化石分析

1 花粉分析

1-1 資料

今回分析した試料は、丹上遺跡（その1）（その2）で採取した合計17点である。試料の採取位置及び土層は表1のとおりである。

表1 試料採取地点・層位

その1 採取地点	層位 (概報)	時期
試料1 A地区西壁断面	Ⅲ b	中世
2 A地区西壁断面	Ⅳ a Ⅳ b	中世
3 A地区西壁断面	V a · b	奈良～平安
4 A地区西壁断面	地山	不明
5 B地区断面	A地区試料3・4間に相当	奈良～平安
6 1C地区土坑埋土	地山面で検出	埋土からは旧石器が出土しているが人為的な遺構か自然地形かは不明
7 1I地区	地山面上	不明 試料6に類似した質の土層
その2 採取地点	層位 (概報)	時期
試料1 G地区断面	耕土Ⅱ	鎌倉時代以降
2 G地区断面	床土	鎌倉時代以降
3 G地区断面	Ⅳ a	奈良時代
4 G地区断面	Ⅳ b上	7世紀以前
5 G地区断面	Ⅳ b下	7世紀以前
6 G地区断面	V上 (地山)	
7 G地区断面	V下 (地山)	

1-2 分析方法

花粉・胞子化石の抽出は、試料15～20g秤量し、HF処理-重液分離（ZnBr₂・比重2.15）-アセトリシス処理-KOH処理の順に物理・化学処理を行なった。分析処理後の残渣をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。なお、重液分離後の残渣が少なかった試料（その2・No.3）は、その後の処理を行わず、グリセリンゼリーで封入し検鏡に供した。

1-3 結果

検鏡においては、プレバート全面を走査し、その間に出現したすべての分類群及びその個数を計数した（表1-2）。また、樹木花粉が100個体以上検出された試料については花粉ダイアグラム（図1-2）として表示した。出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉は樹木花粉・



第89図 微化石試料採取位置図

草本花粉・シダ類胞子の合計数を基数とした百分率で算出した。

今回の試料は、検出された花粉・胞子化石の外膜が分解しているものが多く、堆積時あるいは堆積後の経年変化により、酸化分解したものと考えられる。また、試料によって花粉・胞子化石の大きさが極端に異なっているものがあり、堆積環境の違いを示唆させる。図版に示したマツ属の花粉がその例である。

ここでは、古植生を推定するのに大切な年代は、考古学的知見に基づく時代区分に従った。以下(その1)(その2)について時代の古い順に、化石の産出傾向を示す。

(その1)

試料は、No. 1～No. 7の7点である。表2に示したようにNo. 4・No. 6はほとんど検出されなかった。したがって、それ以外の試料の検出状況を記す。

・奈良～平安時代 (No. 3・5)

アカガシ亜属の高率出現により特徴付けられる。その他、広葉樹の花粉はシデアアサダ属、シイ属、コナラ亜属、針葉樹では他にコウヤマキ属・ツガ属なども著しく多い。草本花粉は比較的少なく、イネ科・ヨモギ属等のみが多く検出される。

No. 3でソバ属が検出された。

・中世 (No. 1・2)

前時代同様、アカガシ亜属の高率出現により特徴付けられるが、上部では減少傾向を示す。その他、広葉樹花粉としてコナラ亜属、ハンノキ・カバノキ・ブナ・シイ属等が認められ、またコウヤマキ属も上部に向かって減少し、マツ属・コナラ亜属が漸増傾向を示す。草本花粉は、前時代と変わらず、イネ科・ヨモギ属が多く検出された。またソバ属が低率ではあるが連続して検出される。

・時代不明 (No. 7)

アカガシ亜属が高率に出現する。コウヤマキ属・ツガ属などの針葉樹花粉も著しく多い。草本花粉は比較的少なく、イネ科・ヨモギ属の出現率が比較的高い。

No. 4は地山の試料、No. 6は地山面につくられた土壌内試料である。時期は共に不明とされているが、No. 6の土壌1より旧石器時代の遺物が出土していることから堆積時期は上層堆積期より相当古いと考えられる。しかし、花粉化石の検出からは、前記したような結果からその当時の環境を推定するには至らなかった。おそらく風成堆積状況や酸化状態により、当時の花粉化石は消失してしまったと考えられる。No. 7はNo. 6の土坑1の埋土に類似するとのことだが、組成は全く異なる。No. 7の結果は、説明したようにNo. 1・2・3と傾向は同じである。したがって、No. 6とNo. 7は堆積時代も異なると考えられる。またこの両試料は同じ採取地試料から珪藻分析 (No. 1・No. 2) も行っているが、珪藻化石は非常に少なかった。

(その2)

試料はGトレンチの連続土壌試料7点(10cm連続)と溝・土坑の埋土3点である。表1-1・表1-2には通しNo.を付けNo. 1～No. 10として示した。No. 4～No. 7, No. 10は検出化石数が少なく考察は困難である。したがって、それ以外の結果を記す。

・奈良時代以前 (No. 3)

アカガシ亜属が高率に出現する。他にコナラ亜属などを伴う。草本花粉は比較的多く、ヨモギ属が

高率に出現する。また、低率ではあるが、ソラマメ属の花粉が検出される。

・飛鳥時代 (No. 8)

アカガシ亜属・ツガ属などの針葉樹花粉の出現率も著しく多い。草本花粉は比較的多く、イネ科が高率に出現し、カヤツリグサ科・ヨモギ属を伴う。

・奈良時代以前 (No. 9)

アカガシ亜属が高率に出現する。他にコナラ亜属・クマシデア・アサダ各属などを伴う。草本花粉ではイネ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科が比較的多く出現する。

No. 4～No. 7はGトレンチのIV b層～V層に相当し、7世紀以前の堆積と考えられている。岩質はシルト質粘土であるが、花粉化石の保存は悪い。このシルト質粘土は、No. 1やNo. 3と岩質的には同じだが、おそらく粘土化する過程が異なるものと考えられる。No. 4・No. 7はIV b・V層の堆積後粘土化し、初めから粘土が堆積したのではない可能性が考えられる。したがって、当時の花粉化石は還元状態の堆積物でない可能性から保存に適さなかったと思われる。

1-3 考察

飛鳥時代から奈良～平安時代までの間は、カシ類などの照葉樹を主体とする植生が台地や丘陵地上に広く分布していたものと考えられる。中世に入ると、アカガシ亜属がやや減少し、コナラ亜属・マツ属が漸増傾向を示す。このことは、人類の植生に対する干渉が頻繁になり、その結果二次林としてのナラ類・アカマツ・クロマツなどを主体とする林が形成され始めたことを示唆する。奈良?時代とされる試料で、コナラ亜属が高率に出現するが、これもまた人類の植生干渉に起因すると考えられ、中世以前にも人類の植生への干渉があったことを示唆する。全時代を通じて、コウヤマキ属・ツガ属などの針葉樹花粉の出現率が著しく高い。このような傾向は、難波累層の照葉樹林から二次林への転換期にも認められ、ブナ林とシイ・カシ林の間にモミ・ツガ林が位置し、広い分布面積を占めていたことを意味すると考えられている(古谷, 1979)。確かにそのような植生の分布拡大があったとも考えられるが、コウヤマキなどの花粉は、風や河川などにより後背地から運ばれる搬入花粉として捕らえられるので、当時の堆積環境の違いにより、それらの花粉が多くなったり少なくなったりする可能性も考えられる。また、人類の植生への干渉もあったと考えられるので、その影響もあったのではなからうか。このことは周辺山地での花粉分析を行なうことによって明らかにされると考えられ、今後の研究に期待される。

遺跡周辺の低地では、奈良～平安時代から中世にかけてソバなどの栽培が行なわれていた可能性もあり、人類の生業活動も盛んになったことを示唆する。

以上述べてきた考察は全て、考古学知見と関連して述べたもので、今後さらに堆積物の年代が明らかにされることにより、より詳しい考察ができるようになると思われる。

引用文献

- 古谷正和 (1979) 大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷。第四紀研究, 第18巻 第3号, p. 121～141.

表2 丹上遺跡(その1)(その2) 試料花粉分析結果

Sample No.	丹上(その1)							丹上(その2)										
	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
<i>Abies</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-
<i>Tsuga</i>	20	5	12	1	8	-	14	1	-	11	-	-	-	-	34	2	1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	15	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinus</i> (Unknown)	37	3	1	-	1	-	4	4	-	1	-	-	-	-	10	3	-	
<i>Sciadopitys</i>	45	38	31	1	13	-	41	-	-	22	-	-	-	-	46	11	2	
<i>Cryptomeria</i>	19	2	4	1	1	-	1	8	1	3	-	-	-	-	18	27	2	
T.-C.	3	1	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	4	7	-	
<i>Salix</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Myrica</i>	1	6	-	-	1	-	3	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Pterocarya</i>	7	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Juglans</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Carpinus-Ostrya</i>	44	16	11	-	8	-	14	1	-	22	-	-	-	-	4	14	-	
<i>Corylus</i>	7	1	2	-	-	-	2	-	1	1	-	-	-	-	2	-	-	
<i>Betula</i>	13	4	2	-	2	-	2	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	
<i>Alnus</i>	24	1	1	-	2	-	1	4	-	1	-	-	-	-	1	1	-	
<i>Fagus</i>	11	2	1	-	1	-	2	-	-	1	-	-	-	-	1	5	-	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	52	26	11	2	6	-	7	8	-	41	-	-	-	-	62	37	3	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	158	127	93	-	94	-	114	3	3	92	1	-	1	-	59	152	5	
<i>Castanopsis</i>	18	23	11	-	-	-	5	3	22	13	1	-	-	-	6	24	2	
<i>Ulmis-Zelkova</i>	5	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	1	-	
<i>Celtis-Aphananthe</i>	9	4	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Viscum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
Rosaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Fagora</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Melia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Ilex</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Acer</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Alisma</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
cf. <i>Blyxa</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Gramineae	123	72	48	2	7	-	28	106	27	88	-	-	-	-	145	53	9	
Cyperaceae	12	2	3	-	11	-	3	3	-	32	-	-	-	-	87	13	18	
<i>Anelasma</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> -Echino.	-	2	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	18	-	-	
<i>Fagopyrum</i>	5	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Chenopodiaceae	3	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	4	-	
Caryophyllaceae	-	-	-	-	1	-	-	3	-	4	-	-	-	-	1	-	-	
Ranunculaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	-	-	
Cruciferae	-	1	-	-	-	-	-	67	4	-	-	-	-	-	1	1	-	
<i>Vicia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Haloragis</i>	4	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
Umbelliferae	2	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	
Labiatae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Gallium-Rubia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Patrinia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Artemisia</i>	43	37	40	2	17	4	48	6	-	19	-	-	1	-	60	128	-	
Carduoideae	4	1	4	-	-	-	1	5	-	15	-	-	-	-	5	30	-	
Cichorioideae	1	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	18	3	
Unknown	21	9	5	1	2	-	8	-	1	7	-	-	-	-	24	8	2	
<i>Osmunda</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
other Pteridophyta	48	11	16	1	1	4	18	6	1	16	-	-	1	-	12	1	1	
Pseudoschizaea	1	1	-	1	3	-	37	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	
Arboreal pollen	489	262	185	5	137	0	210	37	27	218	2	0	1	0	249	290	15	
Nonarboreal pollen	199	116	100	4	39	4	80	193	32	161	0	0	1	0	299	283	31	
Unknown	21	9	5	1	2	0	8	0	1	7	0	0	0	0	24	8	2	
Fern spores	49	11	16	1	1	4	18	6	1	16	0	0	1	0	12	1	1	
TOTAL	758	398	306	11	179	8	316	236	61	402	2	0	3	0	584	582	49	

2 珪藻分析

2-1 試料

分析試料は、丹上遺跡（その1）より採取されたNo. 1・2の2点で、これは花粉分析のNo. 6・7と同一試料を2分したもので、地点、岩質等については花粉分析の表1を参照されたい。

2-2 分析方法

珪藻の抽出は、以下の方法で行なった。

試料の秤量（約10g）-過酸化水素水処理（試料の泥化・有機物の分解漂白）-傾斜法にて粗粒砂を除去-分散剤（ピロリン酸ナトリウム）を加え粘土分を除去-L字形管分離法にて細砂分を除去-希釈-散布（18×18×m/mカバーガラス上に0.5cc）-自然乾燥-封入（ブリュウラックス使用）-検鏡（1000倍）

珪藻数の算定は、メカニカルステージを用い縦線に沿って移動させ任意に出現する珪藻200個体以上になるまで行なった。この際、半分以上破損したものや溶解を受けたものについては1個体として数えなかった。

2-3 分析結果

No. 1・2試料共に、珪藻の含有が非常に少なく、堆積環境を推定することは困難であった。試料は地山面につくられた土壌内埋土（No. 1）と地山面上に確認された土壌内の埋土（No. 2）である。両試料は、花粉分析試料No. 6・No. 7に採取地を同じくするが、No. 6については花粉分析の結果からも十分な考察ができなかった。珪藻分析の結果は表3に示したが、淡水産の珪藻化石がNo. 1では2個、No. 2は1個となっている。花粉分析では、両土坑埋土は異なると推定されたが、珪藻では不明である。ただ両土坑とも化石が生育する水域環境下での遺構ではなく、水の影響の少ないあるいはほとんどなかった環境が考えられる。

表3 丹上遺跡（その1）試料珪藻分析結果

Species Name	Ecology			1	2
	H. R.	pH	C. R.		
<i>Cymbella minuta</i> Hilse ex Kabh.	Ogh-ind	ind	ind	1	-
<i>Eunotia praeurupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	1	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1
Marine Water Species				0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0
Brackish Water Species				0	0
Fresh Water Species				2	1
Total Number of Diatoms				2	1

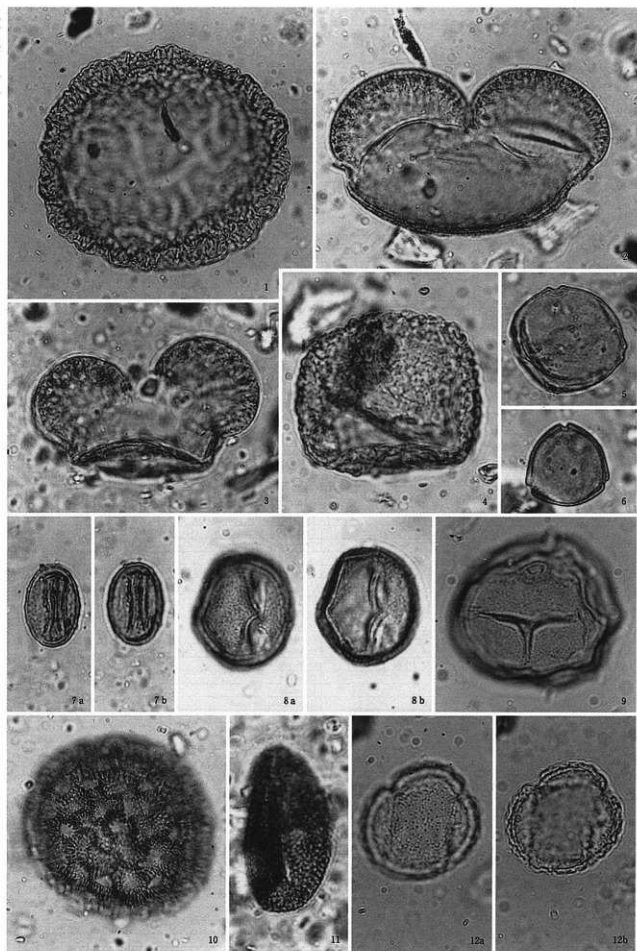
Legend

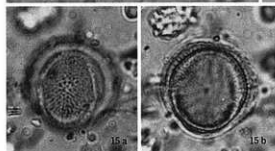
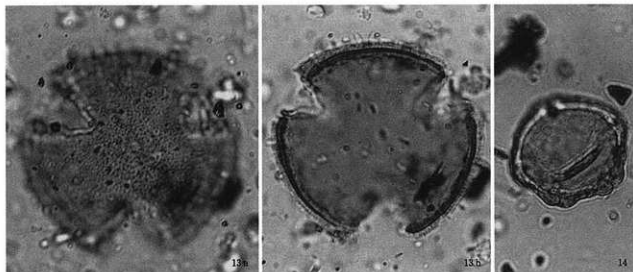
H. R.: Halobion rate	pH: potential of Hydrogen	C. R.: Current rate
Ogh-hil: Oligohalobous halophilous forms	ac-bi: Acidobiontic forms	l-bi: Limnobiontic forms
Ogh-ind: Oligohalobous indifferent forms	ac-il: Acidophilous forms	l-ph: Limnophilous forms
Ogh-hob: Oligohalobous halophobous forms	ind: Indifferent forms	ind: Indifferent forms
Ogh-unk: Oligohalobous unknown	al-bi: Alkalibiontic forms	r-bi: Rheobiontic forms
	al-il: Alkaliphilous forms	r-ph: Rheophilous forms
	unk: Unknown	unk: Unknown

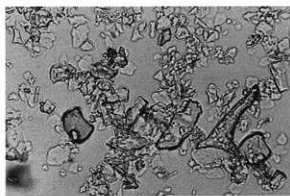
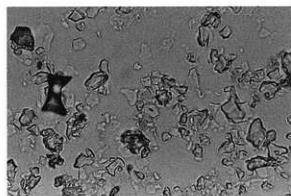
検出花粉・胞子化石名一覧表

検出花粉・胞子化石名(学名)	和名	検出花粉・胞子化石名(学名)	和名
AP-1 (針葉樹花粉)		<i>Ribes</i>	スグリ属
		Leguminosae	マメ科
<i>Ginkgo</i>	イチョウ属	<i>Albizia</i>	ネムノキ属
<i>Podocarpus</i>	マキ属	<i>Sapium</i>	シラキ属
<i>Abies</i>	モミ属	<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属
<i>Tsuga sieboldii</i>	ツガ	<i>Fagora</i>	イヌサンショウ属
<i>Tsuga diversifolia</i>	コマツガ	<i>Phellodendron</i>	キハダ属
<i>Tsuga</i>	ツガ属	<i>Melia</i>	センダン属
<i>Picea</i>	トウヒ属	<i>Oriza</i>	コクサヤ属
<i>Prescotia</i>	トガサワラ属	<i>Skimmia</i>	ミヤマシキミ属
Pinaceae	マツ科	<i>Rhus</i>	ウルシ属
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylon</i>	マツ属単維管束亜属	<i>Acer</i>	カエデ属
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	<i>Aesculus</i>	トチノキ属
<i>Pinus</i>	マツ属	<i>Ilex</i>	モチノキ属
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	<i>Euonymus</i>	ニシキギ属
Taxodiaceae	スギ科	<i>Euscaphis</i>	ゴンスイ属
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	<i>Bucux</i>	ツグ属
T.-C.	イチイ科-ヒノキ科-イヌガヤ科	<i>Vitis</i>	ブドウ属
<i>Ephedra</i>	マオウ属	<i>Ampelopsis</i>	ノブドウ属
<i>Metasequoia</i>	メタセコイア属	<i>Parthenocissus</i>	ツク属
<i>Sequoia</i>	セコイア属	Rhamnaceae	クロノメモドキ科
<i>Dacrydium</i>	リムノキ属	<i>Tilia</i>	シナノキ属
<i>Larix</i>	カラマツ属	<i>Actinidia</i>	マクタブ属
		<i>Stachyurus</i>	キフシ属
AP-2 (広葉樹花粉)		Malvaceae	アオイ科
		<i>Elaeagnus</i>	グミ属
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	Thymelaeaceae	ジンチョウゲ科
<i>Juglans</i>	クルミ属	<i>Coranus</i>	ミズギ属
<i>Pterocarya</i>	サワグルミ属	<i>Clethra</i>	リョウブ属
<i>Platanocarya</i>	ノグルミ属	<i>Aucuba</i>	アオキ属
<i>Carya</i>	ベカ属	Araliaceae	ウコギ科
<i>Salix</i>	ヤナギ属	Ericaceae	ツツジ科
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	<i>Diopyros</i>	カキ属
<i>Betula</i>	カバノキ属	<i>Syrax</i>	エゴノキ属
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシゲ属-アサゲ属	Oleaceae	モクセイ科
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	<i>Osmunthus</i>	ヒラキ属
<i>Castanea</i>	クリ属	<i>Symplocos</i>	ハイノキ属
<i>Castanopsis</i>	シイノキ属	<i>Lingustrum</i>	イボタノキ属
<i>Fagus</i>	ブナ属	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ亜属	<i>Trachelospermum</i>	テイカカズラ属
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属	<i>Clerodendron</i>	クサギ属
<i>Aphananthe</i>	ムクノキ属	<i>Lonicera</i>	スイズラ属
<i>Celtis</i>	エノキ属	<i>Sambucus</i>	ニワトコ属
Onagraceae	アカバナ科	<i>Viburnum</i>	ガマズミ属
<i>Epilobium</i>	アカバナ属	<i>Weigela</i>	タニウツギ属
Ulmaceae	ニレ科	Rutaceae	ミカン科
<i>Ulmus</i>	ニレ属	<i>Abelia</i>	ツクバネウツギ属
<i>Zelkova</i>	ケヤキ属	<i>Liquidambar</i>	フウ属
Moraceae	タワ科	<i>Illicium</i>	シキミ属
<i>Viscum</i>	ヤドリギ属	<i>Nyssa</i>	ヌマミズギ属
Magnoliaceae	モクレン科	<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属
<i>Illicium</i>	シキミ属	<i>Poncirus</i>	カラタチ属
<i>Euptelea</i>	フサザクラ属	<i>Adolendron</i>	サカキカヅラ属
<i>Nandia</i>	ナンテン属		
<i>Akebia</i>	アケビ属	NAP (草本花粉)	
<i>Cercidiphyllum</i>	カワラ属		
Theaceae	ツバキ科	<i>Humulus</i>	カナムグラ属
<i>Camellia</i>	ツバキ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	サナエタデ属
<i>Cleyera</i>	サカキ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Echinocaulon</i>	ウチネツカムシ節
<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Bistorta</i>	イブキトラノオ節
Hamamelidaceae	マンサク科	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	イタドリ節
<i>Hamamelis</i>	マンサク属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Tovara</i>	ミズヒキ節
<i>Corylopsis</i>	トサミズキ属	<i>Polygonum</i>	クダ属
<i>Saxifraga</i>	ユキノシタ属	<i>Fagopyrum</i>	ソバ属
Rosaceae	バラ科	<i>Rumex</i>	ゴシキシ属
<i>Prunus</i>	サクラ属	<i>Parnassia</i>	ウメバチソウ属
<i>Daphniphyllum</i>	ユズリハ属	<i>Portulaca</i>	スベリヒユ属

検出花粉・胞子化石名 (学名)	和 名	検出花粉・胞子化石名 (学名)	和 名
Caryophyllaceae	ナデシコ科	<i>Diaspananthus</i>	クサヤツデ属
Chenopodiaceae	アカザ科	Cichorioideae	タンポポ亜科
<i>Nelumbo</i>	ハス属	<i>Xanthium</i>	オナモミ属
Amaranthaceae	ヒユ科	<i>Sagittaria</i>	オモダカ属
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	<i>Caldesia</i>	マルバオモダカ属
Ranunculaceae	キンボウゲ科	<i>Hydrilla</i>	クロモ属
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属	<i>Alisma</i>	サジオモダカ属
Nymphaeaceae	スイレン科	<i>Blyxa</i>	スプタ属
<i>Nymphaea</i>	スイレン属	<i>Potamogeton</i>	ヒルムシロ属
<i>Aconitum</i>	トリカブト属	Liliaceae	ユリ科
<i>Nuphar</i>	コオホネ属	<i>Monochoria</i>	ミズアオイ科
<i>Euryale</i>	オニバス属	Urticaceae	イラクサ科
<i>Macleaya</i>	タケニグサ属	Iridaceae	アヤメ科
Cruciferae	アブラナ科	<i>Anellema</i>	イボクサ属
<i>Drosera</i>	モウセンゴケ	<i>Eriocaulon</i>	ホシクサ属
<i>Potentilla</i>	キジムシロ属	Gramineae	イネ科
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属	<i>Sparganium</i>	ミクリ属
Rosaceae	バラ科	<i>Thpha</i>	ガマ属
Leguminosae	マメ科	Cyperaceae	クサツリグサ科
<i>Acutypha</i>	エノキグサ属	<i>Zea</i>	トウモロコシ属
<i>Asukia</i>	アズキ属	Polygalaceae	ヒメハギ科
<i>Vicia</i>	ソラメ属	Polemoniaceae	ハナシノブ科
<i>Dunbaria</i>	ヒメクス属	<i>Meryanthes</i>	ミツシク属
<i>Geranium</i>	フウロソウ属	<i>Phyllanthus</i>	コミカンソウ属
Euphorbiaceae	トウダイグサ科	<i>Gossypium</i>	ワタ属
<i>Euphorbia</i>	トウダイグサ属		
<i>Polygala</i>	ヒメハギ属	FP (形態分類花粉)	
<i>Impatiens</i>	フリフネソウ属		
<i>Carochopsis</i>	カラスノゴマ属	Inaperturate pollen	無口型花粉
<i>Malva</i>	ゼニアオイ属	Monoporate pollen	単孔型花粉
<i>Actinostemma</i>	ゴキツル属	Trizonoporate pollen	三孔型花粉
<i>Campanula</i>	ホタルブクロ属	Trizonocolporate pollen	三溝孔型花粉
<i>Trapa</i>	ヒシ属	Trizonocolporate pollen	三溝孔型花粉
<i>Lythrum</i>	ミソハギ属	Polypantoporate pollen	多紋孔型花粉
<i>Rotala</i>	キカシダ属	Tetrazonoporate pollen	四孔型花粉
<i>Epilobium</i>	アカバナ属	Tetrazonocolporate pollen	四溝孔型花粉
<i>Ludwigia</i>	チョウジタデ属	Tetrazonocolporate pollen	四溝孔型花粉
<i>Holoragis</i>	アリノトウグサ属		
<i>Myriophyllum</i>	フサ属	FS (羊歯類胞子・形態分類胞子)	
Umbelliferae	セリ科		
<i>Paederia</i>	ハクソカズラ属	Lycloidiaceae	ヒカゲノカズラ科
<i>Utricularia</i>	タヌキモ属	<i>Lycopodium</i>	ヒカゲノカズラ属
<i>Nymphaoides</i>	アサザ属	Selaginellaceae	イワヒバ科
<i>Galium</i>	ヤエムグサ属	<i>Selaginella</i>	イワヒバ属
<i>Gentiana</i>	リンドウ属	<i>Ophioglossum</i>	ハナヤスリ属
<i>Montropastrum</i>	ギンリョウソウ属	Osmundaceae	ゼンマイ科
Rubiaceae	アカネ科	<i>Osmunda</i>	ゼンマイ属
<i>Rubia</i>	アカネ属	<i>Lygodium</i>	カナタサ属
<i>Calystegia</i>	ヒルガナ属	Hymenophyllaceae	コケシノブ科
<i>Cuscuta</i>	ネナシカズラ属	<i>Pteris</i>	イノモトソウ属
Labiatae	シソ科	<i>Ceratopteris</i>	ミズウラボシ属
<i>Mosla</i>	ヤマジソ属	Polypodaceae	ウラボシ科
Solanaceae	ナス科	<i>Salvinia natans</i>	サンショウモ
<i>Solanum</i>	ナス属	<i>Isoetes</i>	ミズニラ属
<i>Justicia</i>	キツネノマゴ属	<i>Marsilea</i>	デンジソウ属
<i>Sesamum</i>	ゴマ属	<i>Azolla</i>	アカウキササ属
<i>Plantago</i>	オオバコ属	Monolete spore	単条溝型胞子
<i>Oxelia</i>	ミズオオバコ属	Trilete spore	三条溝型胞子
<i>Patrinia</i>	オミナエシ属		
<i>Scabiosa</i>	マツムシソウ属	その他の微化石	
Campanulaceae	キキョウ科		
<i>Campanula</i>	ホタルブクロ属	Pseudoschizaea	淡水生藻類
<i>Platycodon</i>	キキョウ属	<i>Botryococcus</i>	緑藻類
<i>Adenophora</i>	フリガネニンジン属	<i>Dinoflagellates</i>	渦鞭藻類
<i>Codonopsis</i>	フルニンジン属	<i>Pediastrum</i>	クンショウモ属
Carduoidae	キク亜科		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属		




 0 50 μ (1, 2, 10)

 0 50 μ (3~9, 11~15)


写真番号	和名	学名	遺跡	試料番号
1	ツガ属	<i>Tsuga</i>	その2	3
2	マツ属	<i>Pinus</i>	その1	5
3	"	"	"	1
4	コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	その2	8
5	クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus-Ostrya</i>	その1	1
6	ハシバミ属	<i>Corylus</i>	"	1
7 a, b	コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	"	2
8 a, b	アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	その2	3
9	イネ科	Gramineae	"	2
10	サナエタデ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	その1	5
11	ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	"	1
12 a, b	キンボウケ科	Ranunculaceae	その2	9
13 a, b	オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	"	8
14	アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	"	1
15 a, b	ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	"	8

第4章 考察

丹上遺跡周辺の古道と地割

阪田育功

1 はじめに

丹上遺跡のすぐ北を東西にはしる「竹内街道」を「日本書紀」に記される「丹比道」に、また竹内街道の北約1.8kmをこれと平行に東西にはしる「長尾街道」を「大津道」に比定したのは、岸俊男である。これらの直線道路は、古来より大和と河内・和泉を結ぶ主要交通路であったと同時に、丹比地方一帯の条里地割の基本線ともなっていたと考えられている。兩道を古代道路に比定した岸俊男説は以後「定説」となり、大阪府文化財分布図にも記載されているところである。

さて、丹上遺跡の発掘調査においては、竹内街道のすぐ南からはほぼ南北方向に1キロにわたって、飛鳥時代以降の様々な遺構や、奈良時代の「官衙」様の大型掘立柱建物群、条里坪境の遺構など、多くの知見を得ることができた。この節では発掘調査結果に基づいて各時代毎の地割の実態をまとめるとともに、周辺の古道と地割について若干の検討を加えてみたい。

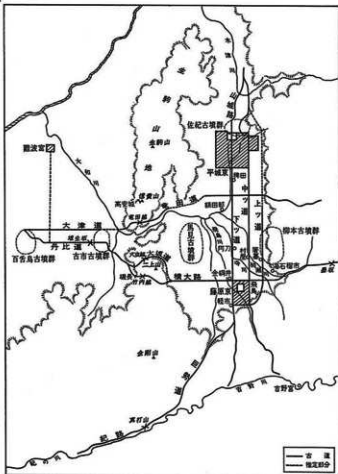
2 研究略史

古道全般にわたる研究の蓄積は歴史地理学的方法によるものを中心に、きわめて豊かなものがある。その中で、河内における古道の研究は岸俊男の研究以来、服部昌之、足利健亮、秋山日出雄、直木孝次郎、金田章裕、和田萃、松田正男らによって、条里地割とも関連させながら多様な観点から進められてきた。これらの成果のうち、ここでは丹上遺跡の発掘調査結果の評価に関連する論点を中心に、研究史の概略を整理しておきたい。

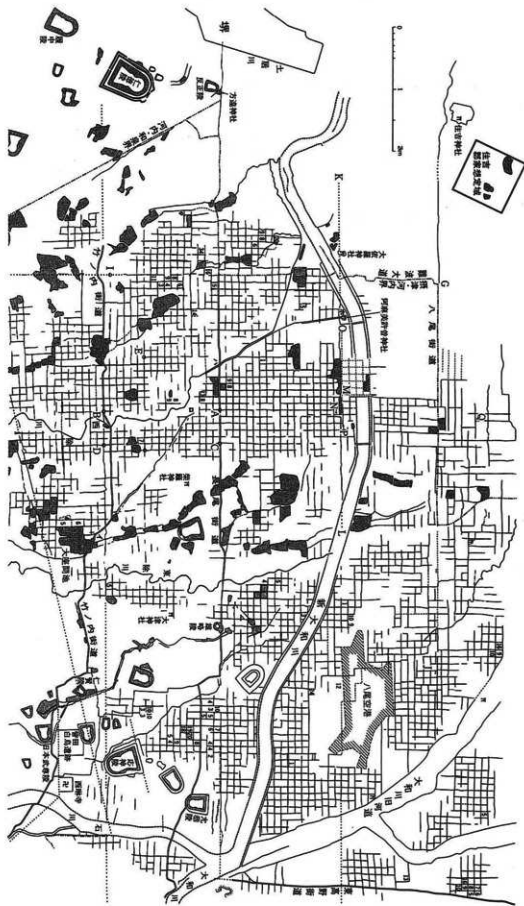
(1) 岸俊男説 (第91図)

岸俊男は大和・河内の古道を総合的に考察し、以下の諸点を指摘し、その後の古道や条里研究の嚆矢となった。(注1) 壬申の乱の時点で大和に上ツ道・中ツ道・下ツ道の3道が南北に通じ、河内には東西に通じる大津道・丹比道があり、大和・河内を結ぶ竜田道・大坂道・石手道があった。

- ①大和京南条里は先行して設置されていた3道のうち下ツ道を基準にその道路幅を除外して設定された。
- ②丹比道は竹内街道、大津道は長尾街道にあたとみられる。
- ③難波から南に向かい竹内街道を結ぶ南北縦貫道路が想定できる。



第91図 大和・河内の古道 (原図 岸俊男「古道の歴史」1970)



第92図 大阪平野南部の築里遺構と景觀（原図 足利）

- ②竹内街道は大座間池より西では長尾街道の南17町（現竹内街道の南1町）の線が原型とみなせる。
- ③両道の間隔は、7世紀に106mの18倍で設定され、その後109mを基本に条里地割を施行する際、その間を17個の坪で割ったため南北辺長の長い坪並となった。
- ④長尾街道の北18町の陌線O-P（城蓮寺条里基線）で条里施行のずれがあり、この線が長尾街道と106m×19町で設定された古道と推定される。
- ⑤八尾街道は長尾街道の間106m×34で設定されており、陌線A-Bなどと同じ基準尺度である。
- ⑥長尾街道付近の地名に「丹比」が多く、竹内街道近辺に「大津」の地名があることから、岸俊男説③は根拠に乏しく、むしろ逆も考えうる。
- ⑦条里に先行する斜向道路の痕跡が認められる。第11図イーローハーニーホのラインが丹比道、第3図のラインが大津道であった可能性がある。（後に前者を「丹比邑道」後者を「大保道」と呼称する）
- ⑧長尾街道・難波大道・竹内街道・八尾街道は奈良時代前半に、斜向道路にかわって正方位の計画道路として建設整備された。

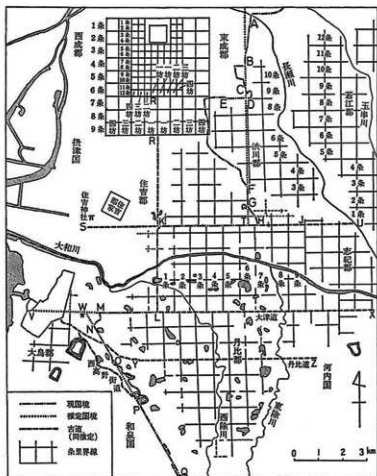
足利説の⑦斜向道路の観点は斬新で、その成果は今なお最も高い到達点にあるといえよう。

(4) 服部昌之説 (第94図)

服部昌之は条里と国郡界の関係を考察した結果、以下の点を指摘した。

- ①住吉郡（摂津国）と丹比郡（河内国）との境（K-T）は、南北に連続する条里1町方格の中央を東西にはしており、その延長は淡川郡と志紀郡との境界となっている。
- ②摂河の直線国境となっているK-T間・K-L間は同じ3600mで、1町106mの古地割（34町分）で設定されたと考えられる。
- ③この境界は、後の八尾街道となる東西方向の計画的直線道路で、「磯齒津路」にあたると思われる。
- ④これら直線国境は難波京の都市プランと難波と大和を結ぶ直線道路の測量・建設と関連して直線的に計画・建設されたもので、時期は天智天武期ないし孝徳期ころまでさかのぼりうると推定される。
- ⑤和泉・河内国境は8世紀中期に道路の建設と関連して直線状に画定されたと考えられる。

服部はその後、足利説斜向大津道（大保道）を「茅渚道と解しうる可能性も



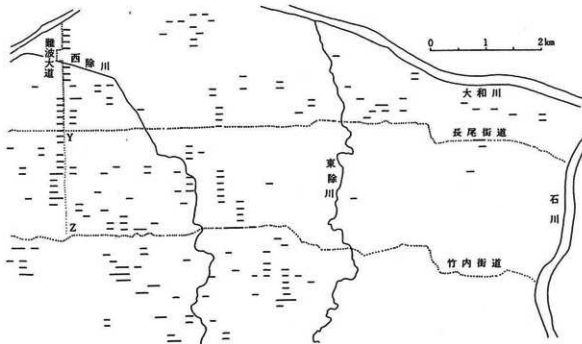
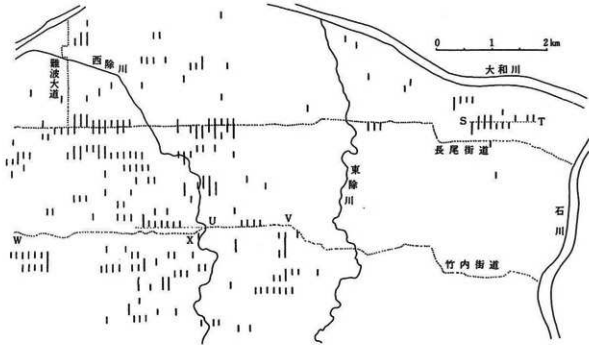
第94図 摂津・河内・和泉の国境 (原図 服部)

潜んでいるように思われる」と指摘している。(注4)

服部説③八尾街道=磯齒津道はその後の研究においても支持されている。

(5) 金田章裕説 (第95図)

金田章裕は、足利説をはじめ関連する諸説を検討し、「足利説が依然として最も有力な考え方である。」と評価した。また、大和の上中下道・近江の東山道とそれぞれの条里との関係から「道路幅を考慮しない条里地割が、それを考慮した条里地割に比べ、少なくとも施行原理としては早いものであった」と推定しその後の作業仮説としている。諸説を検討の結果、道路幅員の問題や、条里プランとの関わりにつ



第95図 条里地割の辺長が115.5m以上の坪の分布と古道 (原図 金田)

いて、なお検討の余地があるとし、現大和川以南約6kmの範囲の条里坪の辺長を縮尺3000分の1地形図上で測定した図を作成して検討した結果、以下の諸点を指摘した。

- ①南北辺長の著しく長い坪の分布は、長尾街道のルート上と、その東の直線延長上に分布している。
- ②①から、長尾街道は、いずれかの時期に一定の幅員を有する東西方向の直線道として測設され、条里地割はその幅員部分を除いて設定されたとみられる。
- ③同様の作業から、竹内街道は長尾街道の南16町のラインと推定する。
- ④東西辺長の長い坪は、難波大道ルートにそって分布しており、それは長尾街道を越えて南に直線が続いている。

これらの事実のうえにたつて、金田は慎重に「長尾街道・難波大道付近の条里地割は、8世紀に入ってから、両道の幅員を除外してその原型が設定されたか、少なくともその設定原理が確定され、8世紀中頃に条里呼称法が導入されたときにも両道はその基準線になったことになる。」と述べて、検討作業の結果として、基本的には足利説と整合する結論を導いている。(注5)

金田説は、道路幅員という要素を地割の検討に取り入れ、その観点から古代道路の位置を検証した点を評価すべきであるが、道路幅員を除外して設定されたと結論付けた計画道路の設定距離の検証と、尺度には慎重にも踏み込んでいない。これは、たとえ大縮尺の地形図での計測を行っても、道路幅員程度の距離は、計測地点での数値のばらつき範囲に入ってしまうことからくる、いわば方法的な限界を十分認識されているがゆえであろう。

(6) 松田正男説

松田正男は、松原市教育委員会による発掘調査成果をもとに、長尾街道は7世紀に遡りうる古道であるとし、「大津田」の小字などからこれが難波大津と飛鳥を結ぶ「大津道」にふさわしいとしている。竹内街道については、①屈曲が多すぎる②長尾街道との間隔が高麗尺での里の整数倍にならない③長尾街道との間は条里で17坪となり一里六坪の完数にならない④古道遺構が検出されていない、ことを理由に直線的計画古道ではなく、丹比道でもないと考えた。

そして、以下の点から古代丹比道は大座間池の南を東西に通るルートであると考えた。(注6)

- ①文政ごろの絵図、明治18年の陸測図に道路が表されており、このルート上の今井集落の東方に「大道端」「大道ノ下」「大道ノ上」の小字名が残っている。
- ②長尾街道との距離が、高麗尺1尺を35.45センチとして7503尺となり、7500尺=5里の完数となる。
- ③長尾街道との間には条里24坪分あり、4里の完数となる。
- ④このラインが田村界となっている。

松田説のうち論点②は特に魅力的であるが、距離の計測に1万分の1地形図を用いていることは、尺度を問題にするうえで精度に問題があり、大縮尺地形図での検証が必要である。

(7) 考古学的調査成果

歴史地理学的な研究結果とかみ合うような考古学的な調査成果も発表されてきた。

大和川今池遺跡の発掘調査によって検出された南北方向の2条の平行した溝に注目した森村健一は、これを古代の道路側溝と位置づけ、その位置と方向からそれを「難波大道」とよんだ。溝心々距離は19m、道路幅は18mで、総延長170mを検出している。溝出土の遺物は7世紀代の須恵器などである。その後の調査でも延長ライン上に溝が検出されており、道の遺構として確実なものとおもわれる。(注7)

松原市教育委員会による発掘調査においても重要な調査成果が発表されている。ひとつは、長尾街道

に関するものである。松原市上田2丁目（第100図①地点）の発掘調査で、長尾街道の道路中心から南に約10m離れた地点に東西方向の溝（幅1.7m・深さ0.3m）が検出され、出土遺物から7世紀初頭にはすでに掘削されていたと考えられている。

また、松原市新堂2丁目（第100図②地点）の発掘調査では、足利説斜向丹比道（丹比邑道）に合致する位置に、木製の橋の遺構が検出されている。

松原市立部1丁目（第100図③地点）でも、足利説斜向丹比道（丹比邑道）ラインに残る水路の延長線に、主に8世紀の遺物を含む埋土で埋没した水路が検出されている。（注8）

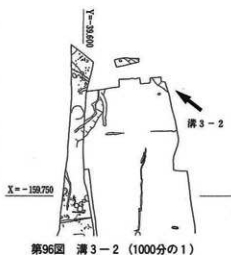
3 丹上遺跡内の古道推定地点の発掘調査結果

丹上遺跡の発掘調査は、北端では竹内街道が北西方向から東西方向に向きを変える屈曲点に近い部分を、そのすぐ南では岸・足利説原竹内街道を横断して実施することとなった。また南端近くでは、松田説丹比道を横断して発掘調査をおこなっている。まず、それぞれ問題となる地点の調査結果を再検討、評価してみよう。ただし、古道に比定されているルートそのものは、現在も幹線道路として機能しているところであり、発掘調査が不可能であったため、その成果も「隔靴搔痒の感」を免れない。

①溝3-2（第96図）

足利説の斜向道路「丹比道」の南に位置して、この地割と平行の溝が検出されている（第114図）。溝はMトレンチの北端および北東端で検出した。溝の途中部分は調査区外となり、部分的な調査となったが、溝の南岸部延長約20mと底の一部を確認している。

溝の規模は、南岸部の上場・下場から推定すると幅3.2～4.3mという数値を測る。深さは約1mである。溝の断面は逆台形状を呈し、その流れの方位はおおよそN-55°-Wとなり、調査地付近より松原市新堂方面に伸びる斜行地形とほぼ同一のものである。遺物は、上部の赤灰色シルト層からは土師器の小片が40～50片、下部の灰褐色粘土層からは土師器の小片が少し出土しているが、いずれも細片のみで時期は不明であるが、逆に中世に一般的な瓦質土器や近世の陶磁器類が出土していないことは、この溝が古代に遡る可能性を十分に示しているといえよう。

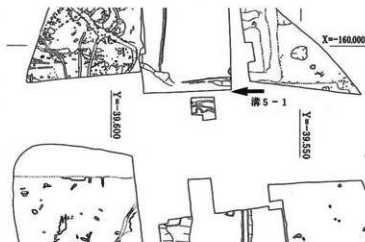


第96図 溝3-2（1000分の1）

このことは、松原市新堂2丁目遺跡で検出された斜向道路推定線に合致する木製橋の遺構とあいまって、足利説の古代道路の存在を裏付けるものといえる。ただし、出土遺物から時期の確定までには至っていない。

②陌線I（溝5-1）（第97図）

岸・足利説「原竹内街道」地点にあたる。この「原竹内街道」の位置に重なって大阪中央環状線が東西に建設されており、調査時点ですでに美原



第97図 陌線I（溝5-1）（1000分の1）

ロータリーの真ん中にあった。中央環状線建設前は、東西方向に水路があって、両氏の説はこれを基準線としている。

溝は、その南半分が後世の水路および現代の水路改修工事によって削平を受け、西側は現代の池によって切られているが、長さ13.2m・幅2.2m・深さ0.8mの部分が残存していた。溝の埋土は、大きく分けると新、旧の2層に分かれる。上層20cm余りは中粒砂が均一に堆積しているが、その下部では上方に粗砂、下方にシルト、粘土が堆積していた。また遺物は、白磁、瓦器などの中世遺物の細片が出土している。

このことから、溝は中世に遡って機能していたことがわかるが、残念ながら古代に遡る道そのものの遺構は検出されていない。

位置的にみると、この陌線Ⅰの溝は、 $X=-160.012$ の位置をとおり、丹上遺跡（その1）の調査地を南北方向に貫いた条里阡線Ⅰの溝1-22に直交しており、（その1）調査の際に北端で検出された陌線Ⅱの坪境-Aからは、約116mの距離を測る。また条里坪1町北の現竹内街道との距離は、3000分の1地形図での計測で平均124m程度となり、金田章裕の指摘した道路幅員との関係も検討する資料となり得る。

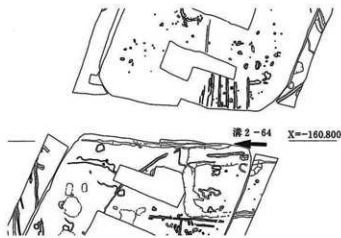
③陌線Ⅶ（第98図）

松田説「丹比道」にあたる。現在の道路の南に、これと平行の溝2-64が検出されている。中世14世紀ごろには埋没しているので、掘削はそれ以前であるが、奈良時代にまで遡り得る証拠はない。また道路側溝としての機能をもつものか、灌漑水路であるかは判断しにくい。ただ、1町南の陌線Ⅷの条里坪境溝の埋没状況と似た灰色粘土で埋没していることから、中世（以前）においては坪の周囲をめぐる灌漑水路であった可能性が高いと考えられる。

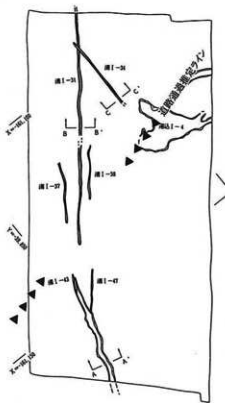
現代道路によって調査不可能であった部分は幅9mから10mであるから、松田氏の言うように現道路下に埋没している可能性は否定できない。

④足利脱斜向大津道（大保道）（第99図）

丹上遺跡はこのルート推定位置には該当していないが、丹上の南に接する真福寺遺跡調査区がこの位置にあたる。真福寺遺跡の発掘調査では、道路に直接関係する遺構は



第98図 陌線Ⅶ（溝2-64）（1000分の1）



第99図 真福寺遺跡足利脱斜向大津道（大保道）

検出されていないが、奈良時代の溝が、道路推定位置で途切れていることが注目される。(注9)

丹上遺跡ではN-70°-E方向をとる飛鳥時代の溝2-115が注目される。位置的には推定通過地点から北に250m程度離れているが、ほぼ同一の方位をとることに注意しておきたい。もし、道路と同方向の地割が周辺に広く認められれば、それはすなわち道路を基準とした斜向地割が施行されていたことを示すからである。

以上の結論として、3ヶ所の古道推定地付近では、それに関連する可能性のある遺構が検出されているものの、道路そのものの存在や時期を確定する資料は得られていないといえる。

4 条里地割の発掘調査結果

条里に関連すると考えられる遺構のうちで、最も古く遡る可能性のあるものは、陌線Ⅱの南約5mで検出された溝1-1である。奈良時代の掘立柱建物1-4が廃絶した後に掘削されているが、埋土から奈良時代のもので推定されている。その後、10世紀になって掘立柱建物が建てられる頃には現地表の条里と同位置に溝1-18が掘削されていることから、この時期には条里地割が施行されていたことは確実である。中世になると、現地表の景観の原景観というべき地割がほぼ全面に展開している。

したがって、発掘調査結果では、現地表の地割は古代の地割を基本的に踏襲しており、現地表地割の計測による旧地割や古道の復元考察が、方法的に問題のないことが確認できる。

さて、丹上遺跡の発掘調査によって検出された中世の坪境の位置と距離は以下のとおりであった。

陌線位置	南の陌線との間隔
陌線Ⅰ 岸説丹比道 (X = -160.012付近)	116m
陌線Ⅱ (X = -160.128付近)	110m
陌線Ⅲ (X = -160.238付近)	115m
陌線Ⅳ (X = -160.353付近)	101m 105m
陌線Ⅴ (X = -160.454・X = -160.458付近)	113m 87m
陌線Ⅵ (X = -160.567・X = -160.545付近)	116m 138m
陌線Ⅶ (X = -160.683付近)	118m
陌線Ⅷ 松田説丹比道 (X = -160.801付近)	106m
陌線Ⅸ (X = -160.907付近)	

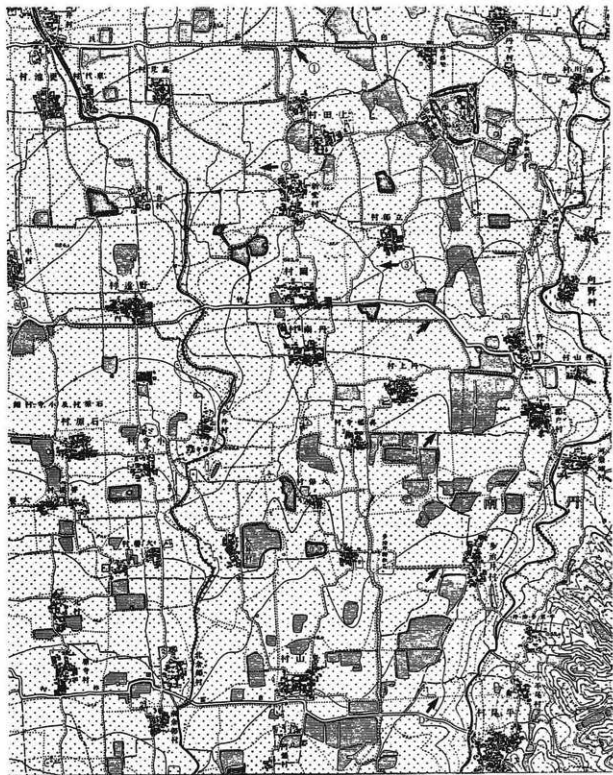
陌線Ⅰ～Ⅸまでの陌線間の平均距離は110.75mである。この数字は、足利説③の根拠となった長尾街道と原竹内街道間の距離から計測された1坪の南北平均長111.9mあるいは112.2mと、通常の坪辺長109mの中間的な数字となっている。ただし、後述するようにⅠ～Ⅷまで陌線間の平均距離は112.7mとなっており、それ以北の辺長と大きな差は無い。そこで調査結果だけからの評価は難しいので、調査区以南の道路推定線あるいは条里基線推定線を抽出し、その距離を計測することにより丹上遺跡の地割の評価を行いたい。

5 調査区以南の東西道路 (第100・103図)

まず、付近小字に「大和道」と表されているCラインをあげておきたい。作業では、多治井神社参道の東西道路と太井村・大栗村の南を東西に結ぶ道路が明治17年陸測図に表示されていることを手がかりに、周辺の小字を調べると「大和道下」「呉橋」「呉橋」などがこのルート上にあることから道の存在を推定したのであるが、現多治井神社参道(小字は「馬場表」など)がいつまで遡れる道であるのかはなお検討を要する。馬場と称されている参道すぐ南には、東西に直接連続しないが、鏡形に畦畔がずれ

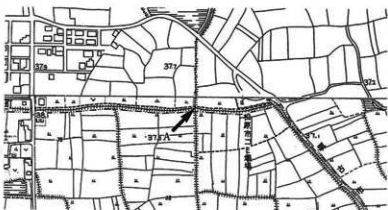
ている耕地境が東西にならんでおり、これが坪境の基線となる可能性が高いと考えて計測した。

丹上遺跡以南の古代道路で最も注目すべきは「茅渚道」である。そのルートについては、瀬川・直木らの提唱した、喜志から平尾遺跡、黒山集落の南、北余部と南余部の間を東西にとおり、原寺集落の南から西南西に向かうルートが有力である。(注10) このルートは近世の富田林街道と一部重なっている。富田林街道は舟渡池と芋池の間を東西にとおり、東南東に平尾集落に向かうが、ここでは黒山・北余部

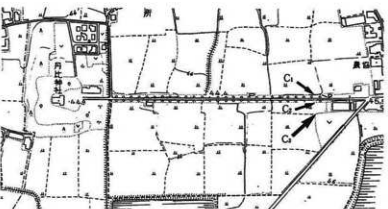


第100図 調査区以南の東西道路

間の直線を延長した、舟渡池の北にある芋池の北岸を通る東西ルートが連続した大字境になっていることを重視し、また「高橋」「板橋」「石橋」などの小字があることを根拠に、これを道路遺構かつ条里基線の可能性の高いラインとしてあげておきたい。ここでは「茅渚道」にあたるかどうかは保留して「平尾道」Dラインと仮称する。(注11)



この2つのラインを加えて、調査区以南の東西道路または条里基線の距離を昭和37年3000分の1地形図で計測した結果は下表のとおりである。A・Bは同じ戸線上、A・B・C・D各点は南北に直線の位置にあるが、C・D点は戸線位置がずれているため条里坪境戸線上にのっていない。図上の測定では0.5mm単位での読み取りであるので1.5m程度の誤差が生じ得る。



区間	距離(m) ^a	坪数	平均坪辺長m	a/106m	a/109m
A-B	792	7	113.14	7.47	7.26
A-C 1	1725	16	109.25	16.27	15.83
A-C 2	1734			16.35	15.90
A-C 3	1748			16.49	16.04
A-D 1	2616	24	109.00	24.68	24.00
A-D 2	2628			24.79	24.11
B-C 3	956	9	106.22	9.01	8.77

第101図 調査区以南の道路間隔測定位置(5000分の1)

6 竹内街道以南の条里地割基線

前項に示した計測の結果、注目すべきはA-D間（竹内街道・平尾道間）が109mを基準に設定されていると、認められることである。条里地割をみると、この間全体に24個の坪が2616mに見事に収まっており、その南北辺長は平均109mとなっている。

ただし、この区間内での坪地割の実態は複雑で、坪の辺長は道路推定線を境に各区間で多様である。A-B間は792mに7つの坪があり、辺長平均が113mとなって、長尾・竹内街道間の坪辺長と同様に長くなっている。B-C間は956mでこの間の9つの坪の南北平均辺長は106mと古い基準尺に合致している。しかし、一方でこの区間を含むA-C間全体では1748mとなって、この間の16個の坪の平均辺長が109.25mとなっている。106mで設定されたようにみえるB-C間の問題は、後に検討するとして、竹内街道・平尾道間全体として109m基準で地割が施行されていることをまず確認しなければならない。従って、竹内街道以南の条里地割は、109mを基準に施行されたものと見てよく、その北部にあたる調査区付近のBライン（松田説丹比道）までは、長尾街道・竹内街道間の地割辺長を踏襲して施工され、全体としては109mの基準で施行されたといえる。条里地割は原竹内街道から4里南の「平尾道」がその施行基線となっていたと考えられるに至った。このことは「平尾道」が古代の「茅渚道」にあたるかどうかについても、ひとつの判断要素にもなってくると思われる。

以上の検討によって、平尾道ルートが8世紀以降に条里地割の全体的施行に伴って設定された可能性が高いことを示しており、106m基準で設定されたと考えられる八尾街道・長尾街道・竹内街道とは設定基準あるいは測設時期が異なる可能性が高いことを示している。

そこで再度、北から「八尾街道」「城蓮寺条里基線」「長尾街道」「竹内街道」「松田説丹比道」「大和道」「平尾道」の距離と尺度を表にすると以下ようになる。（第102図）

阪田計測	1998m・1992m		1905m	2616m=109m×24=4里		
松田説			2616m×35.45m×7500=5里	高麗尺		
足利説	106m×15	2016m=106m×19+2m	1908m=106m×18			
服部説	3600m×106m×34					
秋山説	令大尺=35.28cm 3580m×10000尺		2 : 1 1770m×5000尺			
八尾街道	城蓮寺条里基線	長尾街道	竹内街道	松田説丹比道	大和道	平尾道

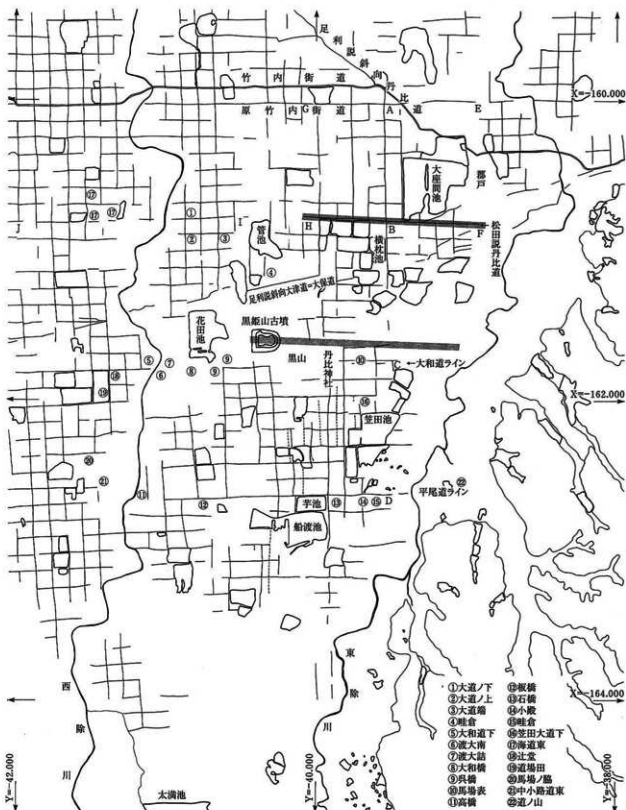
第102図 古代道路の測設距離と尺度

7 竹内街道以南の条里地割の実態（第103図）

前節の検討によって、東西方向の条里基線は、原竹内街道と平尾道ライン間では109mを単位として設定されたことが確認されたものの、その間の小区域においては、南北方向の辺長に関してみればやや複雑な構造をもっていることがあきらかとなった。また、現地における南北方向の阡線方向などの実態からみた施行単位は必ずしも先の陌線でみた基線と対応していない。そこで再度、竹内街道以南の条里地割の実態を、昭和47年大阪府作成2500分の1地形図を縮小編集した1万分の地形図（『大阪府文化財分布図』1977年）より作成した第103図から検討してみたい。

先の計測によって、A・B間は792mであった。しかし同一陌線間の距離を計測しても、E・F間では810m、逆に西側のG・H間は750mとなる。H付近では道路が北にふくらんでいるので極端に数値が小さいが、それを差し引いてもA-EとB-Fが平行でないことがわかる。

このことは、H・B・Fライン（松田説丹比道）が東で約2度南に偏していることによるものである。



第103図 竹内街道以南の桑里地割 (2.5万分の1)

陌線が同様の傾向を持つ区域は、H・B・Fラインの1町北の大座間池南端付近から、南は黒姫山古墳から東に延長したラインまで、西は菅池・黒姫山古墳を結ぶラインで囲まれる範囲である。また、大座間池北堤のラインも、同様に東で南に偏する方位をとることを見れば、同様の地割が大座間池一帯に及んでいた可能性もある。この区域の条里を仮に「大座間池条里」と称しておく。これ以外の地域においては、陌線は東でやや北に偏している（原竹内街道は0度35分、H・B・Fライン（松田説丹比道）を西に延長したI・Jラインは0度45分、平尾道ラインは1度40分）。この区域が周辺の地割と異なった方位で、しかも先に検討したように南北距離は106mの尺度で設定されていることに注目しておきたい。ただし、陌線間の距離、言い換えれば東西の坪辺長の平均は111m強となっている（H-B-F間）。

次に注意すべき区域は、黒山集落南部の条里地割である。（仮に「黒山南条里」と呼ぶ。）ここでは、陌線の方位がやや東にふれ、位置が以北の地割と連続していない。また、北部の陌線の延長が部分的に重複し、北に展開する「大座間池条里」の陌線に連続しているかのようにみえる区域もある。陌線で見ると「大和道」ラインの少し北から南は舟渡池南西に至る範囲にあたる。この区域の条里について、『美原町史』では古代末から中世にかけて洪水による農地の大規模な壊滅があったことを想定している。

8 丹上遺跡周辺の斜向地割

第104図は昭和37年大阪府作成の3000分の1地形図に、昭和17年大阪市撮影の航空写真及び昭和47年大阪府撮影から読み取れる耕地1筆ごとの境界を加筆して作成した地形図である。

この図を見ると、丹上集落の近辺では、正方位の条里坪境に整合した畦畔や水路が認められながら、全体として北北西に偏した耕地境や水路が多数認められる。通常、条里地割に整合しない地割の原因は、埋没した河川の痕跡であったり、現地表においても直線的に地割が不可能のような谷地形が想定される。しかし、丹上遺跡の発掘調査においては埋没河川や谷地形は認められず、土層の堆積状況は安定した状況を示しており、斜向する地割の必然性は地形環境からは説明できない。

第104図の朱線は、発掘調査によって検出された飛鳥時代の遺構のうち、直線方向をとるものである。朱破線は、現地表の地割のうち斜向地割と平行あるいは直角の方位をとるものである。斜向地割は国家座標に対して東に78度ふれているが、これと同方位あるいはほぼ同方位をとるものを含めると、丹上集落周辺の斜向地割の多くが足利説斜向大津道の地割方向に一致していることが読み取れる。

また、大座間池の南にも同方向の地割があって、ひとつは五軒屋付近で竹内街道に直線的につながるものがあるとともに、同方向の地割が複数（以上）認められる。これらは道路痕跡というよりまさに地割（痕跡）といえよう。これらの地割が確認できる範囲は、現在のところ丹上遺跡周辺であって、足利説斜向「丹比呂道」「大津道」が交差する付近で、両道に挟まれた部分である。

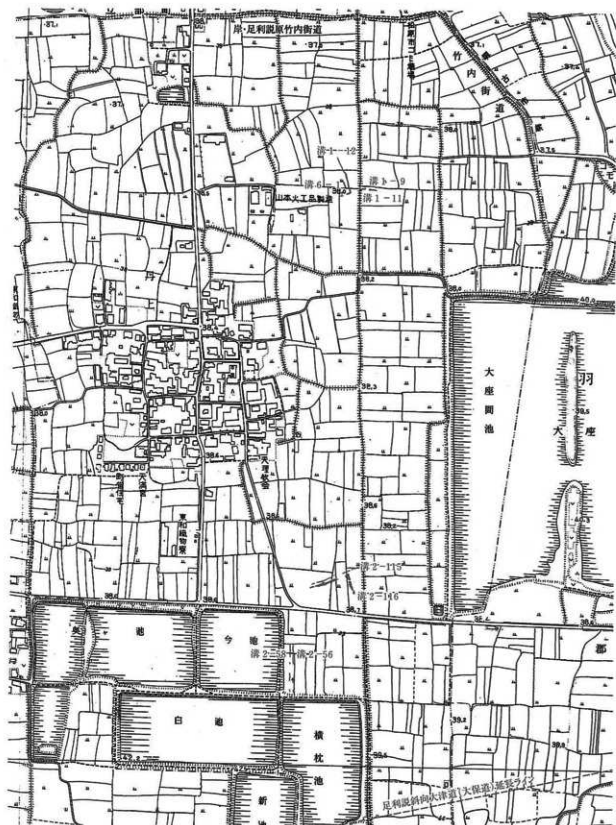
一方、発掘調査で検出された飛鳥時代の遺構の方位は、大きくは北北西方向をとりながらも、その偏角は若干異なっている。溝1-12と溝6-1はN-19°-W、溝2-115・116はN-70°-Eとなるので、これらの遺構まで「ほぼ同方位」に含めると牽強付会のそしりを免れないが、この方向の地割は、丹上遺跡で検出された遺構と同様に飛鳥時代に遡る可能性が高いと思われる。

足利説斜向大津道（大保道）が単に直線的な計画道路にとどまらず、これにそった地割が部分的であったも施行されていた可能性を指摘しておきたい。

9 まとめ

最後に、前節までの検討結果の解釈を試みてこの小論のまとめとしたい。

まず、丹上遺跡の発掘調査成果から考えられる周辺の開発はおおよそ以下のようであった。7世紀以



第104図 丹上遺跡周辺の斜向地割 (5000分の1)

降になると、溝などの遺構が形成され、遺物の出土が顕著になる。7世紀にはいってこの地域の開発が開始されたことは確実である。8世紀初頭には官衙風の大型掘立柱建物が造営されるが、8世紀後半には途絶え、その後10世紀になって1軒3棟程度の掘立柱建物5・6軒で構成される村が形成されるが、

これも同位置には1世紀と継続していない。

このような認識にたつて丹上遺跡にかかわるいくつかの問題について考えてみる。

第一に、丹上遺跡周辺の斜向地割の問題である。これは足利健亮が注目した条里以前の古代道路「大保道」が7世紀には存在し、それを基準として施行された地割である可能性が高いと考えられる。7世紀の集落こそ未だ発見されていないが、周辺に存在することは確実である。7世紀の溝のなかでは、地形にそって蛇行または弧状を呈するものが多く、直線的なものは少ない。従って、この時期の耕地開発が隔々に至るまで計画的で「国家的」であったふうにはみえない。しかしこのなかに、少数でも計画性が認められる直線的な溝のような遺構を評価すべきであると考ええる。この点でも、丹上遺跡周辺はこの付近でも早く開発に着手された重要な地域であったといえよう。これは、足利健亮が主張する2つの古代斜向道路がこの付近で合流するという地理的な位置とも関わってこの遺跡を特徴付けることである。

第二に、大座間池南方・黒姫山古墳東方の偏向方位を持つ地割「大座間池条里」の解釈と評価の問題である。この区域の地割が他の区域の条里地割と異なった方位と尺度をもつことについては、論理的にはいくつかの解釈が可能である。

ひとつの解釈は、施行時期あるいは施行基線の設定時期は同じで、基線の方位が異なっているという解釈である。この場合、7町ほど北に同時に測設された東西方向の直線道路である原竹内街道などとならんで、あえて方位と尺度の異なる地割基準が採用された理由の合理的説明が困難である。

とすれば、施行時期、あるいは施行基線の設定時期が他の区域より早い、または遅い、と解釈せざるを得ない。先に述べたように、この地域の開発が7世紀に遡るという認識に立つて、「大座間池条里」は付近一帯の条里地割の施行に先行するものと考えたい。

その根拠は、やはり106mを基準尺とした基線が設定されていたと考えられるからである。先にみたように、B-C3間の距離は956mで、この間に9つの坪が収まり、その平均坪辺長は106.2mである。またその基線の設定には、黒姫山古墳（あるいはその中軸線）が基準となっていた可能性が高いと考えられる。

このように解釈したうえで、106mを基準尺として測設されたと考えられる八尾街道・長尾街道・竹内街道と、それら道路を基準として広範囲に施行された条里地割との関係についての考えを整理しておきたい。私は、丹上遺跡の南を通る斜向直線道路（足利「大保道」が「丹比道」あるいは「大津道」に該当するのかどうかについては判断を保留するが、7世紀には存在したとする足利健亮の説を、丹上遺跡の調査成果から支持し、長尾街道が「大津道」で竹内街道が「丹比道」にあたり壬申の乱以前に存在したとする説はとらない。八尾街道・長尾街道・竹内街道が設置されたのは、それより遅れて7世紀末から8世紀初頭ごろと考えている。その根拠は、丹上遺跡の正方位に配置された官衙風の大型掘立柱建物为正方位の直線道路測設に連動して建設された施設であると考え、この建物の掘形出土遺物の時期から道路測設時期を推定したからである。なお、建物自体については稿を改めて検討したい。

さて、「大座間池条里」を含む竹内街道以南の条里が、全体として109mを基準尺として設定されたことは、原竹内街道と「平尾道」間（第101図A-D1間）の距離が正確に109mの24倍になることから明らかである。即ち、106m基準の「大座間池条里」を抱え込むように、全体として109m地割が南北24坪にわたって貫徹されているのである。このことは、逆に109m地割の条里施行以前に106m基準の地割またはその基線が存在したことを証明するものでもある。

最後に、このように丹上遺跡周辺の開発史を見たとき、狭山池の存在は欠かせない。この時期の開発

の契機が狭山池の築造であったであろうことは容易に想像できる。狭山池から丹上遺跡に通じる灌漑水路等の直接的な証拠は発見されていないが、いずれ明らかになるであろう。古市大溝は言うに及ばず、この地域の下流にあたる松原市で検出された「丹比大溝」のような水路が7世紀に開削されていたことは間違いないと考える。

7世紀初頭に築造された狭山池は、築造当初からしっかり段丘面上の開発の基本的な条件である灌漑機能を果たしていたといえる。その灌漑範囲がどこまで及んでいたか、灌漑水路の整備がどれほど整っていたかによって、段丘上のそれぞれの区域における開発の様相は異なっていたと思われるが、概ね美原町域は狭山池築造当初の灌漑可能区域にはいていたように思える。市川秀之が強調した天平3(731)年の「狭山下池」の築造や天平宝字6(762)年の狭山池堤防の大規模な嵩上げは、貯水量を飛躍的に増加させて灌漑可能範囲を拡大し、基幹水路が整備されて、下流の松原市域を含めた丹比郡全域の開発として結実したと考えられる。

- (注1) 岸 俊男「古道の歴史」(『古代の日本 5 近畿』1970)
岸 俊男「飛鳥と方格地割」(『史林』53-4 1970)
- (注2) 秋山日出雄「日本の古代道路と一步の制」(『橿原考古学研究所論集 創立35周年記念』1975年)
- (注3) 足利健亮「摂河泉の計画古道について」(『古代を考える』8 古代を考える会 1976)
足利健亮「条里制」(『松原市史』第1巻 1985年)
足利健亮「大阪平野南部の古道について」(『人文』京都大学教養部28 1982 『日本古代地理研究』1985所収)
足利健亮「大阪平野の古代要路網」(『宗教の路・舟の路 歴史の道調査報告書第7集』大阪府教育委員会 1991年)
- (注4) 服部昌之「古代における直線国境について」(『歴史地理学紀要』17 1975 『律令国家の歴史地理学的研究』1983所収)
服部昌之「条里と交通路」(『大阪府史 第2巻』1990)
- (注5) 金田章裕「長尾街道・竹内街道の測設と条里プラン」(『長尾街道・竹内街道 歴史の道調査報告書第3集』大阪府教育委員会 1988)
- (注6) 松田正男「古代丹比道の復元」(『大阪春秋』第72号 1993)
- (注7) 森村健一「難波大道の復元」(『大和川・今池遺跡Ⅲ』大和川・今池遺跡調査会 1981)
- (注8) 松原市教育委員会 報道提供資料他 調査資料については足立俊彦氏・芝田和也氏・岡本武司氏からご教示を得た。
- (注9) 『真福寺遺跡 調査の概要』大阪府教育委員会 (財)大阪文化財センター 1986
『真福寺遺跡』大阪府教育委員会 (財)大阪府文化財調査研究センター 1997
- (注10) 瀬川 健「平尾遺跡の構造について」(『古代を考える』2 古代を考える会 1976)
直木孝次郎「茅渚道について」(『美原の歴史』第3号 美原町教育委員会 1978)
直木孝次郎「古代の交通」(『美原町史』第1巻 美原町教育委員会 1999)
- (注11) 服部昌之「美原町の字図」(『美原の歴史』第1号 美原町教育委員会 1975)による。

表4 遗物番号对照表

坪园番号	遗物番号	图版番号	遗物番号	假组番号	假组园番号	假组遗物番号	遗物名称番号
7	1	76	1	2	5	2	
7	2	76	2	2	5	1	
7	3	62	1	1	5	1	
7	4	62	4	1	5	4	
7	5	62	3	1	5	3	
7	6	62	2	1	5	2	
7	7	76	5	2	5	5	
7	8	76	6	2	5	6	
7	9	63	2	1	5	6	
7	10	63	3	1	5	7	
7	11	63	4	1	5	8	
7	12	63	1	1	5	5	
7	13	64	11	1	5	11	
7	14	64	1	1	5	12	
7	15	64	13	1	5	21	
7	16	64	2	1	5	9	
7	17	76	4	2	5	3	
7	18	64	3	1	5	20	
7	19	76	3	2	5	4	
7	20			6	8	1	土坑出土
7	21	64	5	1	5	19	
7	22	64	7	1	5	15	
7	23	64	8	1	5	16	
7	24	64	10	1	5	10	
7	25	64	14	1	5	22	
7	26	64	6	1	5	13	
7	27	64	4	1	5	14	
7	28	64	9	1	5	18	
7	29	76	7	2	5	8	
7	30	76	8	2	5	9	
7	31	76	9	2	5	7	
7	32			1	5	17	
7	33	76	10	2	5		石瓶丁
8	1	77	2	7	82	1	丹上1号墳
8	2	77	3	7	82	2	丹上1号墳 (溝7-14)
8	3	77	1	5	6	1	丹上1号墳 (溝3-5)
9	1	77	5	2	10	1	土坑2-216
9	2			2	10	2	土坑2-216
9	3			2	10	3	土坑2-85
9	4	77	4	2	10	4	土坑2-134
9	5			2	10	5	土坑2-131
10	1	78	1	7	82	7	溝7-23
10	2	78	3	7	82	4	溝7-23
10	3	78	2	7	82	6	溝7-23
10	4	78	4	7	82	3	溝7-23
10	5	78	5	7	82	5	溝7-23
10	6	78	6	7	82	8	溝7-23
10	7	78		7	82	9	溝7-23
13	1	66	c1	1	13	1	溝1-5
13	2	66	c2	1	13	2	溝1-5
14	1			1	15	1	溝1-8
14	2	66	d	1	15	2	溝1-8
14	3	67	a1	1	17	4	溝1-9
14	4	67	a2	1	17	2	溝1-9
14	5	67	a3	1	17	3	溝1-9
14	6	68	a	1	18	1	溝1-11
14	7	67	b	1	17	1	溝1-9
15	1	68	b2	1	22	4	溝1-17
15	2	68	b1	1	22		溝1-17
15	3	69	a2	1	22	3	溝1-17
15	4	69	a1	1	22	2	溝1-17

押印番号	遺物番号	図版番号	遺物番号	概報番号	概報図番号	概報遺物番号	遺構名称番号
15	5	78	8	2	15	1	溝2-3
15	6			2	15	4	溝2-3
15	7			2	15	2	溝2-3
15	8	78	13	2	15	3	溝2-3
15	9			2	15	5	溝2-3
15	10	78	7	2	15	6	溝2-3
15	11			2	15	7	溝2-3
17	1	68	c	1	22	1	溝1-17
18	1	78	8	2	17	1	溝2-2
18	2	78	9	2	17	2	溝2-2
18	3			2	17	3	溝2-14
18	4	78	10	2	17	4	溝2-14
18	5	78	12	2	17	11	溝2-33
19	1			2	17	6	溝2-102
19	2			2	17	8	溝2-102
19	3			2	17	7	溝2-102
20	1			2	17	10	溝2-59
20	2			2	17	9	溝2-59
20	3	79	1	2	11	1	溝2-53
20	4	79	2	2	11	2	溝2-53
20	5	79	3	2	11	3	溝2-53
20	6	79	4	2	11	4	溝2-53
20	7			2	13	1	溝2-56
20	8	79	6	2	13	2	溝2-56
20	9			2	13	3	溝2-56
20	10			2	13	6	溝2-56
20	11			2	13	4	溝2-58
20	12			2	13	5	溝2-58
28	1	65	1	1	11	1	柱形2 (62)
29	1	65	b1	1			掘形2 (46)
29	1	65	b2	1			掘形4 (溝8・18)
32	1	65	c1	1	11	2	ビット1-3
32	2	69	b	1	25	1	土坑1-5
32	3	69	c	1	25	2	土坑1-6
32	4	66	a1	1	11	4	ビット1-1
32	5	66	a2	1	11	3	ビット1-2
35	1			2	28	1	掘立柱建物2-1・ビット1
39	1			2	21	1	ビット528
39	2			2	21	4	ビット528
39	3			2	21	3	ビット537
39	4			2	21	2	ビット555
39	5			2	21	5	ビット553
42	1	70	a	1	26	1	井戸1-1
43							船橋遺跡
45	1	79	9				土坑6-2-71
45	2	79	10				土坑6-2-71
45	3	79	11				土坑6-2-71
45	4	79	12				土坑6-2-71
45	5	80	1				土坑6-2-71
45	6	80	2				土坑6-2-71
45	7	80	4				土坑6-2-71
45	8	80	3				土坑6-2-71
45	9	80	5				土坑6-2-71
45	10	80	6				土坑6-2-71
45	11	80	8				土坑6-2-71
45	12	80	7				土坑6-2-71
45	13	80	10				土坑6-2-71
45	14	80	9				土坑6-2-71
46	1	81	1	2	23	1	土坑2-41
46	2	81	2	2	23	2	土坑2-41
46	3	81	9	2	23	3	土坑2-41

採回番号	遺物番号	図版番号	遺物番号	概略番号	概略図番号	概略遺物番号	遺構名称番号
46	4			2	23	4	土坑 2-41
46	5	81	3	2	23	5	土坑 2-41
46	6			2	23	6	土坑 2-41
46	7	81	7	2	23	7	土坑 2-41
46	8	81	4	2	23	8	土坑 2-41
46	9	81	5	2	23	9	土坑 2-41
46	10			2	23	10	土坑 2-41
46	11			2	23	11	土坑 2-41
46	12	81	6	2	23	12	土坑 2-41
46	13			2	23	13	土坑 2-41
48	1			2	25	1	土坑 2-42
48	2	81	10	2	25	2	土坑 2-42
48	3			2	25	3	土坑 2-42
48	4	81	11	2	25	4	土坑 2-42
48	5	81	12	2	25	5	土坑 2-42
48	6			2	25	6	土坑 2-42
48	7	81	14	2	25	7	土坑 2-42
48	8			2	25	8	土坑 2-42
48	9			2	25	9	土坑 2-42
48	10	81	13	2	25	10	土坑 2-42
49	1	70	b	1	28	1	不定形土坑 1-1
49	2	70	c 1	1	28	2	不定形土坑 1-2
49	3	70	c 2	1	28	3	不定形土坑 1-2
49	4	70	c 3	1	28	4	不定形土坑 1-2
49	5			1	28	5	不定形土坑 1-2
49	6	70	c 4	1	28	6	不定形土坑 1-2
49	7	70	c 6	1	28	7	不定形土坑 1-2
49	8	70	c 5	1	28	8	不定形土坑 1-2
49	9	71	a 1・a 2	1	28	9	不定形土坑 1-2
49	10	71	a 3	1	28	10	不定形土坑 1-2
50	1			2	20	1	不定形土坑 2-1
50	2	82	1	2	20	2	不定形土坑 2-1
50	3	82	2	2	20	3	不定形土坑 2-1
50	4	82	4	2	20	4	不定形土坑 2-1
50	5	82	5	2	20	5	不定形土坑 2-1
50	6	82	6	2	20	6	不定形土坑 2-1
50	7			2	20	7	不定形土坑 2-1
50	8	82	3	2	20	8	不定形土坑 2-1
50	9	82	7	2	20	9	不定形土坑 2-1
50	10	82	8	2	20	10	不定形土坑 2-1
61	1			6	13	2	土坑 6-1
61	2			6	13	4	土坑 6-1
61	3			6	13	3	ピット 6-8
64	1	82	9	2	33	1	ピット 2-188
64	2			2	33	2	ピット 2-188
64	3			2	33	3	ピット 2-188
65	1	82	10	2	36	2	ピット 2-391
66	1			2	39	2	ピット 2-238
66	2			2	39	1	ピット 2-238
69	1						ピット 2-398
69	2			2	48	1	ピット 2-399
69	3			2	48	2	ピット 2-399
69	4	82	13	2	44	5	ピット 2-613
69	5	82	14	2	44	7	ピット 2-613
69	6			2	44	1	ピット 2-400
69	7			2	44	2	ピット 2-400
69	8			2	44	4	ピット 2-400
69	9			2	44	3	ピット 2-400
69	10			2	44	6	ピット 2-400
69	11			2	48	3	ピット 2-401
74	1	83	1	2	50	1	土坑 2-132

